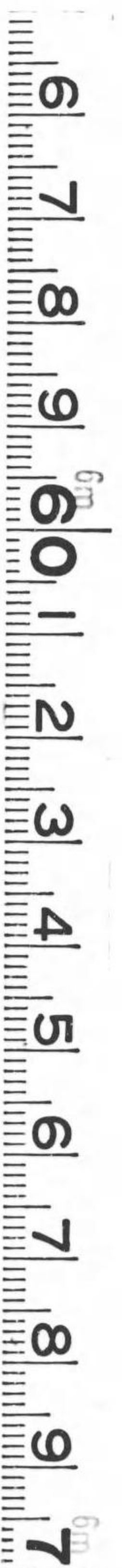


始



ト工5A-40



配論

渡邊一郎譯

大正
15. 11. 27
内交

譯者序言

この書はエドゥキン・キャナン博士の著 *A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848, 3rd edition* の中分配論の譯載である。譯者年來の經濟學說研究に於て此の書の中に思潮理論の幾多新主題を發見し、又常に研究の好同伴として是を座右に備ふるものである。原書は其の名の示すが如く十八世紀より十九世紀の前半に至る英國古典經濟學者の生産及び分配に關する思潮の史的研究なり、然れども内容は唯に史的解説に止らずして批判的解決を與ふるに嚴正周到を極むる。是實に此の書が斯學界に名著たる名聲を恣にする所以である。米國純理經濟學の泰斗ヘイネー教授は其の著 *History of Economic Thought* に於て、嚴密詳悉なりとして此の書を推獎し且つ屢々酷評的なりと評す。然りキャナン博士は全書を通じて誤想を摘出して遺憾なく、酷評に出ずること甚だ多い。而して其の酷評は却つて著者の研究上蘊奥と自信との深遠なるを保障して餘りあるを思はし

ひる。

我國社會經濟思想の推移過程は、惟ふに未だ過渡の時代を脱し得ず、勞働の全所産を要求せんとする社會主義分配論を以て正統社會經濟理論と信ずる一般的思想傾向の濃厚なるを観る。キャナン博士は眞正分配論に相對して誤謬分配論の淵源を辿りて其の誤謬混同を探り、是に代ふるに明晰なる解答を以てする。畢竟社會主義思潮は經濟學史上重要なものに非ずと説く。

翻譯に當り博士の流麗の文章に對し拙劣の譯文を以てするは原書を損ずるの甚しきを慮れども、譯文の美をなさんとして意譯に過ぎ著者の謂ふ眞意義を失ふは更に譯者の恐るゝ所なりしを以て忠實を主眼として直譯に近き譯述をなしたのである。勿論譯文中誤謬を保せられず、研究者の示教を仰ぐは幸是に過ぎず。

終りに望み譯述に際し幾多有益の助言を與へられたる友人諸氏特に青山學院教授古坂崑城氏及び出版に當り厚意に預りたる聚芳閣主人足立氏とに感謝する。

一九二六年七月十三日夕

中澁谷の假寓にて

渡邊 一郎

例言

一 原著書の過半を分配論の名稱の下に單行本として譯述出版したるが故に、其の名稱及び單行本たるとの意義を鮮明にするために、譯者は本書中の章と節との標題を原意義を過分に損せざる反圍内に於て多少の改易をなしたのである。本書の章一、二、三及び四は原書の章六、七、八及び九に通ずるものである。

一 始め著者の序文を譯載せんと思惟したるも、譯者は近き將來に原書の前生生産論の翻譯をも企圖するものなれば、是を後日に譲るを更に至當と考へたるに依り、本書に載せず。

一 本書中アダム・スミス著「諸國民の富 Wealth of Nations」よりの引用文は凡てマツカルツク氏の監輯に成る「諸國民の富」よりの引用文にして、頁も是に順ずるものである。

原著者の主要著書及び編書

A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848

Wealth: A Brief Examination of the Causes of Economic Welfare

Money: Its Connexion with Rising and Falling Prices

The Economic Outlook

The Paper Pound of 1791-1821

History of Local Rates in England

Coal Nationalization

An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations (By Adam Smith, edited with an Introduction, Marginal Summary, Notes and Index)

Lectures on Justice, Police, Revenue, and Arms (By Adam Smith, edited with an Introduction, and Notes)

ナキヤ
分配論目次

第一章 緒論

分配論の概念

第一節	用語「分配」の沿革と賃銀、地代、利潤への分割との符合……	一
第二節	賃銀、利潤、地代の意義……	二
第三節	賃銀の発生と原因……	三
第四節	利潤の発生と原因……	三
第五節	地代の発生と原因……	五

第二章 誤謬分配論

第一節	頭割り賃銀、仙割り賃銀、エカー割り地代……	六
第二節	頭割り賃銀の變動……	八

第三節 仙割り利潤の變動…………… 三二
 第四節 エカー割り地代の變動…………… 三三

第三章 眞正分配論

第一節 全所産の分割、聚合賃銀、聚合利潤、聚合地代…………… 三二
 第二節 労働者への賃銀分配…………… 三三
 第三節 資本家への利潤分配…………… 三八
 第四節 地主への地代分配…………… 三三

第四章 結論

政治と經濟學

第一節 純正科學的見解より見たる生産論と分配論との
 缺陷的特質…………… 三二
 第二節 舊貧民救濟法と穀物條件とに關し生産論と分配

論との實際的特質並に効果…………… 三六
 第三節 労働組合と社會主義とに關し生産論と分配論と
 の無効果近世社會主義批判…………… 三三
 第四節 一八四八年以降學說の變遷…………… 三六
 第五節 現存學說の有効性…………… 三九
 索引…………… 一

キヤ
ナン
分配論

渡邊一郎譯



第一章 緒論 分配論の概念

第一節 用語分配の沿革と賃銀、利潤、地代への分割との符合

一部門の名稱として用ひらるゝ用語「生産」の歴史を辿りたるに當り吾々は或程度に必然用語「分配」の相通ずる歴史を豫想したのである。吾々が其の用語使用上辿り得る最古の英語實例は殆んど忘れられたる著書一八一一年に出版されたるデイ・ブワロー (D. Boileau) の「經濟學研究入門、或は諸國民の富の生産、増加、分配及び消費の状態に關し初歩の觀察」中に見出さるゝの

である。其の著書第一篇は「諸國民の富の分配に就て」と題を附せられて居る。然し例ひ是が殆んど専門的用語の如く名詞として確然現はれたる最初の英語なりしとは雖も、其の動詞の使用はアダム・スミス(Adam Smith)の著書第一篇の題目中に辿らるゝのである。其の題目は「労働の生産能力増進の原因に就て、及び其の所産の國民中異なる階級間に分配さるゝ順序に就て」と謂ふ。アダム・スミス以前英國の經濟學者は「分配」或は富又は所産の分配さるゝ状態に就きて語る所はなかつた。然れども、佛國に於てはチルゴー(Turgot)の「富の生産と分配」とに關しての考察が「諸國民の富」の出版六年前に「市民の年鑑」中に印刷されて居た。

其の用語の普通非經濟學的用法を見るに際し、吾々は所産の分配に關する一論文が二つの異なる問題の就れかを述ぶるを想像し得る。其の一は「如何なる様式に於て或は如何なる方法に依り所産は是を受くる人々の間に送らるゝや」又は、其の二「如何なる割合に於て所産は是を受くる人々の間に分配さるゝや」且つ此の割合を定むるものは何ぞや」。チルゴー(Turgot)が其の辭句を用

ひたる時彼は兩者の問題中第一のものに考へを集中したるが如く思はるゝ。彼(チルゴー)は、異なる階級或は個人が受くる割合に相違を來さしむるものを證明せんとせるには非ずして、收入を得る幾多の方法を闡明せんと努力したのである。二十節より三十節に至るまで彼の證明する所は、如何にして土地所有主が五つの方法により、即ち(一)所有主の直接配下にある労働者に依り(二)奴隸に依り(三)農奴に依り(四)小作人に依り(五)地代を納むる農夫に依り土地の耕作をなさしめて是より收入を獲得せんとする事であつた。又次節は次の如く始む。

余の未だ語らざるも、労働せず土地を所有せずして富有たる可き他の手段がある。余の今略述したる社會に於て富の分配制度の中殘餘のものに就きての發生と關係とを説明するは必要な事である。(1)

然しアダム・スミスがチルゴーの「考察」を熟知したりと解するは理由なき事にして且つ全く有り得可からざる事である。彼(アダム・スミス)は言葉「分配する」の使用をチルゴーより學んだのではなく、然しチルゴー自身會つて求めた

(1) CŒuvres, ed. Daire, vol. i. p. 22.

る根元——ケエネー(Quemay)の表或は制度——より直接に得たのである。ケエネーは、其の言葉を別の包に分け入るゝ又異りたる行先きに送ると言ふ一般的意義に屢々用ひたのである。彼は、勞力と富との拙惡的分配及び貴重金屬の「より、廣き分配と循環」とに就きて語り、又財を共有する未開の社會を叙述して言ふ、「彼等が生活に必要な物品を獲得せんと努力する以外財産の分配はなし」と。然し彼は自ら想像し且つ經濟表中に描寫せんと努めたる生産階級即ち地主と非生産階級との間に行はるゝ交易の名稱としても亦其の言葉を用したのである。一七六六年に「農業新聞」に現はれたる「經濟表の解折」の第二題目は「農業國民の年費の分配に對する經濟表に關し算術的公式の解折」であつた、又其の中に於てケエネーは三階級間の交易に對する「規則的順序」と呼ぶものを叙述したる後、言ふ、

此の費用の分配を農業に不利なる如く其れを控除し、又耕作者の回收を徵税し或は商業上の障害を以て是を控除すれば、必然的に國富の年再生産額の減退となり、且つ人口の減少を來すは計算上明かに指示する事を得。斯くの如くして費用分配の順序即

ち其の費用が生産階級に償却さるゝか、或は控除さるゝか、又は其の立替へたる費用の増加或は減少を來すかに依り、又は生産費を維持するか、或は低下せしむるかに依り、一國民の行爲の良否の結果を評量する事を得る。

ミラボオ(Mirabeau)がなしたる經濟表の説明の英語譯文は次の言葉を以て始つて居る。

孰れより収入は生れ、如何なる様式にて社會の異なる階級間に分配され何處へ是が消ゆるや、又如何にして是が再び生産せらるゝやを闡明する事が第一に必要であつた。(1) 經濟表は「土地の直接生産物が幾多の階級に依り消費さるゝ分配順序」に就きても亦語る所はある。是等引用文は、アダム・スミスの辭句「勞働の所産が自然的に國民の幾多階級の中に分配さるゝ順序」の魁となると言ふ事を明かに證明するに足る。「諸國民の富に初めて接したる讀者は、第一章の題目に依り是が二つの部門に分かれたるを自然的に豫想したであらう、第一は勞働の生産能力に關し、第二は勞働の所産の分配さるゝ様式に關してである。然れども、斯かる讀者の豫想は、次に來る可き各章の題目を見渡したる時に相違を

(1) The Economical Table, translated from the French, 1766, p. 23.

來した、且つ第一章より第三章までは労働分業を述べ、第八章より第十章までは賃銀、利潤、地代を述べしに、其の中間の各章は貨幣と価格とを扱ひたるを發見するに至つた。若し「生産より分配」まで何等かの過渡ありとせば、是は緩慢なるものに相違ないと讀者は推理するであらう。其の故は、貨幣と価格とに關する各章は全然生産又は分配の孰れにも屬するを得ざるに因る。されど讀者は、尙精細に研究すれば、第一篇を通じて流るゝ思索上の外面的連絡を見出し得る——労働の分業は交換に依り有効となる。故に分業に對する議論は、貨幣の使用に依つて助成さるゝ交換上の様式に關する考慮に立ち入り且つ商品の價格、或は「人々が自然に商品を貨幣或は他の物の孰れかと交換する中に觀る規則」を闡明する事にも及ぶ、又價格は其の組成要素たる賃銀、利潤及び地代に還元さるゝ、隨つて價格は賃銀、利潤及び地代を高く或は低くせしむる原因に關しての議論を暗示する。此の思索の特色は、恰も労働の所産が「自然的に國民の幾多階級間に分配さるゝ」順序に關する考察に對しては何等の重要性を與へざる如く思はしむる事である。アダム・スミスの分配論は、篇の主

題の一たる代り、彼が價值論の單なる附屬或は系論として價值に關する各章の中間に挿入されたのである。あらゆる商品の價格は自體、賃銀、利潤及び地代或は賃銀と利潤とに、或は賃銀と地代とに分解さるゝと證明したる後、彼「アダム・スミス」は言ふ、

あらゆる特種商品の價格或は交換的價值は、別々に取り、是等三者の部分中の彼我のもの或は凡てに自ら還元するに因り、隨つてあらゆる國々の労働の年全所産を形造る凡ての商品を全體として見るとせば、同一三者の部分に自ら還元せねばならぬ、又是等は其の國の異なる住民間に其の労働の賃銀、其の資本の利潤、或は其の土地の地代として送らる可き筈である。あらゆる社會の労働に依り年々蒐集され或は生産さるゝもの、全部或は同一物に來る可きもの、其の全價格は此の様式に於て基本的に其の異なる社會人の或る者の間に分配さるゝ。賃銀、利潤及び地代とは凡ての收入並に凡ての交換的價值の三つの基本的源泉である。(1)

若し此の章句に賃銀、利潤及び地代の各章が直ちに續いたりとせば、分配は確かに其の篇中一主要題目として列せられた筈であつた。然し此の章句は實際に「商品の自然價格と市場價格」の章に依り繼續されて居り、次に賃銀、利潤

(1) Bk. i. ch. vi. p. 24 a.

及び地代の各章が續いて居る。是は、所産が労働者、資本家及び地主の間へ如何に分配に分さるゝかを知るは興味あるがために非ずして、賃銀と利潤とは商品價格の原因にして地代は其の結果なるに因る。

孰れの商品の價格も、是を造り、加工し、且つ市場に輸送するに要したる土地の地代、労働の賃銀及び資本の利潤を其の自然的歩合に於て、支拂ふに丁度足る場合其處で其の商品は所謂其の自然價格と呼ぶるゝものにて賣却されたのである……⁽¹⁾

自然價格自體は其の組成部分たる賃銀、利潤及び地代の各自然的歩合に由りて差異を來す。又あらゆる社會に於て此の歩合は組成部分の潤澤なるか或は缺乏するか、其の状態の前進的、停止的、或は退歩的なるかに従つて相違する。余は次の四章に於て余の出來得るだけの綿密と明瞭とを以て是等異なる變化の原因に就きて解説を試みんとするのである。

第一、余は賃銀歩合を自然的に決定する事情の如何を説明に努むるであらう……

第二、余は利潤歩合を自然的に決定する事情の如何を説明に努むるであらう……

金錢賃銀と金錢利潤とが、労働と資本との異なる雇用に於て甚だ相違して居ると雖も、凡ての異なる労働雇用に於ての金錢賃銀と、凡ての異なる資本の雇用に於ての金錢利潤

(1) Bk. I. ch. vii. p. 25 a.

との間に通常或る割合が保たるゝが如く見ゆる……余は第三に於て此の割合を支配する凡ての異なる事情を説明に努むるであらう。

第四及び最後に於て余は土地の地代を支配し、且つ土地の生産する凡ての異なる物質の有する眞實價格を昂げ或は低ぐる事情の如何を説明に努むるであらう。⁽¹⁾

分配が其の篇の骨子中唯從屬的地位を占むる事と其の名稱に由り著明たる事とより考ふれば、アダム・スミスが重農主義者の學說と相知る以前、其の篇は確かに充分完成の形式にて在りたる事は多分推測するに難くはない事である。彼は、重農主義者の學說を知りたる時に、價格に就ての彼の學說と、賃銀、利潤、地代に對する彼の觀察とは、重農主義者の所謂「分配論」に對して極めて佳き學說を造りたりと思ひ、斯くて其の篇に現在の名稱を附する事となり、且つ全所産が賃銀、利潤及び地代に送られ分配さるゝと言ふ章句を添加するに至りしとも思はる。

アダム・スミスが第一篇のために其の内容に適合せざる名稱を選びし原因は孰れにせよ、其の結果は賃銀、利潤及び地代に影響する原因に關しての理論

(1) Bk. I. ch. vi. p. 29 a.

を以て英國經濟學論文中に「分配論」を代表せしめたのである。

然れども、其の結果が充分に提唱されるに至るまでは長き時を要した。ブリタニカ百科辭書第四版の經濟學に關する論說中に於て、富の生産され且つ分配される様式に就ては、次の名稱を有する八節より成る、(一)労働の分業(二)機械(三)労働と資本との異なる雇用に就き(四)農業(五)製造業(六)商業(七)小賣業(八)國民の利益と個人の利益との一致に關して。ブワアロー(Boileau)は一八一一年の著の中第一篇國富の特性と起源に於て賃銀、利潤及び地代を證明するに努め、又短き第三篇國富の分配に就てに於ては「循環」と貨幣とに就きての説明を以て充して居る。然しジェ・ビー・セイ(J. B. Say)は曾つて述べたる如く、其の論文を生産、分配及び消費を扱ふ三篇に分ち、最初の二篇は「諸國民の富」の第一篇に用ひられたる主題の順序に寧ろ近接して隨ひ、因つて其の大篇「分配論」は賃銀、利潤及び地代を扱ふ。彼が、始むるに價値の理論を以てし、是は分配の説明上唯一の缺く可からざる前提なりと見做したるは全く正當である。彼は言ふ、

如何なる方法と如何なる割合とに於て社會の各自の間に所産即ち生産物の價値の分配が行はるゝかを説く以前價値を決定する基本的法則を知るの要がある。余は社會の各自の間に如何なる方法と如何なる割合とに於て該價値が分配され、彼等の収入となる可きかを説述せんとする。(1)

「分配論」を賃銀、利潤及び地代に關する議論に集中せる第二次大步調はリカード(Ricardo)に依り起された、彼は其の序文中に聲明して「土地の全所産の労働者、資本家、地主への分配を支配する法則を決定するは、經濟學の主要問題なり」となした。又ジェムス・ミル(James Mill)は、其の著「原論」中「分配論」の名題の下に賃銀、利潤及び地代以外何ものをも扱はず、交換或は彼の特に呼ぶ「相互交換」を後の章に移して其の過程を完結した。由來、經驗に富むあらゆる讀者は英國經濟學教本中「分配論」の名題の下に賃銀、利潤及び地代は例ひ唯一の論題に非ずとも、主要論題として發見するを豫想するのである。

第二節 賃銀、利潤、地代の意義

(1) Traité, 2d ed., 1814, vol. ii. p. 2.

一國民勞働の全所産或は全収入は賃銀、利潤及び地代とに分配さるゝとの提言は、全賃銀、全利潤及び全地代とを合計したるものが其の全所産を形造るとの提言とは勿論全く同一ならざるものである。其の故は後者の叙述に對して、賃銀、利潤及び地代の一部は其の所産以外に留る事ありと認めねばならぬ。アダム・スミスは其の第二篇「貨幣に就て」の章に於て、通俗的意義に言ふ地代は屢々究局的所産或は収入に加へて何ものかを包含すると偶然にも洞察した。

彼は言ふ、私有地の總地代は農夫依り支拂はるゝ如何なるものも包含する。經營修理の費用及び其の他凡て必要な費用を控除して後地主に残るものは純地代となる。或は是は地主が其の所有地を損傷する事なく、直接の消費に供さる可き資本中に加へらる可きものなるか、或は彼の車子、裝置、家及び器具の裝飾又自身の享樂娛樂の用に供さる可きものである。地主が有する眞の富は其の總地代に比例せずして純地代に比例する。(1)

實際上特に重要ならずとするも同一の區別が總賃銀と純賃銀との間に存する。即ち通俗の意義に於ける全賃銀と、所得者に對して眞の収入を形造る部

(1) Bk. II, ch. ii, p. 124 a.

分賃銀との區別である。一般的意義に於ける大抵の賃銀は、或る控除即ち用具或は特種衣類の費用が差し引かれ安い、且つ都市に於ける勞働階級に依り支拂はるゝより、高き土地々代すら其の純賃銀或は正味収入が現はるゝ以前に其の總賃銀より削減さるゝものである。利潤自體極めて不確定の用語である。勿論凡ての損失を減じたる後の總利潤が収入以外の何ものかを包むや否やを語るのは至難な事である。然れども、アダム・スミス及び其の繼承者が賃銀、利潤及び地代の中には眞の収入以外何ものも含まれずと考へたのは疑を入れぬ。所産或は収入は賃銀、利潤及び地代に分割さるゝとの提言は常に次の方程式と同一なりと考へられて來た、即ち

全所産或は収入 = 賃銀 + 利潤 + 地代

随つて賃銀、利潤及び地代とは常に純賃銀、純利潤及び純地代として諒解さる可き筈である。

収入に非らざる凡ての物が斯く賃銀、利潤及び地代より除外されたるに因り、次の問題は如何にして總體収入を三つの用語の下に齎す可きか且つ異れ

る部分間の何處に分歧線を畫く可きかである。現代の如く、アダム・スミスの時代に於ても、通俗語に於ける用語賃銀は、労働の行使さるゝ以前の協定に成る規定率に於て其の仕事を引き受けたる者からより、少く支拂はるゝ労働者階級が受くる高に適用されたのである。利潤とは殆んど如何なる種類の收益に對しても適用さるゝ不確定の言葉であつた、唯其の收益を得るために幾分の費用或は損失に對する危険の伴ふを前提とする。地代とは土地、家屋及び他の不動物の所有主に對し是等を使用する借用人に依りなざるゝ定期的支拂であつた。

然れども、アダム・スミスの所謂全収入が分配さるゝと言ふ賃銀、利潤及び地代とは、常に労働の賃銀、資本の利潤及び土地の地代なりと記憶せねばならぬ。「労働の賃銀」とは賃銀より更に廣義の用語と思はる、又其の用語の中には特種労働階級者に支給さるゝ「給料」及び「手数料」をも含み、又自分自身の判断のまゝに働く者即ち、最初雇主により支拂は可き價格を契約せずして何物か生産をする他の特種階級者が所得する金額も亦包含するとは解し易き事である。

資本の利潤とは利潤よりも尙確定用語である、又はは明かに蒙りたる費用及び危険に對して支拂はるゝ一切の収益を謂ふに非ずして唯資本或は資本金を所有したるがために所得する収益のみを謂ふ。「土地の地代」とは土地以外の不動物に對する地代を含まぬ、因つて後者の地代は資本の利潤の項目の下に置かるゝのである。要之、賃銀とは労働行使に因り個人の獲得する全収入たる可く、地代とは土地所有より獲得する全収入にして、且つ利潤とは他の種類の財産所有より獲得する全収入となる。

然れども斯く収入を三成分に分つ見解は、一個人が自ら労働者及び資本家との職務を兼備するか又は資本家及び地主との職務を兼備するが如き場合は常に是認しなかつた。實際に、アダム・スミスの明言する所は、勤勉なる労働者或は獨立労働者の全所得を「利潤」と呼ぶは賃銀と利潤とを混合して居るのであると謂ふ事である。

普通の農夫が農場の一般的使用をするに監督者を備入るゝ事は稀れである。一般に彼等も亦耕作者採取者等として自ら手を勞して多くの仕事をする。随つて、收穫よ

り地代を支拂ひたる残高は彼等の耕作に要したる資本に對し普通利潤を附して補ふのみならず又彼等が労働者及び監督者として受く可き賃銀をも支拂ふに足る。而して地代を支拂ひ又資本を補ひて後の残高が利潤と呼ばれる。然し賃銀は明かに其の一部分をなす。農夫は是等賃銀を貯へて必然的に是を増す筈である。随つて此の場合賃銀は利潤と混合されて居る。

獨立製造業者にして材料を買ひ入れ且つ其の製造品を市場に運搬し得るまで自らを支ふるに足る資本を所有する者は、主人の下に働く職人の賃銀及び其の主人が職人の製作品を販賣して受くる利潤とを合せ所得せねばならぬ。然れども、彼の全収益は通常利潤と呼ばれ又賃銀は此の場合に於ても亦利潤と混合されて居る。(1)

彼(アダム・スミス)は更に、異なる職業に對する利潤の間に生ずる明白なる差異は賃銀と見做さる可きものと、利潤と見做さる可きものとを吾々が常に區別せざるに因り起るのであると謂ひ、且つ小商店主が得る非常に高率の「明白なる利潤」は、利潤と言ふ装ひの中に假裝せる眞の賃銀なりと謂ふ。明かに彼の考へたる所は、科學的意味に於ての用語賃銀は、例ひ或る労働が資本家と見做さる可き人々に依りなざる、事實あるに拘はらず労働の報酬全部を包含

(1) Bk. I. ch. vi. p. 24 b.

するものと見做す可きである。十九世紀初期の經濟學者は此の點を論議せざりしも、此の問題に對して意見を與ふるの必要なる事を閑却したのである。彼等が賃銀に就きて語るときは恰も其の用語が労働の一切の報酬を含むが如く見做したれど、彼等の考へたる労働とは通常の狹義に於ける賃銀を所得するものに外ならなかつた、されば賃銀に關する彼等の學説は彼等の説明せんと揚言したる大部分の現象に對しては適用し難きものである。ジェ・エス・ミル(J. S. Mill)は其の著「論文集」中に此の事を承認した。アダム・スミスが一般に利潤と呼ぶるものを資本行使に對する報酬及び労働に對する報酬とに分類したるに對し切實に贊同して後彼(ミル)は言ふに、雇主の労働に對する報酬が他の賃銀の如く全く同一原則に因り支配されて居ると考ふるは誤りであらうと。此の提言の維持のために彼は二つの理由を提供した。其の一はアダム・スミスが「資本の利潤」とは單に特種労働即ち監督及び指導労働の賃銀に對する別名のみならずと辯明に努めたる寧ろ不仕合せの辭句より貸りたるものである。雇主の労働に對する報酬、或は監督の賃銀とは、ミル曰く、

貸銀である。然し雇用されたる資本に對して手数料として支拂はれたる貸銀である。利潤の一般率が一〇パーセントにして、又利率が五パーセントなりとせば、監督の貸銀は五パーセントとなるであらう。又一人の借用人が一〇〇〇〇〇〇〇の資本を運用し、他が一〇〇〇〇〇の資本を運用したりとするも、兩人の労働は同一利率を以て報ひらるゝであらう。即ち一方の場合に於ての金額は五磅の収入を表はし他の場合は五〇〇〇〇磅となる。(1)

其所で、若し兩者の中一人は一〇〇〇〇〇〇〇磅を所有し他は一〇〇〇磅を所有して全く同一業務に携ると假定せば、疑もなく、彼等の「利潤」は同一利率に依るであらう。又時々此の種の事の起る事はあり得る。然し一般には一〇〇〇〇〇〇磅を持つ人には一〇〇〇磅を持つ人々とは全く異りたる業務に就くのである。且つ小資本家が其の資本運用に際して所得する監督貸銀は大資本家の得る貸銀に比べ其の資本の比例上非常に大なるものである。若しミルが個人的觀察に因り此の事を知らざりしとせば、彼はアダム・スミスより是を學んだに相違ない。アダム・スミスは明かにカークカルデイ(Kirkcaldy)より其の例を採つて言ふ。

(1) Essays, pp. 107. 108.

海濱の一小村に於て一小雜貨商は唯百磅の資本に對して四〇或は五〇パーセントの利を受くるであらう。然るに同一場所に於ける一大卸商人は一萬の資本に對しては或は一〇パーセントを得るは稀れであらう。(1)

利率の存するが如き同一意義に於て監督の貸銀率の如きものが存在するとなす概念は何れにせよ根據のなき事である。ミルが所謂監督の貸銀は全く他の貸銀の如く同一原則に依り支配さるゝと思惟したる第二理由は「該貸銀は凡て他の労働者の貸銀の如く資本より前以て支拂はるゝに非ずして、利潤の中に混合され、且つ生産の完成さるゝまでは現はれざるものである」と、又此の事實は「貸銀の一般法則から全然離さるゝ」と、彼は言ふ。若し吾々がミルの瞭解したる所謂「貸銀の一般法則」を瞭解すれば、其の眞なるを知る、而して瞭解せざりし事が尙完全且つ徹底的貸銀法則を造るを努むるに至りし著明なる理由となつたのである。ミルが其の著「原論」を書きたる以前シニア(Senior)は既に資本家の労働報酬が一般に雇用されたる資本價値の増加に比例して

(1) Book I. ch. x. p. 51 a.

却つてより、少なき割合を保つと指摘して居た、且つ英國に於て一〇〇〇〇〇
 磅を運用して一〇パーセントの利を以て大抵の人々は満足するに拘はらず
 僅かのシリングを資本にして商ふ小果實商人は七〇〇〇〇パーセントの利を
 豫想すると附言した。然し原論中にミルは「販賣人或は生産者の労働及び熟
 練に對する報酬を形造る總利潤の割合は異なる業務に於て非常に相違あり」
 となし、又實際にアダム・スミスの論證したる雜貨商の例を引きたりと雖も、尙
 監督の賃銀を含む假想的利潤率を扱ふ事を續け、而も該賃銀を「賃銀の一般法
 則」の下に齎さんとする何等試みをも講ぜなかつた。

アダム・スミスは言ふ、一名の者が地主且つ農夫なる場合、彼は地主の地代及
 び農夫の利潤とを合せ所得す可きである。是に依り、彼アダム・スミスの意味
 する所は、其の者の収入は通常の言葉に於て凡て「利潤」と呼ばれるれども、經濟學
 者は二つの部分——利潤と地代——に分つ可きものであると爲す。然し章「土地
 々代に就て」中に彼アダム・スミスは、通常の言葉に於て一エカールの土地々代と
 呼ばれるものは其の地主が土地の開拓に費したる資本に對する利潤或は利

子より成ると言ふ事は、「或る場合に於ては時にかゝる事あり」と是認したるも、
 彼は普通の土地々代より開拓費の利潤を除外する事は想到しなかつたので
 ある。

リカードは斯くなさんと努めた。「穀物低價の影響に關する論文中の一附
 言に於て彼は言ふ、

余の常に言ふ地代とは土地の基本的且つ傳統的實力の使用に對して其の地主に與
 へらるゝ報酬である。若し地主が自らの土地に資本を運用するか或は以前の借地人
 の資本が借地期間満了に由り土地に残されたりとせば、地主は實際により、高き地代と
 呼ばれるものを得る事あり、然し此の部分は明かに資本の使用に對して支拂はるゝも
 のである。他の部分は土地の基本的實力の使用に對してのみ支拂はるゝのである。(1)

原論中の章「地代に就て」に於ても亦斯くの如く彼は言ふ、

地代とは土壤の基本的且つ不滅的實力の使用に對して地主に支拂はるゝ土地所産
 の部分である。然るに是は資本の利子及び利潤と屢々混合されて居て、通常の言葉に
 於ての其の用語は、農夫が年々地主に支拂ふ如何なるものに對しても流用さるゝ。若

(1) Works, p. 375.

し同一廣サ及び同一肥沃を有して相隣接する二個の農場に於て一は農作上の建物に對する一切の便宜、更に排水施肥が行き届き其の上都合よく堤垣、塀に依り區劃されて居るとなし、是に反して他は何等の斯かる特徴を備へざるとせば、自然的に報酬は後者の使用に對するよりも前者の使用に對するものが多くなる譯である。而も兩者の場合に於て此の報酬が地代と呼ばるゝであらう。(1)

概ね文學的教育の素養なき人々の如くリカードも言葉と言ふものは彼が好都合と考へたる如何なる意義をも含むものであると考へ勝ちであつた。斯くて彼はより良く備へられたる土地に拂はるゝ報酬は凡て地代と呼ばれるゝとも、是は地代に非ずと主張した。更に彼(リカード)は他のものゝ中にも其の主張を進めて言ふに、鑛山採掘の許可を得たるに因り鑛山所有主に支拂はるゝ金額は其の土壤の基本的且つ不滅的實力の使用に對して、支拂はるゝものに非ずして、取出さるゝ鑛物に對して支拂はるゝものであると、又結論するに、

其所で、此の著書の後の頁に於て余が地代と言ふ時は常に土地の基本的且つ不滅的

實力の使用に對して土地所有主に支拂はるゝ報償の謂であると諒解してもらひ度い。(1)

然し彼の著書の出版が完成する以前既に彼は其の見解に訂正を加へて居た。貧弱なる利率を扱ふ章の終りの附言中に、地代或は「正味地代」とは、或る場合に於ては、開拓に要したる資本に對する利潤をも包含する事ありと彼は是認した。地主が土地に對して費したる部分の資本は「不可分的に土地に混和せられて又其の實力を助くる、其れ故に」其の土地使用に對して地主に支拂はるゝ報酬は嚴密に地代の特質を備へ又地代に關する一切の法則に従ふものである。此の部分の資本は「地主にとりての正味地代の上に永久的増加を與へざる」資本の剩餘に過ぎぬ、其の故は、「是が不斷の修理を要する建物及び他の破損し易き設置物」に成るに因る。

ジェムス・ミル(James Mill)はリカードの最初の説を固持した。彼は一度でも開拓されたる土地は手の入れられざる土地より遙かに價値の勝るものであると説明する。新鮮の土地を手入れするより寧ろ人は手入れの費用に相當

(1) Principles, 1st ed. p. 52; 3d ed. in Works, p. 35.

(1) Principles of Political Economy, 1st ed. pp. 49, 50; 3d ed. in Works, p. 43.

す可きものを支拂ふであらう、然し是は「土壤の實力に對して支拂はれたるには非ずして、單に其の土壤に運用されたる資本に對しての支拂である。是は地代に非ずして、利子である。」マツカルツク (McCulloch) は地代とは「土壤の自然的且つ傳統的實力の使用に對して」の支拂なりと定義し、又是を例證するに當り、リカードが貧弱なる利率に對する章の附言中に此の問題に關する彼の第二次思索の存する事は讀んで居なかつた事を暗示して居る。是に反してシエムス・ミルは、リカードの第二次思索に隨ひ、地代の中に「事實上開拓に要し且つ其の土地に永久的生産能力の増加を附與するために、定期的繼續をなさず唯一回のみ費消したる資本に對する収益」を包含したのである。

シニアは是より進めて居た、且つ用語「地代」の下に何人も利潤と呼ぶものゝみならず、何人も賃銀と呼ぶものゝ極めて大なる部分をも含む事を希望した。其の言葉「賃銀、利潤」が實際上如何なる意義に用ひられたるや、又直ちに如何なる分類を便宜とす可きや、又其の通俗的意義と合理的に一致するやを探究する代り、彼(シニア)は兎角一躍して「賃銀と利潤とは特種犠牲の報酬として認め

らる可きものなり」とし、隨つて犠牲の報酬ならざる凡ての收入を地代とせねばならぬと結論を下した。

彼は言ふ、若し賃銀と利潤とが特種犠牲の報酬即ち前者は勞働に對する報酬にして後者は即時的享樂の禁制に對する報酬なりと認めらるゝとせば、用語「地代」の下には何等の犠牲なくして得らるゝ凡てのものを包含せねばならぬと言ふ事は明白である。其の犠牲に對する報酬の超過するに對しても同様である。所得者の側に何等の努力をなさずして受くる凡ての自然物及び富若しくは勤勞行使或は資本の雇用に對し一般の報酬の加へらるゝに於ても同様である。(1)

彼(シニア)は、賃銀と利潤とは「特種犠牲の報酬として見做さる可き」事は何人も否定する所に非ずと考へた様に思はるゝ。是をば既成の議論として扱ひ又是を證明せんとするの企圖を成さなかつたのである。後に到り彼の著書の中に曰く、地代とは「自然又は偶然に豫想せずして提供さるゝ收入にして」又利潤とは禁制の報酬なりと、余は定義せりと謂ひ、更に次の如く疑問を發して居る、

(1) Political Economy, 8vo ed. pp. 91, 92.

海を経て到りたる羅馬人の開拓せるリンカンシアアの地所の現所有主が借地人より受くる支拂は地代に非ずして、十五世紀以前に費されたる資本に對する利潤と名々さるゝや否や。其の解答としては、一切の有用目的のために、収入の根元たる資本が贈與或は遺傳に因り、該資本の創造に何等の禁制及び努力とをなさざりし者の所有物となるやいなや、利潤は地代に依り置き代へらるゝと謂ふ。波戸場或は陸揚場或は運河より生まるゝ収入は其の本來の設立者の手中に於ては利潤である。是は享樂の目的になす代り生産の目的のために資本を運用したる彼が禁制の報酬である。然し是が彼の相續者の手中に於ては地代たる凡ての特性を備ふ。彼にとり是は犠牲の結果に非ずして好運の贈物である。

本來の設立者は自ら其の波止場、運河、或は陸揚場に投資せる資本を貯蓄した。若し彼の相續者が其の陸揚場を賣却し其の賣上金を以て他の陸揚場の「本來の設立者」となる事ありとも、是は彼が第一の陸揚場を維持し續けたると何等禁制に於て變る所がなき事は明かに想像し得るのである。

シニアは更に言ふ實際上新かる収入は波戸場或は運河を賣却せず且つ其の代價を享樂に費消せざる所有主の禁制に對する報酬なりと謂はるゝかも知れぬ。然し同一

解釋はあらゆる種類の讓渡的財産に對しても適用さるゝ。あらゆる地所は賣却され且つ其の購賣貨幣は浪費さるゝかも知れぬ。若し最後の分類の基礎が採用さるゝとせばあらゆる經濟學者が地代と名々せる大部分のものは利潤と呼ばれねばならぬ。(1)

即ちシニアは、利潤とは禁制の報酬にして他に何ものをも含まざる事を嚴格に固守して居た。随つて若し吾々が相續せる陸揚場の所有主の収入を利潤と呼ぶとせば、地主は地代を所得するに非ずして利潤を受くるなりと言ふ彼(シニア)が明かに不都合の結果とせるものに、吾々は進み入る可き筈であると彼は論争する。彼(シニア)は彼以外何人も利潤は禁制の報酬と同一なりと認むるものはない事を全く忘却して居た。更に奇怪なるは、彼自身の分類が「あらゆる經濟學者の利潤と名々したる大部分を」地代として扱ふ不都合の結果を招く事を認め得なかつた事である。彼の引例たる遺傳的財産——波戸場、陸揚場及び運河其の他凡ての不動物に屬する一團のものに對して日常生活上の通俗語の如く用語地代が目立つて流用されて居る。然し蜜柑一荷の相續者が是を賣却して享樂の費に充てざる事は恰も相續せる陸揚場の所有主の

(1) Ibid., p. 129.

同一行為に對すると同様の禁制なりと言ふ事を嚴格に主張する事は出来ぬ。凡ての相續財産より生ずる収入は現所有主にとりては「好運の贈物にして犠牲の結果」ではない。因つてシニアに従へば、是は地代として分類する可きで利潤ではない。今や近世文化の富裕の社會に於ては相續財産は現在生活する人々の貯蓄により獲得せられたる財産より遙かに大なるものである。

是を通觀してシニアは直ちに分類を進めて、地代とは「肉體或は精神の異常の實力」に對する「異常の報酬」なりとする。

彼は言ふ、それ(異常の報酬)は自然の限界内に創造さる。是まではそれは地代なる如く見ゆる。それは労働を行使する條件の下に於てのみ所得せられんとする。是まではそれは賃銀なる如く見ゆる。それは唯労働者に依りてのみ得らる可き地代、或は唯自然的代理物の所有主に依りてのみ得らる可き賃銀として、同等正確さを以て名々さるゝ事を得。然しそれは、労働が前以て普通賃銀を支拂はれたるに因り、明かに剩餘にして、且つ其の剩餘は自然に對する自然的贈物なるが故に、吾々は是を最も便宜に地代と呼ぶ事を考へたのである。(1)

(1) Political Economy, 8vo ed. pp.129,130.

而も尙彼(シニア)は是を以つて終らなかつた。此所まで到りて彼が相續と非相續財産との區別を明かに全部忘却して、更に言ふ、

又同一理由に因り吾々は同等正確さを以て偶然的利潤と稱せらる可きものを地代と名付く。是に依り吾々の意味する所は、資本家の負ひたる凡ての冒險及び拂はれたる犠牲に對して充分の補償を削除したる後尙資本の運用上時々得らるゝ剩餘利益である。是は豫想せざる戰鬪を開始する好戰的商店の所有主の得る偶然的利潤である。(1)

此の後、既得の有効的智識と實力との所有に基きて得る収入は利潤と見做さる可きで賃銀に非ずと聞くと、吾々の喫驚する所でない。終にシニアは結論に到つた、

吾々の専門語に依れば、又眞にスマスの言葉に従ひ若し資本の所産が利潤と名々さるゝとせば、辯護士或は醫師の所得の極めて小部分は賃銀と呼ぶ。年四十磅は兩者の中孰れかと、假りに、一年四〇〇〇磅を造らんと行使用せる凡ての労働に對して多分支拂はるゝものであらう。残る三九六〇磅の中恐らく三〇〇〇磅は孰れの場合に於ても異常の才能或は善良の好運の結果として地代と呼ぶるゝかも知れぬ。殘高は彼等の要する資本に對しての利潤である。資本とは一部過去の多大の費用と労働と

(1) Political Economy, 8vo ed. p.130.

に依り獲得されたる智識及び道徳的智的習慣とに成り、又一部は其の手数料が彼等を維持するに足らざりし見習年間に得たる關係と名聲とに成る。(1)

斯く從來の分類法を打破し又新しき全く異りたる分類法を創造したる後シニアは尙舊きものを使用し、且つ新しきものを時々参考に供するの便宜を知りたるは、却つて興味ある事である。彼の異常の企圖は退けらる可き一例として、且つ現時の英國經濟學界の著しき特徴たる凡てのものを地代と呼ばんとする欲求に對する豫想なりとして單に興味あるものに過ぎぬ。

第三節 賃銀の發生と原因

社會の全収入は三つの大なる部分即ち賃銀、利潤及び地代とに成ると確定され、且つ孰れの収入が三つの部分の個々に屬するやの決定されたる場合、次の問題は全収入を三つの部分に分つ原因に就きて研究す可きである。何故に賃銀、利潤及び地代とは是を得る人々に依り所得さるゝや。

是迄に何人も正式に、何故賃銀は支拂はるゝや、或は何故労働は報償さるゝ

(1) Ibid., pp.133,134.

やを探究したる者はなきが如く見ゆる。労働が報償さるゝは、自然的なりと考へられた、又アダム・スミスは、労働が其の所産の一部のみならず、全部に依り報償さる可きは自然なりとまで思索を進めたのである。

彼は言ふ労働の所産は労働の自然的補償或は労働の賃銀を形造る。

土地の使用及び資本の蓄積とに先き立つ物界の基本状態にあり労働の全所産は労働者に屬する。彼は彼と分つ可き地主を有せず又主人をも有せず。

問題に對する此の見解に隨へば、労働者は所産全部を生産するに因り其の所産の一部を受くるとなす、又解釋の要ある所は、彼が其の一部を受くる事に非ずして、全部を所得せざる事にある。賃銀は自然的且つ基本的である、他方利潤と地代とは技工的にして且つ後に輸入されたるものである。如何に且つ何故に利潤と地代とは、労働の自然的補償より控除さるゝかの研究が、吾々に殘されて居る。

第四節 利潤の發生と原因

アダム・スミスは利潤とは單に賃銀の一部類に非らざる事を説明するの要を考へた。彼は觀察して言ふ、『資本の利潤とは特種勞働即ち監督と指揮との勞働賃銀に對する別名に過ぎずと多分考へらるゝかも知れぬ。然し利潤は全く是と相違する』。監督と指揮との假想勞働は、其の分量、至難性、或は巧妙性に比例する代り、是は雇用されたる資本の價值に比例する。或る場合には監督と指揮との仕事の孰れも其の資本所有主によりて殆んどなされるゝ事はない。其の仕事は、或る主要業務者に依り成され、其の者は其の管理の任に當る資本に對しては何等正當の比例を保たざる賃銀を受け、他方資本所有主は、例ひ斯く凡ての勞働より免るゝとするも、其の利潤は資本に對して正當の比率を保たざる可からずと期待するのである。斯くの如く利潤とは自然的補償或は勞働の賃銀より控除したるものである。

利潤は大體資本家が勞働を雇用すると云ふ事實の結果なりと見做さるゝ。

資本が特種人の掌中に蓄積さるゝや直ちに、或る者は自然的に其れを運用して勤勉なる人々を仕事に就かしむるであらう。前者は後者に材料と生活費を提供し、其の所

作を販賣し、或は其の勞働に依り材料の價值を添加して、利潤を修めんとする。(1)

若し雇主が其の費用以上幾何の利潤、幾何の剩餘を期待せざれば、全然勞働を雇用する事はない筈である。又其の利潤が資本の分量に幾何の比率を示すに非らざれば、彼等は小資本より寧ろ大資本を運用する事はない。彼等は其の資本を危険に放置し運を賭する、是の事たるや何等得る所なくして、敏感の人の恐らくなす所ではない。然し是のみにては、實際に何故利潤は發生するやを證するに足らぬ。何等得る所なくして人々のなさず、随つて未成のままに残る幾多の事共はある。雇主資本家は、彼が資本を賭するの故に支拂はるゝに非ずして、支拂はるゝが故に資本を賭するのである。吾々が何故利潤は勞働の自然的報酬より控除さるゝかを知らんとせば、何故資本家雇主は、若し運用せる各部の資本に對し利潤なしとせば、資本運用を止るやとの理由以外更に何にかを知らねばならぬ。吾々は、何故勞働者は其の控除を承諾するや、何故彼等自身のために働かざるか、又何故雇傭さるゝを肯ずるやを知るの要がある。アダム・スミスは、是等は必要上缺く可からずと思惟せる様で

(1) Bk. I, ch. vi. p. 22a.

ある。

土地の耕作をなす者にして收穫を得るまで自らを支へ得る資力を有するは稀に見る。其の維持費は、一般に主人の資本より、又彼を備ふ農夫より、又労働の所産を分與するに非らざれば、或は資本に利潤を添へて拂ひ戻さるゝに非らざれば、何等雇傭に興味を持たぬ者により前以て支拂はるゝのである。此の利潤は土地に雇用されたる労働に依る所産より第二次控除をなすのである。

他の殆んど凡ての労働の所産も同様の利潤控除に會はんとするのである。凡ての技術及び製造業に於て労働者の大部分は仕事の材料及び完成に到るまで賃銀及び維持費との先拂を受くるために、主人を得るの必要に迫らるゝのである。

彼(アダム・スミス)は、何人も恩義を負はざるゝ事なくして主人に従ふものはないと信ずる。若し人が仕事の材料を所有し且つ完成まで自らを維持するに要する充分の資力を有するとせば、直ちに「獨立労働者」として立つであらう。要するに、アダム・スミスにとりて、利潤とは労働者の所産よりの控除なりと現はれ、是を提供するは彼に維持の資力なく且つ生産材料なきに因る、と謂ひ得るのである。バン・バーク(Böhm-Bawerk)博士の信ずる所は、アダム・スミスは屢

々他の學説をも亦造り、是に依れば利潤とは労働所産の價值に對する添加なりとなしたと謂ふ。然し博士の引用したる章句(アダム・スミスの)は殆んど此の學説の存在を證するに足らぬ。

アダム・スミスの利潤の特質に關する説明は、全く労働を雇傭する人の利潤に關係せりと解せらるゝであらう。彼(アダム・スミス)には、利潤とは彼の想像せる賃銀の支拂ひ及び材料購入に費さるゝ金額の上に齎さるゝ、以外何にものを厳格に考の中に入らなかつた様に見ゆる。彼の引例中には工場及び機械の價值に對する利子及び利潤とを許容する所がない。第二篇第四章中の利子の取扱に於て、利子とは雇主の利潤中より支拂はるゝか、或は「他の収入の源泉より、即ち所有財産又は土地々代の如きものより割讓或は讓與さる可き」ものなりと考へた。

ラウデルデール(Lauderdale)は確然と疑問を發した、「資本の利潤の特質は何ぞや、且つ是が發生は如何。」彼は、労働の賃銀より控除したるものなりとするアダム・スミスの利潤に對する提言に反對した。彼は言ふ、若しアダム・スミスを

以て正當なりとせば、利潤とは「單に労働者の懐中より資本所有者の懐中に移轉するものなる故に」それは派生的のものにして収入の基本的源泉にあらずと。利潤とは利潤を生む可き資本が労働を代理するか、或は人間労働に依り成し得ざる所をなすに依り發生するものであると、彼は思惟する。要するに、利潤は資本が有用の使命を果たすに因り存在する。利潤の支拂は賃銀の支拂の如く同一基礎に置かる可きものである。資本所有者は代用され或は使役されたる労働者の受く可きものゝ一部分を所得するのである。彼は是以上を所得するを得ぬ。然らざれば、労働が資本に代りて雇傭さるゝに至る。又競争の結果彼はより、少く所得するは屢々である。ラウデルデエルは次の如く其の學說を例證する。

例へば機械を所有する者は一日靴下三足を造り得る筈なりとし、而も是は同一時間内に同一優美を以て同一仕事をなすに六人の編む者を要するに相當すると假定すれば、其の機械所有者は其の靴下三足を造るに對し編む者五人の賃銀を要求するは當然にして而も是を受くに至るは明白である。其の故は消費者は編む者よりも其の製造者と取引し、靴下を購買するに編む者一人の賃銀を益するに至るからである。然

し是に反して、若し一機械は三日間靴下唯一足をのみ造り得るとせば、編む者六人は一日靴下三足を造り得るとの假定より、編む者一人は二日間に靴下一足を造る事となるに因り、機械所有者は其の靴下を販賣し得ない。其の故は彼は編む者の受くる支拂より更に以上の、一日分の賃銀を要求せねばならぬ筈である、又其の機械は最も完全に靴下を造るとしても、労働の幾部分をも補ふ能力を欠く故に唯無用として放棄さるゝに至る。(1)

此の引例の明示する所は、資本所有者は其の資本が有用なるが故に利潤を受くると言ふ事である。若し機械が何等労働に代る所なく、随つて「無用」なりとせば、其の所有者は是に對し何等の利潤をも所得せぬであらう。是は下層限界を意味する。是に反して、上層限界とは所産が資本の補佐なくして獲得し得る高である。若し一名の者が機械と共に働き、又修理の必要ある場合はを修理して、恰も機械を有せざる六名の者と同様の仕事を成すとせば、機械所有者に依り所得せらるゝ利潤は賃銀五人分まで騰る、然し是に超過する事を得ぬ。若し機械を所有する一名の者が是を有せざる一名と全く同様の仕事と爲すとせば、機械は全然價值なく、又例ひ是を使用するも所有者に何ものを

(1) Public Works, pp. 165, 166.

も齎さぬであらう。若し機械と共に勞作する一名の者が是を有せざる者に比し劣る仕事をなすとせば、機械は全く使用さる可きに非ず。

マルサス(Malthus)はラウデルデイルの如く、利潤が資本の報酬たるは恰も賃銀が勞働の報酬たるに等しいと考へた。孰れの商品も續いて市場に搬出さるための三つの異なる前提條件に就て、

第二前提條件は將來の生産を成就せんと前以つて蓄積されたる必要物の中より勞働者に附與したる補佐は報償さる可きである、斯くして必要商品の生産に向つて此の補佐は繼續さるゝと言ふ事である。若し機械、食物と以前蒐集せる材料とを幾何か勞働者に流用するに依り、斯くの如き補佐なき仕事に比べ、八倍或は十倍の仕事をなし得ると假定すれば、第一に、補佐を與へたる者は助けなき勞働の實力と助けを有する勞働の實力との差異に貢献したる者なりと見做さるゝのである。然し商品價格は其の眞の効力に定まるに非ずして、供給と需要とに依り決せらる。勞働の實力増加と共に自然的に商品の供給は増加する。随つて價格は下落を來す。又運用されたる資本に對する報酬は現社會狀態の下に、唯其の商品の販賣を期して生産する程度にまで低減するに至る。雇傭されたる勞働者に就ては、其の勞作及び技巧とは補佐されざる場合と必

ずしも何等異なる所なき故に、其の報酬も以前と殆んど變る所なく、且つ是は需要供給の一般法則に定められ、其の用ひられたる類の勞働が有する交換的價値に據るのみである。随つてアダ・ム・スキスの言ふ如く、資本の利潤とは勞働の所産より控除せられたるものなりと見做すは全く正當と謂ふを得ぬ。利潤は資本家にとり唯生産に參與したる部分に對して正當の報酬となり、是は勞働者の貢獻に對するが如き全く同一の形式によつて評量せらる可きものである。(1)

以上の謂ふ所は、勞働が資本の流用を受くる時生産を増加し、且つ、利潤とは資本所有主が資本流用に依り生産に與へたる利益に對し其の交換として受くる高なりとの主張である。更に認容する所は、資本家の受くる高は資本の存在に基きて入る全高には非ずして、其の一部たる事である。例へば、若し英國の收入が、何等資本なくして、一〇〇の代り唯一と假定せば、全 $\frac{99}{100}$ は現在利潤とはならぬとの謂である。

ラウデルデイルとマルサスとに依り與へられたる利潤の説明中弱點たるは、兩者が明かに資本の存在と流用とは生産上利益となり、且つ其の利益は全部資本家の獲得するに非らずと闡明したるに、他方兩者が何故其の利益は少

(1) Political Economy, 1st ed. pp. 80, 81.

しでも報酬さる可きか、何故資本の「奉仕」は太陽の奉仕の如く無料に非らざるかを説明するに不充分であつた。

リカードは明瞭に利潤とは何にを意味するやを知悉したれども、其の特質と發生との描象問題に關しては何等の興味を有して居なかつたのである。彼(リカード)は其の用語(利潤)に對して何等の定義を與へず、且つ何處にも形式的に此の問題に對して意見を述ぶる所はなかつた。然れども、彼(リカード)と同様ラウデルデールの學說も何等見る可き所はない様に見ゆ。彼(ラウデルデール)の著書を読むに再び吾々はアダム・スミスの見解に戻らざるを得ぬを感ずる。利潤は再び「資本の生産實力」と或は資本流用が生産に與ふる利益とは何等關係なき事となる。然しアダム・スミスが利潤とは労働の自然的報償より控除せられたるものとして取扱ふに反して、リカードは利潤を以て自然的賃銀に越ゆる寧ろ生産の剰餘なりと見做したのである。彼(リカード)に隨へば剰餘の存在するは實際に耕作さるゝ最悪の土地、或は寧ろ備はれたる最低生産的農事労働が、賃銀支拂ひに要するより、より多くの所産を生むに因る。

剰餘は常に存在する、其の故は、人口或は備はるゝ労働の分量、又次に最低生産的農事労働の生産力とは資本の高に定り、且つ資本は常に蓄積され決つして其の最低生産的農事労働の生産力をも失はず活用し、其の所産が唯賃銀を支拂ふに足らしむるに因る。蓄積の動機は利潤のあらゆる低減を防ぐ、且つ利潤低くして、農夫及び製造業者にとり其の困難と資本を生産的ならしめんとして必要上負ふ危険とに對し充分の報酬なしとせば蓄積は起らぬ。

利潤の正當なるは殆んど否定されては居なかつた、又労働者が労働の全所産に對する欲求は後になり少くとも一時社會主義者の運動の根底となりたるも、是は一八二一年には甚だ高聲に主張されなかつた。然しジェムス・ミルの原論中に來る可き暴風に就ての或る種の豫告を伺はるのである。リカードは、自由貿易の目的のために、農夫は製造業者及び商人と相提携して地主に對抗する争闘中に立つ可きを力説した。ジェムス・ミルは此の方面の努力は第二位となしたれども、利潤の存在を正當なりとし、労働者に對應して資本家の位置を強めんとする希望を示したのである。

「生産に貢献する者」を労働者と資本家との二階級、即ち一は労働を提供する階級と他は食物、原料、動力的或は非動力的、簡單或は複雑なる一切の機械を提供する階級とに分類して後、彼(ジエムス・ミル)は説明するに、是等階級の孰れも生産されたる商品より各々の分前を所得せねばならぬ、且つ資本家は分前を期待する。其の分前とは、資本家は労働者に提供するに材料及び器具を以てする故に、是に對して勿論「報酬」を期待するの謂である。此所に於て、資本家の地位と労働者の地位とを、能ふる限り、同化せんとする或種の傾向を明かに見る。後に到り、ジエムス・ミルは資本と労働とになる生産の結果を同化せんと努めたるのみならず、是を同一たらしめんとも力めた。彼に隨へば、「商品が他の商品と交換さるゝ分量は」生産費に定まる。而して、彼は言ふ、生産費とは一見「資本のみ」に成るが如く見ゆる、彼が資本のみとは資本と資本利潤とを包含するの謂である。隨つて彼は直ちに次の如く叙述す。

資本家は雇傭する労働者に賃銀を支拂ひ原料を購ふ、又其の費消したるものには用ひたる資本に對し普通利潤を附したる價格に於て歸る可きなりと期待する。問題に

對し斯くの如き見解を以てせば生産費とは唯單に用ひられたる部分の資本と生産を有効ならしむるに用ひられたる全資本に對する利潤とを加へたるものに成るが如く見ゆる筈である。(1)

然し彼(ジエムス・ミル)は説明する「最初の資本は真正労働の成果たらざる可からず、隨つて資本の價值は「労働に依り測定」されねばならぬ、因つて最初の資本の補佐に依り造られたる後の資本の價值も亦労働に依り測定されねばならぬ、且つ「若し資本の價值は労働に依り決定されねばならぬとせば、一切の商品價值は労働に依り決定されねばならぬと言ふ凡ての假定は成立する。」隨つて彼(ジエムス・ミル)が結論して言ふ所は、「商品が他の商品と交換さるゝ分量を決定するものは何ぞや」との、彼自ら提出したる疑問に對する解答は、「労働の分量以外何ものにも非ず」となす。彼は先きに外見上生産費とは用ひられたる資本のみならず、「用ひられたる全資本の利潤をも含む」と見做したるを忘却したるが如く思はる。此の失錯の原因は、タレンス(Torrens)の唱道したる學說を反駁したる事、及び労働者と資本家との二階級に分ちたる後「商品の交換的

(1) Political Economy, 1st ed. p.10.

價值を決定するものは常に資本の高或は蓄積勞働の分量にして、資本勞働の分類以前に於ける如き、單に生産に要したる蓄積並に直接勞働の全量には非ずとの主張をなさんとする熱望の餘り、商品が他の商品と交換さるゝ分量を決定するものは何ぞやとの問題を精密に審議する事より、彼が遠ざかりし結果に基くのである。而して此の論争中に利潤の問題は現れぬ。タレンスは商品の「自然價格」に就きて叙述し、又利潤とは生産過程中に創造さるゝ剩餘にして、是が例ひ「市場價格」中に含まるゝとも、「自然價格」中には含まざるものなりと考へた。彼は言ふ、市場價格が自然價格より多き事は慣習的割合に於ての利潤である。又斯く論述して後彼は冷然として言ふ、「自然價格に等しきものは一般に市場價格にも亦等しきものである」と。實際に彼は、利潤とは「生産費」或は彼の言ふ「自然價格」に幾分の率を加へたるものと見做したのである。若しAの生産費は「費消資本」一〇〇磅とし、又Bの生産費は「費消資本」二〇〇磅とせば、一〇〇磅及び二〇〇磅に對する利潤に同一利率が加へらるゝ間は、Bは一はA二に相當するであらう。

例ひ如何に非合理的議論なりとせよ、若し「生産費が商品の交換的價值を決定し」又「一切の商品の交換的價值は勞働の分量に定まる」と見做さるゝとせば生産費が單に勞働のみに成ると言ふ事、及び勞働の報酬は賃銀なる故に商品或は所産全部は單に賃銀のみに還元さる可く、且つ所産の一部を利潤とせば随つて利潤は賃銀たらざる可からずと推理するは極めて自然な事である。マツカルツクは斯かる推論をなせる最初の者の如く見ゆる。彼は(一八二三年)ブリタニカ百科辭書の附録中に「資本の利潤は蓄積勞働の賃銀に對する別名に外ならぬ」と大膽に主張した。

ジェムス・ミルは敏速に其の概念を採用した。彼の著「原論」(一八二四年)の第二版は「商品が他の商品と交換さるゝ分量を決定するは何ぞや」との章を加へて居る。此の中に彼は言ふ、勞働の分量が商品と他の商品との交換の割合を決定すると言ふ結論を「論ずるに於て考へらる可き一の現象あり」と。

商品の交換的價值は勞働の介在なく、時により影響さると謂はる。其の故は、資本の利潤が含まるゝ場合、一商品の生産が要する時が他の商品生産に越ゆればそれだけ多

くの利潤は加へられねばならぬ。例へば、同一分量の労働が同一季節に葡萄酒一樽と麥粉廿俵とを生産したりとせば兩者は季節の終り相互に交換さるゝであらう。然し若し葡萄酒の所有者は貯藏室に是を二ヶ年放置するとせば酒は麥粉廿俵の價值に勝る。其の故は二ヶ年に於ける資本の利潤は元の價格に加へらるゝに因る。此所に於ては、何等新たな労働の行使はなかりしも、價値の増加は生じたりと證せらるゝのである。随つて、労働の分量は交換的價値を支配する根本條件に非ず。(1)

一般的考慮より見れば、以上の異議は全く正しきが如く響く、然しジエムス・ミルは何等新しき労働の行使なしと言ふ事を否定した。

彼は言ふ、此の異議に應じて、余は、是は利潤の特質に關する誤解に基くものなりと答ふ。利潤は實際上労働分量の尺度である。此の労働分量の唯一尺度こそ、資本の場合に於て、吾々の探及し得るものである。是は最も嚴密なる解剖に依り證明さる可きものである。(2)

此の「嚴密の解剖」とは、所謂利潤を得るに用ひらるゝ機械の所有者は、市場の競争に依り定められ、随つて資本金額と全く同等なる「年收金の形に於て其の

(1) Art. Political Economy, pp. 94, 95.

(2) Ibid., p. 95.

機械の價値を取り戻すとの證明を意味する。資本價値は其の機械に要したる労働の分量に依り決定された、又同様各年の年收金は、要したる労働の分量に依り決定さるゝ。

資本は正確に蓄積労働の名稱の下に叙述さるゝを得。百日労働に依り生産さるゝ資本の一部は百日の蓄積労働に等し。然し百日の蓄積労働の總體は資本を代表する物品の消耗に至るまで消滅せず。一部消滅せりとは、如何なる部分なるか。(1)

一般人は、物品の全く消耗するに至るまで支へ得る能力の半分使用された場合、物品は半分消耗に歸したりと思惟する。例へば、若し絨緞が六ヶ年保つとせば、三ヶ年用ひられたる時は半分消耗に歸したのである。されば、若し絨緞が床を蔽ふに用ひらるゝ毛織物なる代り、眞に「蓄積労働」なりとせば、三ヶ年の終りに於て蓄積労働の半分は既に消滅したりと吾々は謂ふ。然るにジエムス・ミルは蓄積労働百日の幾部分は消滅したりやとの疑問に對して答ふる所は甚だ異なる。

彼は言ふ、是に對しては吾々は何等直接の尺度を有せず唯間接の尺度を有するに過

(1) Art. Political Economy, pp. 96, 97.

ぎぬ。若し年收金に依り償還さるゝ資本が一〇パーセントの率に於て支拂はるゝとせば、十分の一蓄積労働が一年に消滅せりと考ふるは正當である。(1)

而して斯く謂ひたる彼(ジェムス・ミル)は、機械の製造に要したる百日労働の十分の一は正確に一年間に消滅したりと述べを得ぬ、其の故は是が不合理の結果を招くに至る。例へば、機械が一の新溝掘機にして、何等修理の要なく無限の時日の使用に堪ゆると假定する。十日の千倍は一萬日にして、例ひ其の機械は唯百日の價あるとしても、ジェムス・ミルに従へば、千年の終りには是が一萬日の労働を要したる事となる。更に其の機械が唯六ヶ年のみ役立つと假定せよ。其處で資本家の六年間(一〇パーセントを所得するため)に得る所は、約年二十三日分の労働價値即ち利潤として十日、消滅費として十三日である。二十三の六倍は百三十八である、因つて再び全消費労働の分量は眞に機械製作に要したる全労働より超過する事となる。又何等かの利潤の存在する場合は常に斯くの如くなるは明白である。

ミルの消費労働とは實際上決つして基本的労働に非ずして、機械に依り鬼

(1) Art. Political Economy, p. 97.

に角成されたる新労働である。彼(ジェムス・ミル)は言ふ、若し商品が何等手入れ修理をも要せざる機械にのみに依り造らるゝとせば、其の商品價格は全然利潤と成る。

然し労働が斯かる商品の價値を創造するに與る所なしとするは眞に不合理たらざる可からず、故は例證上商品に其の全價値を附與するものは労働となる、又若しそれ(商品)が労働なくして得らるゝとせば、是は全然何等價値を有せざる筈である。其の價値を創造したるは眞に蓄積労働にして直接労働に非ず。然し直接労働が其の行使されたる分量に比例して價値を創造するが如く、蓄積労働も亦斯くする。又斯くの如くならずと考へらる可き何等の原則も他にない。若し以上の如き想像になる特質を有する二個の機械、即ち一は百日の蓄積労働、他は二百日の蓄積労働のものなりとせば、後者一日の所産は他の一日の所産の二倍の價値を有する。何故なるや。二倍の労働の分量が是に行使されて居るに因る。此の問題も恰も時に對しての所謂給與を考慮の中に入るゝ場合と同様である。若し百日の蓄積労働が二日間行使されたりとせば、其の所産は二百日の蓄積労働に依る一日分の所産と價値に於て等しい。何故なるや。百日の蓄積労働を二日間行使するは二百日の蓄積労働を一日間行使すると分量に於て等しい故である。(1)

(1) Art. Political Economy, p. 98.

然れどもマツカルツクも勝る所はあつた。彼の「經濟學原論」(一八二五年)中に、賃銀と利潤との間には何等著しき差異を認むるは不可能であるとなした。利潤とは蓄積労働の賃銀なりと呼べる可く、又賃銀とは「人間たる機械の所有者に對する利潤なりと呼べる可く、是は機械の損傷を回復し、或は老廢労働者に新しき労働者を以て置き換ふるに等しき事に對して支拂はるゝ金額である。』現在二五磅の價值ある木一本は百年以前一志の費用にて植付けられたるやも知れぬ。マツカルツクに隨へば、其の價值は全く労働に歸するものである。基本労働の志^{シツク}價值は極めて僅かなるは疑を要せず、然し是は資本或は蓄積労働として全一世^{シツク}働いて來て居るのである、斯くて年々の所産は貯へられた。同様に、或る種の葡萄酒は貯藏されて價值増加を來すは、其の葡萄酒に含まるゝ資本或は蓄積労働の働き續けたりとの事實に歸するのである。或る葡萄酒は貯へられても善く變る事なきは、其の資本の働かざるか、或は寧ろ其の労働は善用されざるか又は捨てられたるかに因る。斯くて、吾々の結論し得る所は、資本と呼べるゝ無生労働者が、それ自體に對してゝなく、其の所

有者に對して何故報酬を齎すかの理由は、唯是が何物かを生産するに因ると言ふ事である。ジエムス・ミルは其の著第三版(一八二六年)に於て貯藏された葡萄酒の價值の騰貴するを、次の如く説明に努めた。

利潤は支拂はれざる可からずとは何等の解決の謂ではない。是は何故利潤は支拂はれざる可からざるやの疑問を起さしむるに過ぎぬ。是に對する唯一の解答は、是が彼等の労働に對する報酬なりと言ふ事である。其の労働とは與へられたる商品に對して直接用ひられたる労働の謂に非ず、他の商品の媒介に依り是に用ひられたる労働即ち労働の所産である。斯くの如く、人は労働百日分の所産たる一機械を所有するとする。是を使用するは、其の所有者が疑もなく労働の媒介を通してのみ得られたるものを使用するに等しく、第二意義に於て労働を用ゆるの謂である。此の機械は例へば、正確に十ヶ年使用に堪ゆるとする。されば、労働百日分の十分の一が一年毎に費消さるゝ事となる。是は恰も費用及び價值の見地より觀て、労働十日分は費消されたりと言ふに等しい。其の所有者は、機械の一年に割り宛てゝ費用たる可きものゝ全額、労働百日分に對して支拂を受く可きである、即ち其の機械の基本的價值に等しき十ヶ年間の年金である。斯くの如く、利潤とは單に労働に對する報酬の謂である。實際上是が賃銀と名々さるゝとも、言葉の用法の誤りに非ず、一比喩として間違ひはないのである。

其の労働の賃銀とは、直接手に依り行はれたる労働に對しての謂に非ず、手の生産したる機械に依り間接に行はれたる労働に對するの謂である。又若し諸子が賃銀の高に依り直接労働の分量を測るとせば、諸子が資本家に對する収益の高に依り第二労働の分量を測る事も同じ。(1)

是等不合理の學説は、一商品の價値の成分を解剖して經濟問題を解決せんと企てたる危険を示すものである。若し、ジエムス・ミルとマツカルツクとが一國の全所産或は収入は三つの部分——賃銀、利潤及び地代より成るとの概念を固持したりとせば、兩者は何故利潤は支拂はるゝや、利潤は賃銀なりと主張して其の證明に努力する事は決つてなかつたに相違ない。斯く價値に對する混亂せる理論は、社會の年収入の大部分が或る者に所得され、而も是は労働の報酬にも非ず、土地の地代に非らざる事實を毫も證明せぬ。若し利潤は労働に對する報酬なりとせば、吾々は問はん、何人の労働に對してなるやと。資本家の労働に對してには非ず、其の故は資本家たる彼等は労働せず。資本或は其の一部を創造せる過去の労働者の労働に對してにも非ず、當時彼等の

(1) Elements of Political Economy, pp. 314-316.

賃銀は全部支拂はれて居るからである。

シニア (Senior) の瞭解は勝れたるが故に利潤を以て賃銀となすが如き事はなかつた。然し彼は利潤とは、賃銀の如く、何にもものかの報酬なりと證明するを欲し、斯くて利潤とは行爲或は「禁制」に含まるゝ犠牲の報酬なりとの概念に到達した。彼は言ふ、「言葉禁制とは労働と自然の働きとより分たる可き要素を言ひ表はさんとするのである、協力は資本の存在を必要とし、又是は労働が賃銀と兩立するが如く利潤と兩立する。」又更に「言葉資本、資本家及び利潤とは器具、是を使用又は行使する者及び彼の報酬を表はす。然し利潤が報酬となり、又労働が賃銀に對するが如く、利潤に對し同様の關係に立つ行爲、行動を言ひ表はす可き一般的言葉はない。此の行動に對して既に吾々は禁制の名稱を附して居る。」實際に、利潤が「報酬」たる可き行動は存在せざるが故に名稱なき事に對して、彼の心は何等質疑を起さざりし様に見ゆる。彼が此の想像的行動に對して一度名稱を得たる時に萬事好都合に運ぶのである。若し如何なる利潤も禁制の報酬たらざれば、是は利潤に非ずして地代なりと言ふ事

が言ひ得るのみである。既に述べたる如く、シニアは此の好都合を全く自由に利用し、意識せるや無意識なりしや、利潤より一切の相續財産より生る収入を除外した。斯く彼は、禁制とは貯蓄と相關聯せるものと見做した。其の結果は滑稽にも、年三〇〇〇〇〇磅を貯へ、且つ自らの用に一〇〇〇〇〇磅を消費する富豪は、年一〇〇磅を貯へ、自らの用に一〇〇磅を消費する一事務員に比べ、其の禁制は勝る事となる。シニアは此の事實を殆んど否定して言ふ、「同一國民の異りたる階級間に、最も教育なき者は常に最も不用意にして、其の結果禁制は最も少ない」と。「最も教育なき」として彼の意味する所は、最も貧乏なる者の階級を指示する。

斯くの如く彼(シニア)の學説は、資本は貯蓄の結果にして、人々は貯蓄により何等収入を得る所なくば貯蓄せざる可しとの提言以外、吾々に眞に教ゆる所はない。是が眞なる事を是認するとしても、収入は何故貯蓄より得らるゝかは證明せず。シニアの心の中に思索の命脈をなすものは、労働は苦痛である、故に報ひられねばならぬと言ふ事であつた。労働が報ひらるゝの理由は苦

痛なるがためであるとの事を、彼は既定の事實として取扱つた。此所に彼の誤解は存するのである。労働が報ひらるゝは苦痛なるが故に非ずして、富を生産すが故である。例ひ一切の労働が苦痛なりとするも、尙是は富を生産するであらう、又少くとも此の富の一部は其の報酬たる可きものである。

シニアは、利潤が満足に證明せられて居らざるを確め、此の缺乏を補はんと企てたるに對して、少くとも功績を稱せらる可きである。是に反して、ジエ・エス・ミル(J. S. Mill)は全く何ものも缺乏して居らぬと思惟せるが如く思はる。

彼はシニアの利潤の存在に對する證明を採用し、出發した。彼は言ふ、「労働者の賃銀とは労働の報酬なる如く、資本家の利潤とは、シニア氏の巧妙なる語法に依る、當然禁制の報酬である。」又彼は一切の資本は費消さるゝと言ふ彼自身の特種無根概念を挿入した。「彼等(利潤)とは彼(即ち資本家)が資本を自らの使用のために消費に任すか、又生産労働者に其の使用のために消費に任すかに依りて得る収益である。」されば吾々は、蒸氣機關の所有者は自らの使用のために該機關を費消するに任すか、又生産労働者の必要のために消費に任す

かに依り利潤を所得すると謂ふ可きである。是に従へば吾々は、一收穫より次の收穫に至るまで地主及び非生産労働者の消費に對して供給せんため、穀物を所有し保つ穀物商人に依り所得せらるゝ利潤に就きて考ふるは、至難である。如何にして彼(ミル)は、生産労働者に對し其の必要とする穀物を費消に任したりと謂ひ得るや。ミルは續て言ふ、「此の任せたる事に對して資本家は報酬を要求するのである」と。恐らくは、吾々大部分の者は、少しなりとも所得する事を得る機會ある毎に報酬を要求し請求するであらう、然し是を得るに成功するの理由は何故なるか。此の疑問を起す代り、ミルは「彼は果して報酬を得るや」との質問を發したるが如く見ゆる。

屢々個人的享樂のために彼は其の資本を浪費して樂しむ事もある。其の資本の高は彼が生存すると豫想する年限内に生まるゝ利潤の高より尙多きものである。然し彼が是を浪費せずして保留する間は、其の要求又は必要に應じ是を費消するの實力を常に有するものである。彼は死亡に依りて他人に譲る。又暫くにして彼は窮乏する事なく、是より彼自身の欲望或は要求を充すに用ゆる收入を得る。(1)

(1) Principles, Bk. II, ch. xv. §I; 1st ed. vol. i. p. 477; People's ed. p. 245a.

然れども、利潤は價格、或は賣買に定まると云ふ意見を論證したる後、彼(ジェ・エス・ミル)はもとの問題に復歸するの必要を感じたのである。

利潤の原因は、労働が自らを支ふるに必要となす以上に生産するに依る。何故農業資本が利潤を生むやの理由は、人間が用具を作り其の他一切の準備をなすに要する時を含みたる、食物蒐集の間に、彼等(人間)を養ふに要する以上の食量を生産し得るに因る。随つて利潤は結果である。即ち資本家は所産を受くる條件の下に労働者を養ふを引き受くるとせば、彼は其の用立てたるものを補ひて後、彼自身に對して殘餘の幾分を得るのである。……斯くして吾々は知る、利潤とは交換の事實に依り生るゝに非ずして労働の生産能力に生ると。又一國の一般利潤は、交換の行はると否とに拘はらず、生産的労働が利潤を造るに基く。若し職業の相違なしとせば、何等購買も販賣もなければ、利潤は存在する。若し一國の労働者が總體的に彼等の賃銀以上に所産二〇パーセントを生産するとせば、價格の如何に拘はらず、利潤は二〇パーセントとなるであらう。(2)

此の章句の中に、ジェ・エス・ミルは明かに其の問題をリカード學派の見解より考察したのである。利潤を賃銀に勝る單なる剩餘と見做し、剩餘は資本の

(2) Ibid., Bk. II, ch. xv. §5; People's ed. p. 252; not in 1st ed.

奉仕或は効用に對して何等の關係を有せざるのである。是に對して、同一分量の勞働は是が資本を用ひたる場合、用ひざる場合より多く生産するに依り利潤は生るゝとなすラウデルデールの明確なる證明、及び、マツカルツクとジエムス・ミルとの利潤は賃銀と同一なりとせる混同せる企圖も、共に何等なす所はなかつた。

第五節 地代の發生と原因

既に吾々の知る如く、アダム・スミスは土地の地代を闡明するに何等努むる所なく、唯土地に關する資本の運用に對して支拂はる可き總ての者を控除して後殘る定期的支拂を、通常地代と呼ぶと言ふに過ぎなかつた。地代の特質を説明するに當り、彼は、全地代は資本運用に歸するに非らざるを説明するの必要を感じた。是に對して彼の證明する所は、地主は全然開拓されざる土地に對してすら地代を要求するとの引例を與ふる事であつた。海岸に於て昆布を蒐集し、或はシエットランド島附近にて漁をなす機會に對し地代の支拂

はるゝ場合は、單に未開拓のものに對して是が支拂はるゝのみならず、又「人力にては全く開拓し得ぬ」ものに對して支拂はるゝ地代なりと成す。彼の結論は隨つて、土地の地代は利潤とは何等かの差異を有するものであると言ふ。「地代は、地主が土地の開拓のために支出したるもの、或は、彼が得るために提供したるものに對しては全く比例を示さず、然し是は「自然的に獨占價格」である。何故地主が獨占價格或は運用したりと見做す資本に對しての普通利潤より多くを得るやとの事に就きては、アダム・スミスは極めて漠然たるものがあつた。章「商品價格の構成部分」に於て、彼は言ふ、

孰れの國に於ても土地が凡て私有財産となるや直ちに、地主は、他の凡ての人々の如く、一度も種子を蒔かざる所に收穫を得んと欲し、又其の自然的所産に對してすら地代を要求する。森林の木材、廣野の雜草及び一切の土地の自然的果實、是等は土地の共有なりし時、勞働者にとりては是等は單に採收する勞作のみに價すれど、終に其の勞働者に對してすら是等に定められたる追加價格を現はすに至る。其所で彼勞働者は是等を採收する許可證に對して支拂はねばならぬ、又其の勞働者が蒐集し或は生産するものゝ一部を地主に送らねばならぬ。此の部分或は是に相當するもの即ち此の部分の代

六〇
價が土地の地代となる。且つ是が大部分の商品價格の中に第三構成部分をなすのである。(1)

此所に於て、所産の一部に對する地主の要求は、別に大部分の商品價格たる可きものに對して何等かを加ふるの結果を生ずるが如く思はるゝ。然し地代の章に於て、以上の章句に對する説明なるか或は反駁なるか、アダム・スミスは言ふ、地代は、

賃銀及び利潤と異り、商品價格の構成中に入る。高低の賃銀と高低の利潤とは高低の價格に對する原因となる。高低の地代は其の結果である。高低の賃銀と高低の利潤とが支拂はれざる可からずとは市場に於て特種商品の高低の價格を定むるに基く。然し是等賃銀と利潤とを支拂ふに要する高より著しく多きか、多少多きか、同等なるかに依り其の價格は高く或は低くなり、斯くて高き地代、低き地代、或は無地代の結果を生ずる。(2)

地代を見做して土地所産の一部なりとするより却つて商品價格の一部なりとなしたるアダム・スミスは、如何なる土地が地代を生むやを考ふる代り、如

(1) Ek. I ch. vi. p. 23 a.
(2) Bk. I. ch. xi. p. 67 a.

何なる商品が價格の一部として地代を含むやとの質疑を正さんとするに至つた。特種の所産の生まるゝ土地の地代は、其の地の肥沃と地形とに依り差異を來すと言ふ事實に就きては、何等説明を要せざる明白な普通事として、彼は扱つたのである。

彼は主張するに、人の要する食物は是を栽培する土地の所有者に對して、常に又必然的に何等かの地代を與ふ。他の所産は時に與へ時に是を與へぬ。食物が常に價格の中に地代を含み、或は常に地代を生む事を、彼(アダム・スミス)が證明せんと試みたる理由は、豫期の如く、甚だ明瞭なるものではない。

彼は言ふ、人々は他の凡ての動物の如く、自然的に彼等の生活の必需品に比例して繁殖する。食物は常に幾何が必要である。食物は常に勞働のより大或は小なる分量を購買し或は支配し得る。又是を得んとして常に何等かを提供せんと心がくる者は見出さるゝ。(1)

而して此の叙述が食物に對して眞なる如く、他の多くの商品に對しても眞理である。今一步を進め、是が食料に對するより寧ろ他の多くの商品に對す

(1) Bk. I. ch. xi. p. 67 b.

るが眞である。其の故は、アダム・スミス自身洞察する如く「食物に對する欲望は人間の胃の狭き可能性に依り、何人も制限を有する。然るに便宜、家屋の裝飾、衣服、調度及び家庭の用具に對する欲望は、何等の制限或は特種限界なきが如く見ゆる」。場合に依りては、コーヒエアのグイヤモンドも少量の食物とも交換しざる事を考へらるゝ、然し多量の食物も販賣し得ざるが故に捨て去らるゝ事も考へらるゝのみならず、實際上絶へず發生するのである。是は事實上「是を得んがために何事かをなさんとする者を發見し得ざる」に因る。通常の場合に於ては、金屬、衣服及び家屋は常に食物の如く幾何かの需要を有するのである。是等のものは常に勞働のより大或は小なる分量を購買し或は支配するを得。又何人か常に是等のものを得んがためには何事かをなさんと欲するを發見さるゝ。是を考察する事なく、アダム・スミスは短き挿句を挟み進めて言ふ、

然し大抵の場所に於て土地は、食物を市場に輸出するに要する勞働を極めて寛大の程度に支ふに足るより尙多き食物を生産する。且つ其の剩餘も亦勞働を雇備したる

資本に利潤を附して償還するに要する以上に上るものである。(1)

是は「大抵の場所に於て」土地が、勞働者の賃銀と開拓する資本家の利潤とを支拂ひに要するより尙多くの食物を生産すると主張する、言ひ過ぎたる説明に過ぎぬ。アダム・スミスは結論して「随つて何ものか常に地主に對する地代として残る」と言ふ。「大抵の場所に於て」の土地に就きての彼が主張を強固にするために、彼は更に觀察を進めて言ふ、

ノルウエー及びスコットランドの最も荒廢せる沼地は、家畜のために或種の牧草を生産する。家畜のミルクと繁殖とは、是に働く必要一切の勞働を支持し、且つ其の畜類或は畜群を有する農夫或は所有者に對し普通利潤を支拂ふのみならず、其の地主に對しても幾何かの地代を與ふるにも足る以上のものたる事は常である。(2)

地主に地代を常に支拂はざる土地の所産として、アダム・スミスの擧ぐると思はるゝものは、羊毛、毛皮、木材、石材及び鑛物を主とする。羊毛、毛皮とは必然的に其の肉と共に生産せらるゝ。又随つて、彼は言ふ、食物が殆んど全く獸類の肉に成る場合は、是が過量となり、故に是等は僅少か或は何等の價值も有せざる

(1) Bk. I. ch. xi. p. 75 b.

(2) Bk. I. ch. xi. p. 67 b.

に至り、地主に對して地代を與ふるを得ず。若し地主は既に食物より地代を得るとせば、所産に羊毛と毛皮とを加ふる事は、例ひ極めて僅少なりとも、彼に或る追加地代を與ふる事となる。木材、石材及び鑛物に關して、アダム・スミスは言ふ、スコットランド中の多くの場所に於て善き石切所も何等の地代を生まず、且つ多くの場所に於て、地主は家を建つるに『是を求むるの勞をとる何人にも』木材を與ふるは通例であると。同時に彼(アダム・スミス)は考ふるに、石炭及び他の鑛物とは時には實益なく、又時には市場より餘りに遠きに過ぎ賃銀と利潤以外に支拂ふを得ぬ。されば、何故食物以外他の所産は各々、常に地主に地代を與ふるに對し食物と相違するやに關して、特種の理由の存するが如く見ゆる。アダム・スミスの解説は、食物を生産する勞働者の所産の價値は、常に彼等の賃銀の支拂ひを超ゆるものなる事、及び是は他のものを生産する勞働者の所産の價値の場合と時に等しく、時に等しからずとの叙述以上に出でざると見做さるゝのである。

叙述の第二は明かに眞である、然し第一は然らず。アダム・スミスは實際に

大抵の場所に於ての土地は、耕作者の賃銀と利潤とを支拂ふに足る以上の食物を生産するとの主張を以て、其の陳述を打ち切つたのである。若しも孰れの場所に於てか是をなし得ぬ土地あるとせば、何にものか常に地代として残ると言ふ彼の結論は不正確である。而も斯くの如き土地の存在するは何人も知る所である。アダム・スミスはノルウエーに於ての荒廢の沼地に就きて語れども、ノルウエーの沼地よりも尙肥へず且つ市場に遠き土地もある。サハラ沙漠及びグリーンランドの氷結せる山々は是である。是等最も荒廢せる遠隔の地方中には、各々種々の特質及び位置とを有する土地が存在する。随つて最も粗惡の土地を食物生産に用ゆとするも何等望しき地代を得るは不適切なれども、唯耕作の費用と運用したる資本に對する利潤を與へ、且つ是が所有者によらず小作人に依りて耕作さるゝとせば、地主にとりては、唯薄利を齎すのみと推理するは合理である。此の事は、既に吾々が偶々引用したるアパデインシャイアの農夫、ジェムス・アンダーソン (James Anderson) にとりては明かであつた。一七七七年に公刊されたる彼の著、穀物條例の特質の研究、ス

コットランドに對し新穀物法案に關する意見を具してに於て、彼は肥沃の程度異なる土地に於て圓形燕麥を作る費用に關しての多數の例を擧げた。是に依れば、何等地代を生まざる土地より食物を得る事が利益となる事ありと謂ふ。同年出版されたる彼の著、國家的産業の精神を刺戟するの手段に關する洞察に於て、地代とは比較的肥沃なる土地を耕作するに支拂はるゝ謝禮なりと、彼は説明した。

あらゆる國に於ては種々の土壤あり、是等は皆肥沃の程度を異にする。又是に依り是等の中最も肥沃なる土地を耕作する農夫は、より肥沃ならざる土地を耕作する農夫に比べ非常の安價にて其の穀物を市場に輸送し得る。然し若し是等肥沃の場所に育つ穀物が唯市場に供給上不充分なりとせば、其の價格は市場に於て上騰して、より粗惡の土地を耕作するに要する費用に對して、他の者に報酬し得る高さに至る。然れども、富有の場所を耕作する農夫は、市場に於て其の穀物の賣却に際し、粗惡の場所を所有する者と同一價段を以てするであらう、故に彼は其の穀物に對して眞正價値に勝るものを受くる。隨つて多くの者は斯かる肥沃の土地を所有する事を望み、又是等を耕作する特種利權に對して或種の謝禮を支拂ふ事を甘んずるであらう。是は土壤の肥

沃程度の多少に隨つて多少となる。是の謝禮こそ吾々が呼ぶ地代をなすのである。此の謝禮に依り肥沃の程度異なる土壤を耕作するの費用が全く平等に至るまで低減するのである。(1)

廿五ヶ年の後彼(アンダアソン)は尙ほ同じ學説を教へて居た。彼の「娛樂」の中に言ふ「實際に地代とは、耕作費を増大或は減少せしめて、肥沃の程度異なる土地と地方的事情の相違とより生ずる利潤を平等になさんとする簡單巧妙なる案出物に過ぎず」。何故地代は支拂はるゝやの質問に對する彼が解答は、地代とは是が支拂はる可き一切の土地に對して拂はるゝものである、夫は、斯かる土地が、其の時の價格に於て、耕作上利益ある可き最惡の土地に比べ尙一層肥沃なるに因ると、謂ひしが如く見ゆる。此の解答は、アダム・スミスの該問題に對する見解と同様矛盾を示す、然れどもアダム・スミス及びアンダアソンも共に此の矛盾を認め得ず、或は是が重大なるものなりと思惟しなかつたのである。アンダアソンの「觀察」中の章句は、アダム・スミスの主張したる、英國より穀物輸出に與ふる獎勵金の効果に對する意見に就きて、長き辯駁の道程を

(1) Observations on the means of exciting a spirit of National Industry, p. 376.

示して居る。然しアンダアソンはアダム・スミスの地代學說の誤りを追及せず、又アダム・スミスは、イングラム(Ingram)教授の洞察する如く、アンダアソンの批判を認むる事を終に失敗して、其の學說の訂正をなさなかつた。是は、アンダアソンの著述は、何故地代を支拂はるゝやの質問が興味あり、且つ激昂のものなりと認めらるゝ時の到來する以前なりしに基く。

然し、一八一四年に於て、何人も保護、價格及び地代に就きて考慮せる時に、事情は尙一層熟して居たのである。其の年該質問は、明確にデヴッド・ブキャナン(David Buchanan)の編輯「諸國民の富」の中に問はれた。第一篇第六章の章句に對する附言中に、ブキャナンは觀察する、

此所に於て、スミス博士の叙述する所は、地主は他の人々の如く、彼等の決つて種子を蒔かざる所より收穫を得んと熱望し、且つ土地の自然的所産に對してすら地代を要求するとなす。彼等は斯くの如し。然し、問題は、何故斯くの如く一見不合理の要求が極めて一般に充されて居るやに在る。他の人々も亦、彼等が決つて種子を蒔かざる所に收穫を得んと熱望する。然し地主は唯一人、其の目的を極めて都合よく貫徹するが

如く見ゆる。(1)

ブキャナンは彼自身の質問を満足に答ふるを果さなかつた。彼の考察は穀物の價格は全く需要供給に定まり、而して需要供給の状態は常に生産費を超ゆる剰餘を齎すに充分であると言ふ。然し彼は、何故斯くある可きやを明かに示す所はない。是は穀物供給が「耕作に用ひらるゝ土地の分量に依り制限を受くる」に因ると、彼は思惟したる如く見ゆる。地代は斯くの如く土地の「獨占」の結果により生るゝとなす。

獨占到對する利潤は全く地代の如く同一基礎の上に立つ。獨占とは、地代の場合に於て自然的原因によりなされたものが人工的に行はれたるものである。それ(獨占)は價格をして賃銀と利潤との高さを超ゆるまで市場供給を切り詰むる。(2)

地代は耕作さる可き土地の欠乏に依りて生まるゝと信じたるブキャナンは、自然的に、地代は唯一の課税さる可き収入なりとなしたる重農學派の學說を反駁して、若し「是を受くる者にとり有利なり」とせば、是に比例して是を支拂ふ者には有害たらざる可からずとの事實を主張するに努めた。

(1) Wealth of Nations, edited by Buchanan, vol. I. p. 80, note.

(2) Ibid., vol. I. p. 274, note.

此の文章は、マルサスの「地代の特質と増進」の公表と甚しく近似せる如く現はる。マルサスは、彼が吾々に語る如く、地代の問題に關しては、アダム・スミス及び重農學者の孰れとも一致する所はなかつた、尙更に、彼が指名に成るセイ(Say)、シスモンディ(Simon-di)及びブキャナン(Buchanan)のみを含む「或る最も近代の學者」と相入るゝ所は少なかつたのである。彼(マルサス)の見る所では、是等學者は、地代をして、其の特質及び是が支配を受くる法則上、獨占の特質として現はるゝ生産費以上の過剩價格に近似せりと見做す事餘りに過ぐると。常に土地の利益を擁護せる彼(マルサス)は、かの危急の場合に於て、何故地代は支拂はるゝや、の質問に對して與へたる解答は、ブキャナンの解答——地主は獨占を有するに因る——に比べ、公衆の評量上地代は尙善意に解さる可きものなりとなした。

彼の序文中に言ふ、次の小論文は地代に關して或る必要の趣意を載す。是は、他の經濟學に關する異りたる問題と共に、余が東印度大學に於て教職にありし當時蒐集せるものである。時々、或る形式に於て是等を公刊せんとは余の希望であつた。又此の研

究問題が、目下論議中の題目と聯絡する事近き故に、此の場合該問題を取扱はんとするに至りたるものである。斯くする事は、公衆の智識の増進を量らんとする者にとりては、任務たるのみならず、最も有効なる時に斯くなす可きものである。若し論文の性質上小冊子の形式は讀者にとり不適當なりとせば、元來斯かる貧弱なる企てはなさざりし故を以て謝さんとするのである。(1)

其の小論文の初頭に於て彼は言ふ、地代は

多分今の場合其の特種主張を以て吾々の注意を喚起する。夫は地代が穀物條例に關して行はるゝ議論原料所産の價格、農事改良の進歩に及ぼす影響に因る。(2)

斯くの如く、何故地代は支拂はるゝやの問題は實際政治の一主題となつた。該問題に對するマルサスの解答は三様である。彼は言ふ、地代は支拂はる可し、故は(一)土地は其の耕作者を支ふるに必要以上を生産する、(二)生活の必需品は「其れ自體に對する需要を創造し、或は生産さるゝ必需品の分量に比例して需要者の數を増加し得る」特種の特性を備ふ、且つ(三)最も肥沃なる土地は比較的僅少である。若し是等三原因中就れか欠乏せば、地代は生じない。第一、

(1) An inquiry into those principles respecting the nature of demand and the necessity of consumption lately advocated by Mr. Malthus, in the Preface.

(2) Ibid., p. 8.

若し土地全體が其の耕作者の生計以上を生産し能はざれば、如何に多くの土地が獨占さるゝと見做すとも、地代たる可き剩餘所産が存在し得ざるは明白である。第二、若し人口が食物増加と共に増加せざるとせば、生産さるゝ食物分量の増加は食物價格を其の生産費まで低落せしむる原因となる。斯くて又地代たる可き何等の剩餘は殘されず。斯くの如く闡明して、マルサスは第三原因を論議するを待たずして、地代に對して讚美を宣ぶるは正當なりと自ら思惟した。彼は修辭的に探究をなして言ふ、地代とは、唯地主に對してのみ利益となる價值の單なる移動たることより遠く離れ、且つ消費者に對して比例的に有害たる可き事より遠く離れ、是に反して、

神が人に授けたる土地の有する計り知られざる特性——是に勞作する人々より更に多くの人々を支へ得る特性——の明かに表示せるものたらざるや否や。それ(地代)は一部分的のものに非ず、又一切の實力及び享樂の源泉となると、今叙述したる土地の生む剩餘所産中絶體的必要部分なりと更に吾々は解するに至る。是剩餘所産なくして、實際に都市なく、陸海軍の備なく、藝術なく、學術なく、より美しき製造業なく、外國の便宜奢侈なく、且つ個人を向上せしめ威嚴を加ふるのみならず人々の全集團を通じて其の

善良の感化を及ぼす可き教養あり又精鍊されたる社會の存在もないのである。(1)

然し斯く俗的表言を用ひたるは、彼(マルサス)が未だ其の森林中より脱し得ざるを證し、且つ終に彼は致命的結果を生む可き一の是認をなして居る。第三原因、最も肥沃なる土地の比較的僅少に關して、彼は次の如く述べ、

社會の初期の時代に於て、或は尙適切に、恐らくは古き社會に於て智識と資本とが新鮮肥沃なる土地に適用されたる場合には、此の剩餘所産即ち攝理の寛大なる贈物は、其れ自體を主として驚く可き高き利潤と驚く可き高き賃銀の中に現はし、又地代の形に於ては僅かに現はすに過ぎぬ。肥沃の土地は多量にあり且つ是を求むる者は何人も得らるゝ間は、勿論何人も地主に地代を支拂はざる可し。然し此の事物の狀態が其の儘に持續す可しとは、自然法則並に土地の制限、特質と相反する。凡ての土地は最も肥沃たり得ず、凡ての位置は交通可能の河川及び市場とに近接するを得ない。然れども最上自然的肥沃にして且つ最上好位置を有する土地に要す可き資本高を越へて資本を蓄積する事は、必然的に利潤を低落せしむるものである。同時に生計の手段を越へて増加する人口の傾向は、或る期間の後、勞働の賃銀を低落せしむるに至る。(2)

されば、食物價值は利潤を加へたる生産費に超過するであらう、而して『此の

(1) Ibid., pp. 16, 17
(2) Ibid., p. 17.

超過こそ地代である。」

七四

又是等地代が永久に資本利潤の一部或は労働賃銀の一部として存続す可しとはある得べからず。若しかゝる蓄積により確然と一般資本利潤が低落し其の結果耕作費の減少を來し、斯くてより粗悪の土地を耕作するが如き結果の現はれんとせば、より豊饒なる土地の耕作者は地代を支拂はざれば單なる農夫たり或は農業資本利潤に衣食する者たる事を中止するに至る。彼等は農夫及び地主の特性を併せ備ふ——其の合一性は決つて稀れならず、然れども是が毫も地代の特質或は其の利潤に對する基本的相違性を代ふる事はない。(1)

更に進め、地代を利潤と賃銀とより辨別するは避け難き事なるを繰返し、且つ再び其の讚美に入つた。

随つて、一國民が非常に莫大の富を擁し、且つ人口が著るしく充滿するに従ひ、勿論是は資本利潤と労働賃銀とが共に著しく低落するに非ずしては現はれずとするも、是に従ひ地代が或る特質を備ふる土地に對する一種の定著物として分離さるゝは、恰も重力の法則の發動の如く、不變の法則にして議論の餘地なき眞理と認めらる可きである。又而も地代とは唯單に名義上の價值には非ず、又は無必要且つ有害に一國の人々より

(1) Ibid., p 18.

他國の人々に移動さるゝ價值にもあらず。然し國民財産の全價值の最も眞正且つ基本部分であり、又地代の存する所では、是が地主、元首、或は事實上の耕作者の執れにより享受されたりとしても、是は自然法則により其の土地の上に置かれたるものである。(1)

リカードは、低價穀物を得んと欲する自由貿易主張者として、必然にマルサスの地代讚美に反對した。マルサスの地代の三原因中、其の第三のみ彼(リカード)の心に感受されたるものであつた。第一、土地は其の耕作者を支ふるに要する以上を生産するの事實は、唯地代をして有り得可きものとなせど、是が存在の原因とはならぬ。『是は、一に高き地代の有り得可きを證し、又他に、眞に是に支拂ふ事實のあり得るを證する。地代は、土地が普通利益を生む國に於けるより、土地の著しく肥沃なる土地に於てより、低くある事あり。』第二原因『其れ自體に對する需要を創造し、或は生産せらるゝ必要品の量に比例して需要者の數を増加せしむる生活必需品に關する特性』に就きて、リカードは信じなかつた。彼は言ふ『是は、潤澤の必需品が需要者を増すに非ずして、潤澤の需要者が必需品を増すのである』と。然し第三原因、最も肥沃なる土地の比較的

七五

(1) Ibid., p. 20.

欠乏の事は、富と人口との自然的増加と共に考ふる時は、原因自體地代に對する説明として、彼(リカード)には思はれた。「穀物低價の資本利潤に及ぼす影響に關する論文」中に、彼は、マルサスの擧ぐる第三且つ最も不快なる原因が地代の唯一原因なりとなしたるのみならず、是がマルサスの研究に現はれたる以上尙不快なるが如く取扱つた。マルサスの研究中には、「最も肥沃なる土地の比較的欠乏」は、地代の原因の一として恰も何人も是に不平を述べ得ざる事實の如く見做された。「凡ての土地は最も肥沃たり得ず、凡ての位置は、交通可能の河川及び市場とに近接し得ず。」最上の土地の有する優秀の肥沃性は、所謂地代を生む可き「攝理の寛大なる贈物」として現はれた。是に反してリカードは、彼の「論文集」中に、最も肥沃にして最上の位置にある土地を以て彼の出發點となし、且つ讀者をして、自然の吝嗇は是を與へざるを歎かしめ、而も此の吝嗇が他のものゝ間に地代を生ましむるに至るとなした。「論文集」中の最初の四文章中の議論の局面は全くマルサスに向けられて居る。

マルサス氏の甚だ正確に定義する所は、土地々代とは、土地所有者に歸する全所産の

價值の一部である、是は如何なるものにせよ、耕作に要する一切の費用を控除したる殘餘のものにして、費用中には其の時の農業資本の利潤に對する普通一般利率に依り測られたる運用資本の利潤を含むと言ふ事である。

されば、農業資本の利潤に對する普通一般の利率と土地耕作に要する一切の費用とを合せて全所産の價值に等しき場合、地代はないのである。又全所産が唯耕作に要する費用に對し價值の等しき時は、地代はなく又利潤もない。肥沃の土地に富む國に最初移住して、又是を得んと欲する何人も所有し得る時は、全所産中より耕作に要する費用を控除したる後殘るものは利潤となり、是は、何等の地代控除もなく、皆斯かる資本所有者に屬するに至る。(1)

マルサスは地代を常に「剩餘或は過剩」として扱つて居た。リカードは地代とは第一の場合に於ては全く農夫に屬す可きもの、且つ若し肥沃にして好位置の土地が充分に供給さるゝとせば、農夫に絶へず全く屬す可きものゝ中よりの「控除」なりと扱ひ續けたのである。彼(リカード)は、一國に最初移住して最上の土地を耕作する一個人の場合を以て始め、假想的數字の排列を與へた、是に隨へば、地代は全く利潤のために發生し且つ増大すると謂ふ。彼(リカード)

は自ら、是等假想的數字より結論するは正當と見做した。

七八

されば地代とは凡ての場合に於て、前以つて其の土地より所得せる利潤の一部である。是は決つて新たに創造されたる収入に非ずして、常に既成収入の一部である。資本利潤は、唯食物を生産するに平等に好適の土地が得られざるに因り低落する。又利潤低落の程度と地代上騰の程度とは、全く生産の費用増大するに従ひて定まる。由つて、若し國富と人口とが増殖するを得ば、利潤は決つて低落する事なく、又地代も騰貴する事はない。(1)

「原論」の地代の章に於て、リカードは「穀物低價の影響に關する論文」の議論を反復した。

彼は言ふ、されば是は唯、土地が其の生産能力に關する特性の差異あるに依り、且つ、人口増加に伴ひ、粗惡の特質又より、不利の位置を有する土地が耕作に供せらるゝに依り、其の使用に對して地代は支拂はるとの事である。(2)

マルサスは、リカードの「論文集」或は地代の章、或は「原論」中の最後の章「マルサス氏の地代に關する見解」に依るも悟る所はなかつた。著「經濟學」に於て、彼「マルサス」は再び彼の「地代の特質と増進」に關する研究の大部分を印刷した、且

(1) Works, p. 375.

(2) Principles of Political Economy, 1st ed p. 51.

つ、リカードが反駁したる見解を特に力強く再録せる章句を加へた。

彼は言ふ、與へられたる土地の所産が眞に如何なる方法に分配さるゝとせよ、即ち其の全部が勞働者と資本家とに分配され、或は一部が地主に與へらるゝとせよ、地代を生む可き土地の實力は全く其の肥沃性に比例する。或は尙嚴密に謂へば、勞働を支へ又要したる資本を保つに要する以上、是が生産し得る一般的剩餘に比例する……然し若し此の剩餘なくして何等地代は存在せぬとなし、又若し地代を支拂ふ特種土壤の實力が此の剩餘に比例するとせば、其の肥沃性より發生する土地の剩餘は明かに凡ての地代の根底或は主要原因と見做さる可きなりと言ふ事となる。(1)

彼(リカード)は其の「土地々代に就て」の章を結ぶに、「されば、該問題を扱ふ凡ての見解中に、吾々の生存の法則に隨ひ、地代中に限定さる可き土地の特質は、人類の幸福に最も重要な福利として現はるゝ」と揚言する。

此の問題に關してマルサスとリカードとの間に行はれたる論争は恐らく實質より寧ろ感情のものであつた。感情を離れて見れば、例ひ吾々が地代の存在は或る分量の善き土地を與ふる自然の恩恵に事よせたるにせよ、或はよ、多くを與へざる自然の吝嗇に歸したるにせよ、眞に何等の差異を來す事は

七九

(1) Political Economy, pp. 140, 141

ない。後年の學者は一般に或る期間より他の期間に於て地代はより高しとの原因を研究する事に餘り力を注ぎ、何故何等かの地代は存せざる可からずやの疑問に對しては甚だ困惑せる如く見ゆる。ブキャナンの如く、ジエニス・ミルは是を「獨占」の事實に歸した。

第二章 誤謬分配論

第一節 頭割り賃銀、仙割り利潤、エカー割

り地代

一國民勞働の所産量を決定する原因は、『生産論』の下に論ぜられ、且つ其の所産の「分配」さる可き三つの大なる部分の特質並に起源は充分に考察されたるが故に、順序として次に來る可きは、自然的に、其の所産が三つの大なる部分に分配さるゝ割合を決定する原因の發見に努むる事であらう。方程式所産 \parallel 賃銀+利潤+地代に於て、所産は、此所では特定量として取扱はれねばならぬ。且つ問題は、方程式の一方に於ての三つの言辭に對する相對的量を決定するものを確定するにある。

其處で、方程式中に與へられたる言辭たる賃銀、利潤及び地代の相對的量の相違するとは、一般的意義に考へられたる賃銀、利潤及び地代の増加減少或は

るかも知れない。

然しアダム・スミス(Adam Smith)の著第一篇の終りの部分は、既に吾々の知る如く基本的に價格の學說である。最後の四章は賃銀、利潤及び地代を載すは、眞に彼等が「所産」の分割なるが故に非ずして、商品の價格なるが故である。商品の「自然價格」は是が各組成部分の自然的率と共に變化するが如く見做さるゝ。又組成部分即ち賃銀、利潤及び地代の各々を増加或は減少せしむる原因が論議さるゝは、これ等が所産の分配さるゝ様式上に及ぼす影響のためには非ずして、其が生産さるゝ商品の自然價格上に及ぼす影響のためである。扱て孰れの特別商品の價格にも影響する「賃銀」「利潤」及び「地代」の變動は、聚合賃銀、聚合利潤及び聚合地代の變動に非ずして、其の商品生産に要したる人々の賃銀、資本利潤及び土地々代の變動である。雇用されたる土地、資本及び人々の數に變化なき限り、商品の價格及び頭割り賃銀、仙割り利潤及びエカー割り地代の率は必然的に一樣に變動する筈である。随つてアダム・スミスが會つて全年所産は合計賃銀、合計利潤及び合計地代を明かに意味せる賃銀、利潤及び地代

に分配さるゝと論述したりと雖も、諸國民の富「第一篇」の中最後の四章は頭割り賃銀、仙割り利潤及びエカー割り地代を取扱つて居るのである。

一部或る自然的混同に依り、一部、頭割り賃銀、仙割り利潤及びエカー割り地代は實際上賃銀、利潤及び地代への所産區分よりは更に興味ある問題なるの事實により、後の著者は一般にアダム・スミスの足跡を辿り、分配論を生産論に對し正當なる附屬論となさんとするに努力を欠いたのである。彼等の學說の歴史を記述するには、或は非理論的なりとは謂へ、最初に同一行程を辿り、正當分配論に關する理論は後章に譲るを至便とする。

第二節 頭割り賃銀の變動

最近一世紀半に頭割り賃銀の大サを定むる原因に關して三つの大なる學說が立てられた。是等は生活費說、需要供給說及び生産說と呼ばるゝものである。生活費說は、人は生存し且つ働くには其の生活に必要なものを得ねばならぬとの事實及び賃銀所得者は「自然的」に生活に要する以上得るを得ず

との假定に立脚する。需要供給説は、労働は商品にして、是に對する需要は是に備へられたる基金の高に依るとの誤謬概念に基くものである。又生産説の基く所は、賃銀或は所得は所産の一部なるが故に是を決定するは勤勞の生産力及び頭割り所産より利潤及び地代を控除したる残額とであるとの事實である。此の著書の扱ふ時代の中に生活費説は徐々に需要供給説に道を譲りつゝあつた。需要供給説が生産説に破ぶらるゝは後年の歴史の扱ふ可き事である。

「諸國民の富」の現はれたる時代に於ては生産費説は其の絶頂にあつた。幾千萬の人々は既に餓死せりと雖も、人は生活せざる可からずとは常に既定の準則となつて居た。眞の必要を知るの力なくして犬儒學徒の勝ち得たる不朽の名聲も、唯其の心は準則の實證を除外したるを示すに過ぎぬ。賃銀に對し準則の適用は極めて明白である。雇用が一時的性質のものでなき限り、人の全時間を要し且つ維持の唯一手段たる仕事に對しての賃銀は少くとも僅かに生活費に足る可きである。若し然らざれば、労働者は直ちに滅亡するに

至る。

賃銀は兎角通常少くとも僅かの生活費に足らざる「可からず」と知れども、實際上の賃銀は明かに僅かの生活費よりは多いと言ふ事を知らざる者にとつては、賃銀は通常或は自然的に僅かの生活費なりと考ふるのは當然である。即ち、賃銀とは丁度僅かの生活費に足るものであると言ふの謂である。佛國の農奴及び労働者は彼等が正當に働き得るに要する生活費を受けざる事屢々なりと語るケエネー(Quenay)の辭句を讀みて後吾々は、チルゴー(Turgot)が聲明する、競争は労働者の所得を制限して僅かの生活費に足らしむと聞くとも驚かぬ。

如何なる種類の労働に於ても労働者の報酬は、生活必需品を獲得するに必要な程度に制限されなくてはならぬ、且つ事實上然り。(1)

英國に於て實際の賃銀は、其の有り得可き最低賃銀と相違して佛國に於けるより明かに多いものであつた、然し當時行はれたる議論は寧ろ其の事實を

(1) Réflexions, §vi In Œuvres, ed. Da. ire, v.o.i p.10.

不利にした。重商主義者は貨銀の問題を論ずるに労働者の見地よりせず輸出商人の見地よりなした。彼等の思慮したる如く、若し一國の大なる目的は外國に商品を販賣して莫大の金額を得るにありとせば、一見其の國の利益は生産の或る特種部門に於て貨幣貨銀は畢竟低くあらねばならぬは明白である。特種部門に於て高き貨銀は自然的に其の部門の所産の高價と同一なりと思はる。又若し商品價格騰貴すれば、輸出さるゝ量は減少するに至る可く、斯くて得らる可き合計貨幣は減少するであらう。勿論是は、生産の特種部門に於ける高き貨銀は必然的に其の所産の高價を意味するとなす誤謬である。高き貨銀は日割りの高き所得を表はせども、必ずしも生産せられたる商品の各ポンド或は各ヤードに對して高き所得を表はさぬ。同一の事を換言すれば、高き貨銀は人割り所産の高並に生産せられたる各單位の價値に定まる。随つて英國に於いて商業の特種部門に於ける貨銀が他國の同種商業に於けるより高き事實ありとも、其の生産商品の輸出を防げて居らざるは斷へず發見さるゝ事である。然れども、十八世紀前半に於ける重商主義者は、十九世紀

の終り十年間に於て其の繼承者の屢々閑却したる事を瞭解して居たとはい到底考へられぬ。而して重商主義者が厄なりと考慮したる高き貨銀は高き貨幣貨銀と同様の高き正味貨銀ではなかつた。若し労働者が多量の貨幣を受けずして、例ひ多量のパン、牛肉及び酒を收得したりとしても、彼等主義者の多數は何等の抗議をなさざりしに相違ない。彼等は自ら正味貨銀には殆んど注意を拂ふ事はなかつた、それ故に彼等が貨銀(正味)は固定であり、且つ是が費消により得らるゝ商品の價格如何に變動するとも不變のまゝに留ると考ふる習慣に捕はれて居た。随つて必需品の價格が課税に因り騰貴するとせば、(貨幣貨銀は上騰するであらう、されば労働者は従前の如く同一正味貨銀を所得して行くと言ふ事は公理となつた。何故に労働者は同一正味貨銀を受けざる可からざるかの疑問に對して直ちに與へらるゝ答は、勿論、彼は生活せざる可からざる可からずと言ふ。生活の必需品に對する課税は、人は生活せざる可からざるに因り(貨幣)貨銀を上騰せしむると議論する者あれば、彼は更に深く考ふる事なく、其の轉換、必需品に對する課税免除さるれば貨幣貨銀を低落せしむる

であらう、と言ふ事をも眞なりと認むる筈である。斯く闡明する者は、若し其の者が賃銀の一般理論を聞かれたりとせば、自然的に彼の答ふる所は、(貨幣)賃銀は生活の費用に定まると、勿論是には正味賃銀とは常に僅かな生活費に丁度該當するものとの意味をも含むのである。

アダム・スミスは生産説に對し或種の豫測を以て其の賃銀の章を初めて居る。彼は言ふ「労働の所産は労働の自然的報酬或は賃銀を形造る。」土地の使用及び資本の蓄積以前の事物の基本的状態に在つては、労働の全所産は労働者に屬す。』又若し此の事物の状態が繼續して居たりとせば、労働が一層生産的に成るに従ひ賃銀は昂騰して居た筈である。然し例ひアダム・スミスは想到したりとは思はれざるも、終に労働者にとりては不幸にも其の事物の状態は終局に達したりと考へらるゝ。「労働の生産實力に最も著しき改善のなされざる長さ以前」土地は使用され且つ資本は蓄積されたのである。

一般的事情の關する限り、アダム・スミスは事物の實際状態に對しては既存の生活費説を以て足れりとなした。賃銀は主人及び雇人間の契約に依り定

めらる、然し「凡て一般の場合に於て」主人は「議論するに勝り、又雇人をして其の條件に服従せしむるのである。」主人が斯くなし得るの故は、其の人数に於て少く、又雇人の如く法律に依り束縛を受くる事なく容易に團結をなし得る、且つ「究局労働者が主人にとり必要なるは主人の労働者に對するが如くなれども、其の必要は左程急速でないからである。』

地主、農夫、雇主、製造業者或は商人等は例ひ一人の労働者を傭はずとも、一般に彼等が既得の資本に依り一年或は二年は生活し得る。仕事なくして多數労働者は一週生活を續くる事は出来ぬ、一ヶ月支へ得るは稀れにして、一ヶ年生活し得るものは殆んどない。(1)

然れども主人は或る點以下に賃銀を低落せしむる事は出来ぬ。

人は常に彼の仕事に依り生活せねばならぬ、又彼の賃銀は少くとも彼を支ふるに足るを要する。多くの場合賃銀は少し多いものである。然らざれば、労働者は其の家族を養ふを得ず、又斯くの如き労働者民族は一代を限り永續し得ない。(2)

此の生産費説に對する叙述は決つして糾弾を許さぬ。若し主人の團體が

(1) Bk. I, chap. viii. p. 30.

(2) Ibid., p. 31a.

當然賃銀を壓迫するの權力を有するとせば、何故に労働者に對して其の家族を養ふに足るものを與へねばならぬか。疑もなく若し然らざれば、『斯くの如き労働者の民族は一代を限り永續し得ない。』然し何故に現代の主人は將來を顧慮せねばならぬか。商賣競技は一般に格言を認む、『吾々の後は大洪水』と。特定の時に主人の團體を造る個人等は自分自らの個人的興味に添はんと望む、されば次の時代の爲に労働者の子孫に備へんとする美しき共同的個人興味を、彼等主人に負はしむに何等の理由はないのである。アダム・スミス自身も彼の學説は此の點に於て寧ろ弱いと感じたる事は、人口の持續のため家族を維持するに足る賃銀は『普通人情と一致する』最低賃銀なりとの不安定の事實に對して、彼が與へたる卓見より吾々は推定し得る所である。

實際上賃銀は屢々此の率以上なりと觀察したるアダム・スミスは、彼の生活費説をば、『一般の場合或は靜止的狀態に於てと制限を加へた。』向上的及び衰退的狀態に對して彼は需要供給説を主張した。『或る事情』と特に複數を用ひたりと雖も、是は即ち唯一國の『収入及び資本増加』時々是が労働者に利益を齎

し、尙一家の生活費率より著しく高く賃銀を上騰せしむる』との事を謂ふのである。

地主、年金受領者或は富者は其の収入が家族を支ふるに要すると考ふるより著しく大なる時は、其の剰餘の全部或は一部を以て一人或は數人の貧しき召使を備ひ入る。此の剰餘の増加に従ひ彼は自然に是等召使の數を増すであらう。

獨立労働者、即ち織物工或は靴職工の如きは、彼自身の仕事の材料買入れ又はを販賣し得るに到るまで自らを支ふるより以上資本を得る時は、彼は自然に其の剰餘を以て一人或は數人の職工を備ひ入れ其の仕事に依り利潤を得んとする。其の剰餘の増加するに従ひ彼は職工の數を増すであらう。(1)

故に、『賃銀の支拂ひに用ひらる可き基金』たる収入及び資本の増加する場合、及び是に相當す可きものゝ増加する場合、賃銀により衣食する者に對する需要も亦増加する。其所で、『労働者は其の賃銀を上騰せしめんがためにする團結の機會を持たぬ。』

手の不足する事は相互に労働者を迎へんとする主人の間に競争を生ずる、又斯くして賃銀の低落に努むる主人等の自然的團結は自發的に破らる。(2)

(1) Bk. I. ch. viii, p. 31b.

(2) Ibid., p. 31b.

アダム・スミスが著しく長く周到に説明せんとする所は、高き賃銀の原因となる一國の收入及び資本の實際的偉大さに非ずして、其の急激の増加に就てである。例ひ其が偉大なりとも、若し是が著しき期間内同一のまゝに持續するとせば、勞働者の人員は増加するに至る可く、隨つて手に不足を來すことはなき筈である。

是に反して此の場合に於て手は自然に其の仕事以上に増加せんとする。仕事は常に缺乏を生ずる事となる。そして勞働者は仕事を得んがために餘儀なく相互に對抗し合ふ。若し斯くの如き國に於て勞働賃銀が勞働者を支へ且つ其の家族維持に足るより以上なりとせば、勞働者の競争及び主人の利益とは直ちに普通人情と一致する最低率まで賃銀を低落せしむるに至る。(1)

『勞働の維持に用ひらる可き基金が急激に低下しつゝある國に於ては』勞働者の競争は暫く賃銀を此の水準以下に低落せしむるに至り、終には人口が『國內に残されたる收入及び資本に依り容易に維持さるゝに至るまで』減少を來す。

(1) Ibid., p. 32b.

此のアダム・スミスの學説は、其の形式に於ては彼の生活費説を補ふとは謂へ、實際には是を破つて居る。團結に依り賃銀を生活費水準に至るまで壓迫する主人の權力及び賃銀を水準以下に壓迫して尙且つ金の卵を生む鷲鳥を殺さぬに努むる主人の『普通人情』とは共に此所では消滅する。一切のものが勞働に對する需要供給に依り決せらる、且つ生活費とは靜止的狀態に於て供給の條件が需要に一致するものに過ぎぬとして表はるゝのである。アダム・スミスは其の著の終りに近く到り會つて彼が唱へたる生活費説を忘却したる如く是に對して殆んど關する所がない。第五篇第二章に於て『勞働賃銀に對する課税』を扱つて彼は言ふ、

下層階級勞働者の賃銀は、余が會つて第一篇に於て示さんと努めたる如く、何處に於ても必然的に二つの異なる事情に依り影響を受くる。勞働需要及び食量の普通或は平均價格即ち是である。勞働需要は、是が増加的靜止的減少的なるか、或は是が増加的靜止的減少の人口を要するかに従ひ、勞働者の生活費を支配し且つ生活費が如何なる程度に寛大的中庸的果た缺乏的なるやを決定する。食糧の普通或は平均價格は勞働

者に支拂はる可き貨幣數量を決定し、彼等をして年々に寛大的中庸的果た欠乏的生活費を得せしむる。(1)

其れ故に賃銀にかゝる税金は貨幣賃銀を昂騰せしむと彼は主張する、夫は労働者が生存せねばならぬには因らずして、彼等が労働需要を充たすに要する正味賃銀を所得せねばならぬ事に基くとす。

賃銀決定の原因に關する議論が十八世紀末葉並に十九世紀初頭に行はれたる道程を瞭解せんために、賃銀所得階級の狀態に關する當時の實際問題は貧民救済法の影響なりしを心に留むの要がある。賃銀を決定するは何ぞやとの「純理的」或は一般的問題に關聯して常に現はれたる實際問題は、何故に貧民救済法は労働者を救済せざりしやである。

「人口の原則に關する論文」中にマルサスは、貧民給與金の費用例ひ是が全く富者より徴收さるゝとしてもは順當に貧民を救済し得なかつた事を示さんと多少質撲の試みをなした。極めて眞實に彼は言ふた、貧民の狀態は主として生産さるゝ衣食量に定まると、且つ

(1) The Wealth of Nations, M'Culloch's ed., p. 390 b

衣食が人々の數に比例して缺乏を來すときは社會の最下層人が十八片或は五志を所有すると否とは取るに足らぬ問題である。(1)

然しマルサスは、社會の最下層人が、より多くの金を所有したるに基く食料價格の騰貴は「或程度」に全所産の増加を來す事になるだらうと云ふ事を餘儀なく承認した。然し労働者の所得するより、多き金高たる「假想的富」は人口に對し「一種の刺戟」を與るに至り、此の刺戟に依る「所産増加は其の比例以上に増加する人々の人員中に分かたるゝ結果を生ず」と彼は確言する。彼は大體に於て所産増加を全然無視したるか或は何等考慮に價せずと見做すまで輕視したのである。「既に長く住居されたる國に於て食物は例ひ増加するとすも遅々且つ規則的にして、何等緊急の需要に應ずるを得ず」其れ故に、

英國の貧民救済法は二途に於て貧民の一般狀態を壓迫する趣きを有する。第一の明白なる傾向は支ふるに要す可き食物を増加せしめて人口を増殖せしむるに在る……第二は、一般に最も價值ある部分として認められざる社會の一部分たる養育院に於て費消さるゝ食糧量は、若し然らざれば、尙勤勉且つ價值ある人々に屬す可き分前を減

(1) Essay on Principle of Population, 1st ed. pp. 76, 77.

一七九八年の彼が提言「緩和するもの」の言ふ所は、報酬は新しき土地の耕作に與へらる可き事及び獎勵は製造業よりも農業へ、且つ牧養よりも耕作になさる可き事であつた。一八〇〇年までに彼は労働者をして其の食料に高き價格を支拂はしむるは其れ自體農業に對する獎勵なりとの事を發見して居た。彼が其の年に著したる「食糧の現高價に對する原因の調査」に於て、穀物の高價は主として貧民救濟法當局者が貧民労働者に普通量のパンを購ふに要する金を與へんとする努力に基くと闡明し、且つ高價の結果の一として「異常の輸入を獎勵し、更に農夫を促して其の個人利益追及の動機に基き、次年に於て出來得るだけ多量の收穫を納めんと努力をなさしむる」と言ふ。「論文」中の學說と矛盾して彼の語る所は、貧民救濟法は高價の原因にして、是が「經濟、輸入及び將來の生産に對し極上の獎勵」となると、尙更に次の如く言ひ進めた、

余が會て他の場所に於て指示したる如く、貧民救濟法の構成に對して一般的に余は實に心から痛嘆に堪へぬ。然し余は其の實施が現時の貧乏にあり、國家にとりては有

(1) 1st ed. p. 82; 8th ed. p. 303.

利なりしと考へに傾いて居る。(2)

而も彼は「論文」の最新版に於てすら貧民救濟法は食物量を増加せしめずとの議論を固持し、尙且つ「カード」が其の個人的談話及び通信に於て、其の誤謬なるを指摘し居たるに拘はらず主張を曲げなかつた。

然れども彼は、貧民の収入増加は生産さるゝ食物量を増加せしめざるに因り彼等にとりては利益ならずと論じたる第一版中の今一つの章を改訂した。第十六章に於て、アダム・スミスが一國に於ける収入或は資本増加する毎に「労働維持に要する基金」は増加するとなしたるは誤りなりと、彼は主張した。収入或は資本増加は、

若し其の社會の資本或は収入増加の全部或は少くとも大部分が食糧の割合量に轉換さるゝに非ざれば労働者の追加人員の維持として眞に且つ有効なる基金ではないであらう。且つ其の増加が唯労働の所産にのみ成り、土地の所産に成らざる場合は斯かる轉換はあり得ないであらう。(2)

土地の所産に非ずして單に労働の所産に成る増加即ち製造所産或は製造

(1) Investigation of the Cause of the present High Prices of Provisions, p.19.
(2) Essay, 1st ed. p.300; 2d ed. p. 421.

資本の増加は、労働需要を増大せしむる原因となると彼は承認し、且つ

此の需要は勿論労働の価格を昂騰せしむ、然し若し其の國に於て食糧の年貯蔵が増加せざるとせば、此の價格上騰は直ちに單に名義上のものと變るに至る、夫は食糧價格が必然的に是と共に上騰するに因る。(1)

然し食糧の上騰的價格は食糧の更に大なる生産を誘導するに至る可きや。

余の推定したるが如き場合は多分起らぬと謂はるゝかも知れぬ、是は食糧の價格上騰は直ちに追加資本を農業の水路に注入する事になるからである。然し此の事は極めて除々に現はるゝ出來事である、其の故は労働價格の騰貴が食糧の騰貴に先き立ちて起り従つて是が農業上良好の影響を防げ若し然らざれば現はる可き土地所産の價格上騰を起さしめぬとの事が謂はるゝ筈である。(2)

マルサスは尙、製造資本増加の影響に就て不利の證言をなす事は望しきものなりと思惟したりと雖も、第五版中には上述の辭句は現れぬ。

マルサスの高弟共は、食物供給を是に對する需要と或る程度に獨立したる固定のものと思ふしたる、其の師の奇異な習慣に、決つて捕はるゝ所はなか

(1) 1st ed. pp. 307, 308; 2d ed. p. 421.

(2) 1st ed. p. 310; 2d ed, slightly altered, p.425.

つた。彼等は、師の著書に於て見るが如き、労働者の状態は、其の増殖に關する習僻及び其の維持に備へられたる基金の大サとに定まるとの一般的學說に賛同した。ブキャナン(Buchanan)は、「一國の富が靜止的になる場合」労働者の競争及び主人の利益」とが賃銀を生活費水準に下落せしむるとのアダム・スミスの叙述に對する註解中に附言する。

労働賃銀は富及び人口とが靜止的なる所で必ずしも最低率にある事はない。是等事情の下に、労働者の状態は一部分彼自身の習慣に定まる。若し彼が貧窮中に其の一族を増殖するに満足するとせば、貧窮は彼の運命となる。然し若し彼が斯かる困難の状態にありて結婚せざるとせば、労働者の一族は減少するであらう、而して賃銀は上騰して終に労働者は結婚に因り労働を市場に供給するに至る。(1)

是が實際に、増殖上労働者の意思を賃銀の調節物と見做す所以である。而もブキャナンは此の事實を認識したのである。マルサスの學說の大略を述べたる中に彼(ブキャナン)は言ふ、

支那に於ける如く、労働者が凡ての安慰を犠牲にするも其の一族を増殖するを以て

(1) Ed. of the Wealth of Nations, vol. I. p. 116.

満足する所では貧窮と悲慘とが労働者階級の一般状態となるに至るまで人口は増加するであらう。然し労働者の習慣の向上せる異れる特質を有する社會に於て労働者は斯かる困難の状態にありて結婚せず且つ労働供給に堪へぬであらう。是等事情の下に、貸銀率が労働者を安慰の中に支ふるに足るより以下に低落する間、人口は決して増加するを得ない。斯くの如く労働者は彼自身の賃銀を定むると言はるゝかも知れぬ、其の故は食物供給が靜止的なる場合就れの點に於て人の供給を停止せしむるかは労働者自身に定まるに因る。(1)

此所でブキャナンは問題を「労働供給」の側より論じ且つ「労働需要」は與へられたる數量として扱つて居る。更に問題を需要の側より觀察し且つ供給を與へられたる數量として扱つて、彼(ブキャナン)は言ふ、

労働価格は、賣買せらるゝ一切の商品價格の如く、需要と共に上り或は下る。大小の需要は高低の賃銀に因り斷へず影響を受くる。然し需要自體は或る一般的原因又特に國民的資本の状態に因り支配を受くる。仕事及び労働の維持には莫大の基金を要する故に、需要は基金の増加減少に隨ひ、是に比例して變動するに至る。(2)

又更に、

(1) Ibid., vol. iv. (Observations), p.47.
(2) Ibid., p.42.

仕事の一般的缺乏は産業維持に要する基金増加に依りてのみ救済さるゝ事を得。此の結果を齎さざる如何なる方法も、労働者の状態を改善する事は殆んどないであらう。(1)

マアセツト夫人(Mrs. Marcet)の「經濟學に關する問答」(一八一六年)中に、賃銀基金説として知られたる、賃銀は労働階級人口と國の資本の全部或は非運なる其の一部分との相對的大サに定まると主張する學説に對して、更に探究がなされて居る。

キャロリン——賃銀率を決定するものは何んぞや。

ビー夫人——是は資本が國の人口中労働者の部分を維持するの割合に定まる。

キャロリン——或は換言すれば、生活費が是に依り維持さる可き人員に對するの割合なりとの事なるや。

ビー夫人——然り。(2)

リカードの著「穀物低價の資本利潤に及ぼす影響に關する論文」中に、彼(リカード)が後に到つて其の原論中に闡明したる賃銀學説の初期の形式を載せて

(1) Ibid., p.63.
(2) Conversations on Political Economy, pp. 117, 118; see also p. 130.

居る。労働の正味賃銀の下落即ち労働者の所得する必需品、便宜及び安慰の
高の減少は利潤を昂騰せしむるに至ると教へ、且つ斯かる正味賃銀下落より
起る利潤の昂騰は、

賃銀の下落を招く價格が労働者の實際生活に必要とする労働報酬に多少接近するに
従ひ多少永續的となるであらう。

賃銀の上騰下落は靜止的、向上的並に衰退的なる凡ての社會状態に共通の事である。
靜止的状态にありては、是は全く人口の増加減少に因り支配さる、向上的状態にあり
ては、是は資本或は人口が尙一層急激なる行程に進むや否やに定まる。衰退的状态に
ありては、人口或は資本が更に一層急激に減少するや否やに定まる。(1)

更に彼(リカード)は續いて言ふ「經驗の實證する所、資本及び人口とは交互に
先導する故に、賃銀の關する範圍内に於ては、利潤に關して何事も積極的に立
論し得ぬ」と。随つて彼(リカード)は其の著論文の目的のために「資本と人口と
は適當の割合に進む故に、労働の正味賃銀は劃一的に同一のまゝに止る」と假
定するの便宜なるを認めたる。要するに、是は明かに需要供給説或は人口資本

(1) Works, p. 379.

學説である、然れども是が古い生活費説に據つて居る事は次の提言中に見出
さる、即ち賃銀が人口に遅れて増加する資本の影響を受けて低落する時、其の
低落は「賃銀の下落を招く價格が労働者の實際生活に必要とする労働報酬に
多少接近するに従ひ多少永續的となるであらう」。生活費説に對する信仰は
尙明かに次の提言中に伺はる、「農業又は製造業の孰れかに於ての凡ての改良
と關係なき價格に及ぼす富の増加の唯一の影響は、原料所産の價格及び労働
價格を上騰せしめて他の一切の商品の固有價格は變動せしめず、且つ一般利
潤を低落せしめ、其の結果は賃銀の一般的上騰を來す。」進歩の影響が労働價
格或は貨幣賃銀を上騰せしむるに至る事に就き、リカードは何等説明に努む
る所はなかつた、然し原料所産の價格を騰貴せしむるものは、労働價格も亦騰
貴せしむるに至る事は何人も知るとして承認したのである。

其所で吾々は「論文」の學説とは、正味賃銀は人口と資本との比較的増加に定
り、且つ或は然し孰れの接續詞を用ゆ可きか明瞭でなき故に、正味賃銀は、最大
の労働にて造らるゝ部分を得る困難の變化に基く、原料所産價格の變動に依

りては影響されずとの謂なりと言ふ事も出来る。

一八一五年及び一八一七年間リカードの賃銀に對する見解は變らざりしと雖も、其の「原論」の章賃銀に就てに於て彼の見解を述べたる形式は暫くしてタレンス(Torrens)の「穀物貿易に關する論文」を讀みたるに因り非常な影響を受けて居たのは明白である。タレンスは「自然價格の構成部分」が取る可き變動を叙述して言ふ、

第一に賃銀の一般及び普通率は何處にも理はるゝ、是は國の事情及び習慣とに定まり且つ是を永久的に變更するは至難な事である……英國に於ての一般生活事情及び習慣とは、勞働階級の婦人達が其の足を包み且つ動物の餌と同じき小麦パンを食するに至らんまで長く仕向けて來たのである。其處で賃銀率下落して英國中其の地の婦人達が足を包み且つバターを除きたるミルクの少量と共に馬鈴薯を食するに至る餘程以前凡ての勞働階級の者共は教會の救助に頼るであらう。斯かる困難の影響に依り同一帝國内の東西地方に於て、勞働の眞實報酬が同一に成るまで賃銀率の上に變化を齎すに至る。(1)

勞働を評價する適宜の見方は市場に於ける商品として見る事である。随つて勞働

(1) Works, pp. 57, 58.

は他の凡てのものと等しく市場價格及び自然價格とを備ふ。勞働の市場價格は孰れの時、場所に於ても需要供給の間に現はる可き割合に定まる。其の自然價格は他の法則の支配を受け、且つ生活の必需品並に安慰の數量に成る。其の數量は、其の國の氣候慣習上の特質に因り勞働者を維持し、且つ其の家族を支へて市場に於ける勞働の非減少的供給を保たしむるに必要とするものに基く。(2)

「勞働の非減少的供給」と言ふ句に就ては著しく漠然たるものがある。若し一國の人口が去年靜止的なりとし且つ人口或は勞働者の人員が今年も去年と同一なりとせば、勞働供給は今年非減少的のまゝに存續するであらう。然し去年及び過ぎたる年に於て人口或は勞働者の人員が二パーセント増加したりと假定して、若し人口が全く増加を中止したりとせば、其處で勞働供給は「非減少的」に存續す可きや。若しくは是は年二パーセントの割合に於て増加を繼續す可き筈なりや。タレンスは此の問題を没却して續けて言ふ、

勞働者が常に其の仕事に對して氣候の考慮に立ち自らを支へ、且つ需要に應じて健康状態の勞働供給を繼續するためには、其の家族を支ふるに必要とするものゝ充分の

(1) Ibid., p. 62.

數量を所得せねばならぬと言ふ事は自明の理である。

自明とは謂へ瞭解に苦しむ所である。例ひ吾々は其の必要なりとは解せずと雖も、労働者は生存せねばならぬ」と承認せりと假定するも、されば何故に労働者は需要に應じて労働供給を繼續するため、其の家族を支へ得ねばならぬか。且つ供給を需要と均衡せしむるは何ぞや。タレンスが眞に言はんと努めたる所は惟ふに、若し労働者が其の常習したる賃銀を所得せざるとせば、彼は労働供給を制限して彼の常習したる水準に賃銀を上騰せしむる方法を講ずるならんとの事である。其の故は、彼は續いて言ふ、

且つ健康生活に基本的必要ならざるものは使用より遠かり、又人々は其の慣れたる生活様式に於て其の家族を維持し得るを豫想するに非ざれば結婚を思ひ止まるであらうと言ふ事を吾々が考ふる時は、労働者は其の仕事に對して氣候上要求するものゝみならず、第二特性として作用する國の習慣の要求するものをも所得せねばならぬは明かである。(1)

此の労働の自然価格は異りたる氣候及び異りたる生活上の習慣と共に變

(1) Works, p. 63.

動すると、タレンスが説明する氣候の相違に基く相違の部分は不變的である、且つ例へ「愛耳蘭に資本が除々に注入され同時に結婚に對する道德的抑制の教導が人々の間に普及され、労働の自然価格は英國に於けると同等の價格まで上騰す可き事は明かなりとは雖も」

生活上の習慣及び結婚に關して存立する道德的抑制とに基く部分は、繁盛或は衰微の事情並に徐々に作用する教導文化の道德的原因のみに因り左右さるゝのである。其れ故に、労働の自然価格は、是が異なる氣候並に異なる國家的進歩の階梯と共に變動するとは謂へ、孰れの時場所に於ても靜止的なりと見做さる可きである。斯く労働の自然価格は不變的なるに反して、既に觀察したる如く、其の市場価格は需要供給間の割合に隨つて始終變動する。労働が市場に表はす価格は氣候並に生活上の習慣に基く労働者及び其の家族の維持に必要とするものよりは、屢々著しく大となり、且つ屢々著しく小になる事あり。然し斯かる不時の變動あるに拘はらず、労働の自然価格及び市場價格とは相互に感化を及ぼし長く遠かる事は出来ぬ。市場價格が自然價格以下に低落する時は、労働者は最早や氣候及び習慣に基き彼並に家族を維持するに要する必要品の數量を所得せられず、死亡は増加する。家族維持の困難が増し結婚上道德的抑制の盛んなる時は生産は減少する。且つ斯く重複作用に因り労働の自然価格及び市場

價格間の水準はもとに復す。是に反して、若し孰れの時に於ても市場價格の自然價格以上に上騰するに至る事ありとせば、労働者並に家族に依り享樂さるゝ安逸の増加に因り死亡は減少するに至る可く、且つ結婚は獎勵を受くるに因り出産は増加する。而して終には重複作用に基き労働供給は増大し且つ市場價格は是が決つして永久的に離れ去るを得ざる自然的水準に再び戻り來る。(1)

リカードは、其の「原論」第二版の註解中に言ふ如く、「此の問題全部はタレンス少佐に依り最も巧妙に説明されて居る」との意見を持つて居た。賃銀の章中の最初の辭句に於て彼(リカード)は極めて密接にタレンスに従つて居る、然し外見上無意識に一の重大なる改訂を加へた。

労働は賣買せられ且つ其の數量に増減を來さる可き他の凡てのものゝ如く其の自然價格並に市場價格とを備ふ。労働の自然價格とは労働者をして相互に生存せしめ且つ増加減少なく其の種族を永存せしむるに必要とする價格を謂ふ。

自身及び労働者の人員を保存するに必要たる可き家族とを維持する労働者の力は、賃銀として所得する貨幣數量に據らずして貨幣の購買する習慣上必須なる食物、必要品及び便宜の量に定まる。其れ故に労働の自然價格は労働者並に家族を維持するに

(1) Works, pp. 64-66.

要する食物、必要品及び便宜の價格に定まる。食物及び必要品の價格騰貴すると共に労働の自然價格は上騰するであらう。前者の價格下落と共に労働の自然價格は低落するに至る。(1)

タレンスに随へば、賃銀の自然率は「其の國の氣候及び習慣の特質に依り、労働者を支へ、又、彼をして、市場に於ける労働の非減少的供給を保留するがために、其の家族を維持せしむに要する生活の必要品及び安慰の分量に成る」と。リカードに随へば、賃銀の自然率は「習慣に依り彼に必須にして、尙労働者をして、相互に、生活せしめ、且つ、増加或は減少なく、彼等の種族を永存せしむるに要する必要品及び便宜の分量である」と。「増加或は減少なく、彼等の種族を永存せしむる」とは、「市場に於ける労働の非減少的供給を保留する」より更に解り易き章句である。タレンスの意味が明かになるや直ちに、其の自然賃銀とは、労働者が常習的に受くる賃銀にして、普通或は平均賃銀に過ぎぬと云ふ事が明白となる。然し、リカードの自然賃銀とは、例ひ彼等は習慣上労働者に必須なものなりとは雖も、是は更に何物か以上のものを指す。是は、丁度、又單に丁度

(1) 1st ed. pp. 90, 91; 3rd ed. in Works, p. 50.

労働者の人口を現状維持に支ふ可き賃銀の謂である。随つてタレンスに従へば、労働の自然価格と市場価格とは「長く分離さるゝを得ぬ」と言ふに反して、リカードに従へば、是等は、一國の人口の増殖しつゝある間の全長期々間中は、分離されねばならぬと言ふ。彼(リカード)は言ふ、「労働の市場価格が如何に其の自然価格より遠ざかるとも、是は、他の商品の如く、後者に一致す可き傾向を有する」と。市場価格が、自然価格より尙大なる時は、「労働者の状態は繁榮になり幸福となる。」又、彼は、「健康なる人数多き家族を維持する」を得、斯くて「労働者の人員は増加する。」又、賃銀は再び其の自然価格にまで下落し、又實際には、其の反動として、時々其れ以下に下落する。」市場賃銀が自然賃銀以下となる時は、労働者の状態は「最も悲惨な」ものである。窮乏は、習慣が絶體的必需品として與へる是等安慰をば、労働者より奪ふ。且つ「労働者が賃銀の自然価格の與ふ可き通常の安慰を得るに至るは、唯彼の缺乏が其の人員を減少せしめ、或は労働の需要が増したる後である。」然し

賃銀の傾向は、其の自然率に一致するに拘はらず、向上しつゝある社會に於ては、其の

市場率は、或る不定の期間、始終自然率以上にある事あり、其の故は、資本の増加が労働に對する新なる需要に與ふる刺戟が答へらるゝや直ちに、又他の資本の増加が、同様の結果を招く事となる。又斯の如く、若し資本の増加が徐々に且つ不變なりとせば、労働に對する需要は絶へず刺戟を起して、人の増加をなさしむるに至る。⁽¹⁾

斯くの如く、リカードの自然賃銀とは、タレンスが想像したる、労働者が固執的に頼らんとする習慣的賃銀の謂に非ずして、労働者をして、丁度其の人口を既存的水準に於て、或は是を出でざる程度に保留せしむ可き賃銀の謂である。市場賃銀が、是以上に或は以下に始終變動しつゝある平均率なる代り、彼等は最低限度である、是以下にて市場賃銀は、如何なる期間内も永續するを得ぬ。然し市場賃銀は、不定の期間内是を越ゆ可きである。リカードの賃銀說の中に、常に現れたる陰鬱なる特性は、主として例ひ市場賃銀が、此の最低限度以上に長く續くとすると、彼等は、是に一致す可き傾向を有すると、彼が教へたる事實に、主として其の源泉を辿らるゝのである。其の傾向は、下落の傾向である。彼は常に經濟的進歩を目して、或る量の勢力を以て出發したるものにし

(1) Political Economy, 1st ed. p.93; 3d ed. in Works, p.51.

て、又随つて、除々に其の速歩は遅くなり、終には全く杜絶するものとなした。彼は思惟するに、資本の蓄積は、利潤の率に定まる、利潤の率は最低の生産的農業労働の生産力に據る、而して是が、人口の増殖と共に低落すると。其れ故に

社會の自然的發展に於て、労働の賃銀は、是が必要供給に依り支配さるゝ間は、下落する傾向を有するであらう。其の故は、労働者の供給は、同一率に於て増加を續くるに、労働者に對する需要は、より遅き率に於て増加するに因る。例へば、若し賃銀が一年に二パーセントの率に於て増加する資本に依り支配を受くるとせば、資本が唯一パーセントの率に於て蓄積する時、賃銀は下落するに至る。更に、資本が唯一パーセント或は $\frac{1}{2}$ パーセントの率に於て増加する時、賃銀は尙低く下落するに至り、又、資本が靜止的に至るまで低落を續く、其の時は賃銀も亦止靜的となる。而して、是は單に實際上の人口の人員を維持するに足るのみである。(1)

然れども、理論として、其の理論の主張する所は、兎角、自然率は必然的に甚だ低きものなりと考へる、一般的信仰は、何等の根據のなき事である。理論は、自然率とは、労働者及び一小家族とに對する僅かな生活料でなくてはならぬとの叙述を含まぬ。其の故は、理論は却つて反對を言ふ、即ち、現在一週一〇〇磅

(1) 1st ed. pp. 103, 103; 3d ed. in Works, p. 54.

に價する商品は、「習慣上必須」となり、又労働者の人員を維持するに必要なものともなる。其の故を、リカードは説明する。

例ひ食物及び必需品により測られたる賃銀の自然價格にせよ、絶對的に固定し且つ不變なるものなりと考へられず。是は、同一國家に於て、異なる時期に因りて異り、又異なる國々に於ては、物質的に極めて相違する。是は、基本的に、其の人々の習慣及び因襲とに定まる。英國の一労働者は、若し其の賃銀が彼をして馬鈴薯以外の食物を買はしめず、又汚ない船室以上の住家に住はしめぬとせば、其の賃銀は、其の自然率以下なりと考へ、且つ家族を養ふには餘り少にすぎると考ふるに至る。然るに、是等自然の通常要求は「人の生活が安價にして」且つ其の欲望が容易に満足を得る國々に於ては、屢々充分なりと考へらるゝ。英國の一敗宅にて現在受けらるゝ便宜の多數のものは、吾々歴史の初期に於ては奢侈なりと考へられたであらう。(1)

若し、人々の習慣及び因襲に變動が起り、従つて彼等が、人口を維持するため一週一磅の代り、一週一〇〇磅を必要とせば、此の變動は、社會の自然的向上の下に、下落せんとする賃銀の傾向に逆ふ事となる。人口は増加せざる可く、而して其の結果、連續して到る「改善」上の利益は、總て其の労働者により享受さ

(1) 1st ed. p. 96; 3d ed. in Works, p. 52.

るゝに至る。實際上、人口増加の止みたる場合、支拂ふ可き賃銀は自然賃銀にして、是に市場賃銀が一致する傾向を有するとなす理論中に全く陰鬱性はないのである。孰れの國の人口も、やがては増加を止まらねばならぬ、而して、最も急激に増加しつゝある人口に對して現在支拂はるゝ賃銀は、其の結果、人口増加の止みたる場合に支拂はる可きものと一致する傾向を有するに至る。重大なる問題は、人口を丁度靜止的に維持す可き率を決定するは何ぞや、である。極めて明かなる如くリカードは、其の率は著しく低きものなりと想像した、然し、彼は、何が是を決定するやの問題に對しては、何等深い考察をなさざりしが如く思はるゝ。是が「習慣と因襲」とに定まるとなすは、智識に對する何等の貢獻とならぬ。

「市場賃銀及び自然賃銀」とを定義し且つ説明するに努めたる後、リカードは兩者の相違を認むるの要を感じぬ。彼は、「賃銀或は労働の價格」と謂ふ不適當の言葉を以て彼が一切の目的のために充分なりと思惟した。

正味賃銀に關して彼の教へたる殘餘の部分は、積極的よりも寧ろ消極的の色

彩を帯びて居る、其の教ゆる所は、労働者の食物價格が生産上の困難増加或は租税の孰れかの結果に依り騰る場合、及び賃銀が直接に課税を受けたる場合も亦、貨幣賃銀は充分に昂る故に、労働者の正味賃銀が影響を受く事なしと示さんとする熱烈なる努力に成る。

賃銀の章に於て、彼は言ふ、社會の自然的向上状態に於て、正味賃銀は下落する傾向ありと雖も、必要品の價格が騰貴する場合、貨幣賃銀は上騰するであらう、其の故は、若し是が上騰せざるとせば、「労働者は二重に影響を蒙り、而して彼等は、間もなく、生活料を全く奪はるゝ」に因る。引例に依りリカードの想像したる所は、労働者の賃銀を一年に二四磅とし、其の中半分は小麥に消費さるゝと考へ、且つ小麥の價格が、クオターに付き四磅より、四磅四志八片、四磅十志、四磅十六志及び五磅二志十片にまで騰貴する時に、二四磅の賃銀は、二四磅一四志、二五磅一〇志、二六磅八志及び二七磅八志六片まで上る、其れ故に、労働者は常に小麥三クオター及び十二磅の價に相當する他のものをも買ひ得ると謂ふ。「利潤に就て」の章の中、唯一ヶ所に於てリカードは、突然疑惑に捕へられし

事を除きては、貨幣賃銀は、斯くの如く騰る事は公理なりと推定した。

一一八

貨幣賃銀は、原料所産の價格騰貴と共に昂騰す可しとは、既定の事實として余が考ふると謂はるやも知れず、然し、勞働者は、時にはより、少き享樂物を以て満足する事ある故に、是は決つして必然的結果には非ず。勞働の賃銀は、前以て或る高き水準にありしやも量られず、又は或る低減に會ふやも量られざるとは眞實である。若し斯くの如くば、利潤の下落は阻止さる。然し、賃銀の貨幣價格が、必要品價格の徐々に騰貴すると共に下落し、又は靜止的に保たる可しと考ふるは不可能である。又隨つて、一般事情の下に必要品の價格は、永久的の騰貴をなさずして時々起り、且つ賃銀の昂騰が是に先き立つと云ふ事は、既定の事實として是認さる可きである。(1)

肉と血とに生きる反駁者が、既に自ら洞察せる事に對して、リカードのなしたる「考ふるは不可能である」と、大膽なる揚言を以て満足するや否やは、極めて疑はしき事である。「原料所産に對する租税」の章に於て、リカードは原料所産と勞働者の必要品とに對する課税は、原料所産及び必要品との價格を騰貴せしむるのみならず、又貨幣賃銀をも上騰せしむるに至るを示さんと試みた。

(1) 1st ed. p. 119; 2d ed. in Works, p. 65.

人類の増加に對する人口の原則の結果より、最低額の賃銀は、決つして、自然と習慣上勞働者の維持に要する率より遙かに高く繼續するを得ぬ。此の階級は、決して著しく多き租税を負ふ事を得ず。隨つて、若し彼等が、小麦クオターを加へ、及び他の必要品を少量加へたるに對し、八志を支拂はざるを得ぬとせば、彼等は前と同じ賃銀にて生活し、又勞働者の種族を維持する事は困難となる。賃銀は、當然に且つ必然的に昂騰するに至る。(1)

「勞働者の種族を維持する」とは、リカード自身の「増加或は減少なしに彼等の種族を永存せしむる」との確定的意義に於けるより寧ろ、タレンスの「市場に於て勞働の非減少的供給を保つ」との莫然たる意味に、恐らく考へらる可きである。然し、如何なる場合に於ても、彼リカードの意味する所は、明かに、若し必要品の價格の騰貴に相對して、貨幣賃銀上騰せずして勞働者を報酬せずとせば、小麦の高價は人口の増殖に對し、新なる阻害として働くと謂である。彼の思惟する所は「他の事物の中に、斯かる課税は抗議さるゝやも量られず、穀物價格の騰貴と賃銀の昂騰との間には、著しき期間の存在するものにして、其の間勞働者は非常な困難に遭遇するに因る」と謂ふ。抗議に對する彼の解答は、

(1) 1st ed. p. 193; 3d ed. in Works, p. 93.

異なる事情の下に、賃銀は速度の程度を異にして原料所産の價格に従ふ。或る場合には、穀物の騰貴は賃銀の上に何等の影響を齎さぬ事あり。他の場合に於ては、賃銀の昂騰は穀物の騰貴に先立つ。更に或る場合は、其の影響は遅く、又他の場合には、其の期間は極めて短少のものである。

實際に、賃銀の昂騰は、著しく「遅く」原料所産の價格に「従ひても是に」先立つ「事なきを保せられずとも謂へる。

労働の價格を支配するものは、必要品の價格なりと主張する者は常に社會の現はす進歩の特別状態を承認するものにして、必要品の價格の騰貴或は下落には、賃銀の昂騰或は下落とが極めて遅く従ふとの事を、餘り輕率に許容して居るが如く見ゆる。(1)

彼は思ふ、食糧の高價は、異なる四原因に依り起る事ありと。是等の原因の第二が此所にて吾々に關係する唯一のものにして、即ち「徐々の需要増加是は結局生産費の増加を來す事となる」。

穀物の高價は、需要増加の結果なる場合常に賃銀の増加が是に先き立つ。其の故は需要増加は、人々が其の必要とするものに對して支拂ふ資力の増加を得ずして現はれ

(1) 1st ed. pp. 202, 203; 2d ed. in Works, pp. 99.

ず。資本の蓄積は、自然的に、労働の雇主間に競争増加を招き其の結果労働の價格は騰貴する。賃銀増加は、直ちに食物の上に消費されず、最初、労働者に關する他の仕事の上に貢獻をなすに至る。然るに、彼の改善状態は彼をして結婚を強ひてなさしむる。されば彼の家族を維持するに必要な食物に對する需要は、一時的に賃銀の費されたる他の享樂物に對する需要を自然的に凌駕する。されば、穀物は騰貴する。夫は其れに對する需要増加に因ると共に社會には、是に支拂ふ可き多量の資力を持つ者のあるに因る。又農夫の利潤は更に要する資本の量が、其の生産に運用さるゝに至るまで、利潤の一般的水準以上に上騰する。斯くなりて後は、穀物が再び以前の價格に下落するや、或は永久的に更に上騰するや否やは、穀物の増加量を造り出す土地の特質に定る。若し、是が最後の耕作に用ひらるゝが如き土地と肥沃に於て同一なる土地より何等以上の勞費を要せずして得らるゝとせば、其の價格は、其の以前の程度まで下落するに至る。若し更に租悪の土地より得らるゝとせば、其の價格は、永久的に騰貴を見るに至る。第一の場合に於ける高き賃銀は、労働に對する需要増加より發生した。是が結婚を奨勵し子供を維持したる間は、労働の供給増加の結果を招いた。然し、供給が充たされたる時に、若し穀物が其の以前の價格まで下落するに至るとせば、賃銀は以前の價格まで低落するに至る。若し穀物の供給増加が、租悪の特質を有する土地より生産さるゝとせば、労働の價格は、以前の價格より更に上騰する。(2)

(1) 1st ed. pp. 205, 206; in Works, pp. 95, 96.

リカードは、貨銀の章及び利潤の章とに於ける學說を全く放棄したるが如く思はるゝ。是等の章に於ては、貨幣貨銀は「貨銀が需要供給に依り支配さるゝ限り」「自然的に向上する社會に於ては、貨銀は下落する傾向あるに拘はらず、食糧の價格の騰貴に伴ひ、上騰するに至る」と述べた。此の章句に表はるゝ概念は、食糧の價格騰貴に「從ひ或は寧ろ是と關聯する貨幣貨銀の昂騰は、唯に「資本の蓄積」に基きて現はれ、而も、食糧の價格騰貴が及ぼす所は、斯くして起りたる貨幣貨銀の昂騰を維持すると謂ふ事である。換言すれば、貨銀が需要供給に依り支配さるゝ限り貨幣貨銀の上騰を實現するには、貨銀は昂騰せざる可からず、下落す可きに非ず。然し、彼(リカード)の新學說は、古い學說よりも尙更に不備である。是は全く第一の文章に現れたる提言に歸す可きである。第一の文章とは、リカードが眞に穀物の價格騰貴を意味したる「穀物の高價が需要増加の結果なる場合、常に貨銀の昂騰が是に先き立つ、其の故は、需要は人々が欲求するものに支拂ふ可き資力の増加する事なくして、増加し得ない」との事である。經濟學者は謂ふまでもなく株式取引所の一員も、果して其の

文章の第二句に現れたる基礎なき主張を承認せりと考ふる事は至難である。即ち、非常な氷結が、水道管の需要を増すは、是に支拂ふ可き人々の資力が増加したるなりと、リカードの承認したのは疑を入れない所である。勿論、彼の直接議論に必要な事は、穀物に對す需要は、是に支拂ふ可き人の資力の増す事なくして、増加するを得ぬとの事なるは、眞である。然し是は、尙概括的なる提言に比しても稍々劣りたるものと見做さる可きである。人口の靜止的なる場合、穀物に對する需要は、人々の是に要する資力の増加なくして増加するとは思はれぬ。然し人口が増加しつゝある場合、穀物に對する需要は、人々の資力の増さずして増加す可く、又、人々の資力の減少しつゝある場合も同様である。穀物に對する需要は、養ふ可き人口の増加する場合、必然に増加するであらう、例ひ貨銀は以前に變らずとするも、又、例ひ貨銀が以前より減少するとも同様である。其れ故に、「穀物の高價が、需要増加の結果なる場合、常に貨銀の昂騰が是に先き立つ」との、リカードの提言は、彼が所謂人口の靜止的たる可き事物の状態より出發する場合にのみ眞である。次の文章に於て、彼は是を保障

したるが如く思はるゝ。彼は「賃銀の昂騰を招く資本の蓄積」に就きて述ぶる。即ち人口が増加しつゝある場合、彼(リカード)の謂ふ規則に随へば賃銀の昂騰を招くには、人口の増加に對し尙急激に資本の蓄積を必要とするのである。然し、是に對しては餘りに重要視を許さぬ。其の故は、次の唯々一つの文章に於てのみ、彼は、賃銀の昂騰が、労働者に結婚を促し且つなましむと言ふ。因つて、人口が靜止的なる場合ですら、労働者或は其の中の或る者は結婚を促され且つなし得るとなす。人口が既に増加しつゝある場合、食糧の價格騰貴と貨幣賃銀の昂騰との關係に關しては、其の章句は全く何等告ぐる所がない。

リカードは、租税及び賃銀との章を叙述したる時、ブキャナンに據り、且つブキャナンは、兎に角、賃銀が食糧の價格と共に變動すると言ふ事を全く否定し、恐らくは例外として、労働者が、必要品の僅少の給與を受くるに至るまで低減する「場合と、其の種族を維持し得ざる状態に到り最早其の賃銀に全く減額を許さぬ場合とを認めたるを發見したのである。ブキャナンは極力主張して居た「食糧の高價」は

供給拂底の或る表示にして而も、需要を妨ぐる目的のために、事物の自然的過程として起る。同一人数の消費者間に分かつたより、少なき食物供給量は、明かに各人に對し少量の部分と與ふるであらう。而して労働者は、普通欲望に添ふ分前を受けねばならぬ。此の分前を平等に分たんには、及び労働者をして以前の如く自由に生活料を消費する事を妨ぐるには、價格の騰貴が起る。然し、労働者が尙より、缺乏的商品の同一分量を使用せんとせば、賃銀は價格と共に昂騰せねばならぬが如く見ゆ。又斯くして、自然は、其の目的に對して、正反對に働くが如く考へらるゝ——即ち、初めに價格の騰貴をなして其の消費を減少せしめ、而して後に至り、賃銀の昂騰を招きて、労働者に以前の如く同一供給をなす。(1)

是に對してリカードは、拂底的供給が食糧高價に對する唯一原因ではないと答ふる。彼曰く「吾々は、ブキャナン氏の成したりと思はるゝ、豊富なる供給は高價と共に存立せないと結論する事は、決して正しいと考へられぬ」と。彼は續くるに、商品の自然價格は、生産の便宜如何に依り定まる。次に、大なる食物の總體量と其の大なる頭割り量との間の差異を明かに没却して、彼は解説するに、

(1) Observations, pp. 59, 60.

今耕作に齎さるゝ土地は、三世紀以前耕作されたる土地に對して、遙かに劣るとも、又故に、生産の困難は増すに至るとも、現在生産さるゝ量は、曾つて生産されたる量に遙かに勝ると云ふ事を何人が疑ふや。高價が増加する供給と兩立するのみならず、又高價は概して其の供給に伴ふのである。其處で若し、租税或は生産上の困難の結果、食糧の價格が騰貴し、且つ、量が減少せざれば、労働の貨幣賃銀は昂騰するに至る。其の故は、恰もブキャン氏が觀察したる如く、『労働の賃銀は貨幣より成らずして貨幣の購買する物即ち、食糧と他の必需品とに成る。而も、普通資本よりの労働者への給與は常に供給(食糧並に必需品)に比例するに至る。』⁽¹⁾

勿論、ブキャナンの場合には、生産上の困難の結果、一名割り食糧の分量は減少する事となる、而して労働の貨幣賃銀は昂騰せず、其れ故に、普通資本より支拂はるゝ労働者への給與は、依然供給に比例するとは謂へ減少を來すであらうとの謂である。リカードの此所で謂ひたる所は、皆供給と兩立するとなす。然し、此の章句の後直ちにリカードは闡明するに、貨幣賃銀は、『生産の困難』と彼が同一視せる、賃銀への課税の全金額に相對して昂騰す可しと考へたる彼が理由、或は其の理由の一は、彼が常に賞讃を以て引用するマルサスの漠然たる

(1) Political Economy, 1st ed. pp. 23, 290; 5d ed. in Works, pp. 130, 131.

言葉、人口に關する社會の欲求を充さんとする人口を招集せんには、労働者に對して、一定量の商品が與へられねばならぬとの主張に基く、——其の一定量の商品とは、『其の時に、労働の維持に供へらるゝ基金の要求する程度の人口を支ふるに丁度足るものである。』

彼(リカード)は言ふ、國の事情が、最下級労働者をして其の種族を保つのみならず、又はを殖やすを得るが如しと假定すれば、其の賃銀は、是に従つて支配さるゝに至る。若し租税が、彼等より其の賃銀の一部を控除し、且つ僅少の必需品を得るに至らしむるとせば、彼等は(必要とする程度に)繁殖し得るや。⁽¹⁾

「僅少の必需品」とは、恐らくは労働者が獨身者としての必需品を意味し、多數の家族の父として要する必需品を意味せず、若し是に反するとせば、彼等が果して實際に殖ゆるや否やの疑問はあるとするも、肉體的に或る程度に於て繁殖し得るの道理なるは、明かである。若し、課税が、労働者をして、斯く定義に依る僅少の必需品にまで窮迫せしめずして、唯其の賃銀の一部を奪ふとせば、第一版中の『彼等は繁殖するや』の疑問に對して、『然り』との答を與へてはならぬ

(1) 1st ed. p. 29; 2d ed. p. 265; 5d ed. in Works, p. 132.

と言ふ理由はなきが如く思はるゝ。「彼等は必要とする程度に繁殖し得るや」の疑問は「何にが必要とする」との疑問に依つて酬ひらるゝ。リカードは答ふるに「労働維持に要する基金の状態に随つて」なす。然し如何にして労働維持に要する基金が一定の人口を要求する」と謂はれ得やを説明する代り、彼は、賃銀に對する租税の賦課が、是等の基金の高を換ふる事なしと説明を續く。

兎角食物の價格増加の貨幣賃銀に及ぼす影響に關して、リカードの一般的提言は、完全に論理的のものである。若し、労働の正味賃銀が、直接に、労働者と眞の資本との間の比率に依り決せらるゝとせば、正味賃銀は、明かに、他の事情例へば食物の生産上の困難増加の如き事に依り、直接に影響さるゝ事はなし。貨幣賃銀は、食物の價格騰貴する場合、正味賃銀は何等の影響を受けざるが如く昂騰せざる可からずと證明せんとして彼が不成功に終りたる事實は、正味賃銀が労働者と資本との比率に定まるとなしたる事實に歸す可きである。

マルサスは、リカードが、賃銀は常に増殖に關する労働者の道德的習慣に定る事を認めざりしと思惟した。「人口に關する論文」の著者として自然的に彼

は、是等習慣を賃銀の基本調節者として見做さんと望み、是は、唯賃銀が低い及び寧ろ異常の水準にある場合のみならず、總ての時に於て調節者と成ると。

彼は言ふ、リカード氏は「労働の自然價格とは労働者をして相互に生活せしめ、且つ増加或は減少なしに、彼等の種族を永存せしむるに必要な價格なり」と定義した。此の價格は、眞に余に謂はしむれば、最も非自然的價格なりと呼ぶ可きである。其の故は、事物の自然状態に於て、即ち、富及び人口との増加に對し大なる障害なくして、斯くの如き價格は、一般に幾百年間も存在し得なかつた。然し若し此の價格が眞に稀れで、且つ、事物の普通状態に於て、時期に關し遙かに遠き將來に現はるゝとせば、明かに是が、市場價格とは、其の僅の内に復歸す可き既成價格以上或は以下よりたゞ一時的に分離せるものと見做すが如き、大なる誤謬を招致するに至る。(1)

彼自身は、労働の自然或は必要價格を定義して、「社會の實際事情に於て、平均需要を充すに足る労働者の平均供給をなさしむに要する價格なり」となした且つ、此の寧ろ漠たる章句に依り、是は、何等例外的事情を含まざる一年に於て支拂はるゝ實際賃銀に等しきものなりと謂ふが如く思はるゝ。彼は、肉體的に生活料として必要な高、或は、説明し得ざる「習慣」が必須となす高に依り定

(1) Political Economy, p. 217.

めらるゝとなす嚴格なる賃銀の水準觀念を、全く非認した。

社會の勞働階級の狀態は明かに、一部其の國の財源及び勞働とに對する需要増加しつゝある割合に定り、又一部食物衣服及び居住とに關しての人々の習慣に定らねばならぬ。若し人々の習慣が既成のまゝなりとせば、早婚の力及び大家族を維持する力は其の國の財源及び勞働とに對する需要の増加する割合に據るであらう。又若し國の財源が既成のまゝなりとせば、社會の下層階級の安慰は、彼等の習慣、或は、必要品及び便宜との分量に據るであらう、是等のものなくしては、勞働者は其の人員を維持するを欲せぬであらう。

然し、彼等の中就れも、非常に長き期間中全く既成のまゝに留まる事は稀れである。(1)

リカードに相違してマルサスは、人々の習慣が異りたる時及び場所とに於て相違を來らす原因に就き或る注意を向けたのである。然し彼は言ふ「此の問題は、極めて多數の理由を含むが故に、其の満足なる解決を望むのは至難な事である」と。氣候と土地とに據る事多く、然し道德的原因、即ち一方には、專制主義、壓制及び無智、又他方には、市民的及び政治的自由、又教育が、勞働者の家族を維持せんとして要する分量の上に相違を來さしむる。のみならず、又此所

(1) Political Economy, p. 243.

でマルサスは、生活説の遺物、即ち人々の習慣は、極めて一般に、實際に受くる賃銀の高に依り影響さるゝとの事を放棄せんと努めたのである。

國の財源が急激に増加しつゝありて、勞働者が必要品の大きな部分を受くる場合、若し勞働者が餘分の食物を便宜及び安慰とに交換するの機會を持つとせば、彼は是等の便宜に對する趣味を養ひ、彼の習慣は是に依り形造くらるゝであらうと言ふ事が豫期されるのである。是に反して、一國の財源が殆んど靜止的となる場合、斯かる習慣は若し既成のものなれば、放棄さるゝに至る事が一般上起るのである。而して人口が停滯に至る以前、安慰の規準は基本的に下る。(1)

「急激に増加しつゝある財源」が賃銀を上ぐる道程に關して、マルサスは、何もかも左して重要な事を述べなかつた。彼惟ふに、勞働に對する需要は、國の資本及び收入との全價值の年々に増加する割合に依つて定まると。「其の故は、年所産の價値の増加が速かなれば、是に伴ひ新しき勞働を購買するの力は更に大となるであらう、且つ更に多く年々要求さるゝであらう。」勞働に對する需要は、資本増加に定まるとの學説を、固定資本の増加は、勞働に對する需要

(1) Ibid., p. 50.

増加を招かずと證明して反駁したるバートン (Barton) の企圖に對して、マルサスは二つの解答を有する。第一、若し、固定資本の流用に依り除外されたる労働が他の場所に於て雇傭さるゝ事が出来ぬとせば、固定資本の増加は『年所産の價値を減少せしめ、且つ、資本及び收入とを共にしたるものゝ増加を妨ぐる』故に資本は増加するに至らず、而して其の學説は影響を受けず。第二、一般に、『固定資本の使用は、極端に流動資本の豊富なるに對して便宜である。』此の事は彼が、固定資本の使用は所産の豊富なるに對して便宜なりと示したるに依り、證明されたりと考へたが如く思はるゝ。彼は次の言葉を以て彼の全研究を結ぶ。

生活の必需品に對する大なる獲得權は、二途に依り影響を受くるかも知れぬ、其の一は急激に増加する財源にして、他は労働階級の道德的習慣とであると常に認めらる事は極めて重要な事である。而も、急激に増加する財源に對して貧困者の力は影響するを得ず、又事物の特質として永久的たならざる故に、労働階級の幸福に關する大なる財源は、彼等の道德的習慣に俟たねばならぬ、若し是が適宜に行はるれば、是が労働者をして其の生活の始めより終り迄生活の必需品及び便宜との適當の分量を所有せしむるを得

るのである。(1)

ジエムス・ミルは、『抽象學派』の中最も純粹なる『抽象的』なりしとの名聲を有するとは謂へ、賃銀を取扱ふ分配論の章に於ける節は、其の議論の大部分、賃銀を昂騰せしむる種々の方法を載せて居る。一人割り賃銀の總額を決定する原因は、『賃銀の率は、人口と仕事、換言すれば、資本との割合に定る』との標題を附したる節の初めの部分に於て、極めて粗略に叙述されて居る。賃銀が、人口と資本との割合に定るとは、甚だ簡單なるが如く思はるゝ。若し労働者の人數が増加し、他方資本の量或は労働の雇傭に、必要なるもの即ち食物器具及び原料の分量が變らざれば、労働者の或る者は、『仕事より除外さるゝ危險に類するであらう。従つて労働者の各々は、餘儀なく、より少なき報酬を以て仕事に従ふ事となる。』

是に反して、若し吾々が、資本の量増加し、他方労働者の數が其の儘なりと想像するにせば、其の結果は、正反對となるであらう。資本家は、仕事に對する資力を以前より多量を有する。資本とは要するに、是より資本家が利益を得んと欲するものである。此の

利益を得んためには、彼等は以前よりも多くの労働者を備はねばならぬ。是等労働者は凡て、他の主人に備はるゝ。是等労働者を得るためには、彼等は又唯一の方法を有する——より、高き賃銀を提供する事。然し現在労働者の備はるゝ主人は、同様の状態に在り、且つ、勿論労働者を留らせんとして、より、高き賃銀を提供するであらう。此の競争は避け難きものである、而して、其の必然の結果は賃銀の昂騰となる。⁽¹⁾

彼は次の結論に到達した。

されば、普遍的に吾々は確認する。他の物が其の儘にして、若し資本と人口とが相對する比率が其の儘なりとせば、賃銀は其の儘に留るであらう、若し資本が人に相對して保つ比率が増加すれば、賃銀は昂るであらう、若し人口が資本に相對して保つ比率が増加すれば、賃銀は下るであらう、と。⁽²⁾

「他の物が其の儘にして」との條件を挿入したるは、眞に吃驚に價する。其の小分けの章の標題に於ての特種字體に書かれたる提言中には、他の物が其の儘にしてとの事は特に示さず、且つ、ミルは他の物が、其の儘でなき場合は何事が起るやに就きての説明には、殆んど何等努むるところがなかつた。所謂他

(1) Elements, 1st ed, p. 27; 3d ed. p. 43.
 (2) Ibid, 1st ed, p. 28; 3d ed. p. 44.

の物には顧慮なく、彼は更に議論を進むるに、

若し資本が人口よりも更に速く増加する事が自然的傾向なりとせば、人々の繁榮状態を保つには、何等の困難なき筈である。是に反して、若し人口が資本よりも更に速く増加する事が自然的傾向なりとせば、困難は非常に大なる筈である。賃銀が下落せんとする永久的傾向が是に伴ふ。賃銀の下落は、人々の間に貧窮の程度を益々増加するであらう、其の必然的結果は是に伴ふ——悲惨及び惡徳。貧窮及び其の結果たる悲惨とが増加するに従ひ、死亡率も亦増加するに至る。一家族に多數生るゝと雖も、福利のため、資力の缺乏に依り唯或る人数のみ生存するに至る。例ひ人口が如何なる率に資本より更に速く増加するに至るとも、生れたる者の一部は死亡する。其れ故に、資本及び人口との増加の比率は、其の儘に留るであらう、而して賃銀は下落するを止むに、至る。⁽¹⁾

例ひ是を明確に叙述せざりしと雖も、ジエムス・ミルは、是に依り、人口の資本より更に速く増加する自然的傾向が、通常の状態として現はれ、且つ、自體是を感ずる程度に進みたる時、賃銀は、唯、多人数でなき家族を支ふる資力を提供す可き水準にまで下落するであらうと述べたるが如く思はるゝ。「人口は資本が多く、の場所に於て實際に増加するよりも尙速く増加する傾向を有すると

(1) Elements, 1st ed. pp. 28, 29; 3d ed. pp. 44, 45.

は「殆んど凡ての國々に於て人々の大部分の状態は、貧苦且つ悲慘である」との事實に基きて彼が信ずる所である。若し資本が人口より尙速く増加したりとせば、賃銀は昂騰したる可く、彼は決つして賃銀が昂騰せりとは證明せなかつた。且つ労働者は「豊富の状態」にありたる可しと、彼は言ふ。然れども、賃銀の低きは、資本が其の増加せんとする傾向に應じて速く増加せんとするを避けたるは或る障害あるに歸せんとする者あるを恐れ、彼は、名義上、急激に増加せんとする人口の傾向の證明及び資本は、人口の急激の増加に劣る傾向を有するとの證明とに努めた。人口は急激に増加の傾向を有すると證明せんとして、彼は彼自ら好んで想像して著作しつゝありと思ひ、或る者は殆んど適當せずと考へたる、教科書中に用ゆる章句を以て説明に盡した。是に隨へば、人類の出産力は、是が好適の事情の下で全力を働かせる場合、普通死亡率を満たすに足るより遙かに勝るものである、其れ故に、人口は、唯少數年間に其の數を倍加するに至る増加傾向を有すると。「資本は人口の急激の増加に劣る傾向を有する」事を證明せんために、彼は「人類に於ける貯蓄の性僻は」「人類が曾つて置

かれたる殆んど總ての事情の下に於て非常に薄弱で、因つて資本の増加は「遅い」と云ふ事の説明を以て出發した。然し、急激或は遅緩とは程度の問題である、其れ故に、人口の可能的増加を「急激」の言葉を以て叙述し、資本の増加を「遅緩」の言葉を以つて叙述して、資本は人口に對して急激増加の劣れる傾向を有する筈であると謂ふは、甚だ明瞭を缺くものである。其れ故に讀者にとりては、「人口増加の傾向は、資本より速きものなりとの證明は、例ひ如何に強固なりとも斯かる基礎の上には依らぬ」と見出すは、寧ろ一の慰安である。是は次の事實に由る、

人口増加の傾向は例ひ大なりとも少なりとするも、兎に角一樣の傾向である。例ひ是が如何なる時如何なる率に於て増加したとせよ、他の時に、若し、同様の好適な事情に置かるれば、同様の率に於て増加するを豫期し得るのである。資本の場合には是に反する。資本の蓄積が續くにつれ、是を増加せんとする困難は徐々に大となり、終には、増加が非實用的となるに至る。

是は、收獲遞減の一般法則の結果である。

優透の特性を有する土地が全部使用され盡したる後、資本を粗悪の特性を有する新なる土地に行使するか、或はもとの土地に、收穫遞減を期して續いて養ひを授くるかに依り、資本の所産は資本増加に比例して、絶へず減少しつゝある。然し、若し資本に對する収益が、絶へず減少しつゝあるとせば、貯蓄に要する可き年々の基金は、絶へず減少しつゝある。斯くの如く貯蓄をなさんための困難は、絶へず増加するに至り、而して終に貯蓄は全く不可能とならざるを得ぬ。(1)

收穫遞減の一般法則と言ふが如きは存在せぬ故に、吾々は、全資本に對する収益の減少でなく、特定量の資本或は資本の一單位に對する収益の減少は必然的に、貯蓄のなざる可き年々の全基金の減少を意味するや否やの探究を打ち切るの必要はないのである。

尙進んで、ジェムス・ミルは論述する、『資本をして、其の自然的傾向より尙速く増加せしむるに要する有力なる手段は、望ましき結果を生まぬであらう』となす、又、是を證明し、且つ、人口が『社會的交際及び團結的労働の利益を全くする』に要する密度の程度を越へて増加せんとする事は、望ましからずと確信し、結論して言ふ、

(1) Elements, pp. 41, 42; 3d ed. p. 56.

其れ故に、眞の問題は、人口を増加せしめずして維持するに必要な人数にまで出産を制限するの手段を見出す事である。若し資本に對する土地よりの収益が未だ高きときは、是が行はるれば、労働者の報酬は充分なる可く、又尙大なる剩餘も残さる。(1)

全く無意識に彼の學説を不合理のものに導きつゝ、彼は、若し制限が可能であるならば、生産數の制限は『労働の状態をして、其の望む安慰及び享樂の状態にまで引き上げる』程度に遂行する可きであると附言した。其の望む状態にまでとは何を意味するや。

マツカルツクは、彼の百科辭書の論文中に、『労働者は、若し彼が生活の資料を與へられざれば働くを得ず』と言ふの外は、頭割り賃銀に關しては何事も謂はなかつた。然し、彼が其の論文を説明したる著書の中に、彼は確定的に、需要供給の學説を賃銀基金説に符合する算術的形式に於て言ひ表はした。資本が人口より速かに増加する時は、賃銀は上り、且つ、人口が資本より速かに増加する時は、賃銀が下るとの事は通常の事になつて居た。賃銀の率は労働者人口と「資本」との間に存する割合に定るとの事は、既に、マアセット夫人(Mrs. Marcey)

(1) Ibid., p. 52; 3d ed. p. 65.

の「問答集」に示されてあつた。然し、マツカルツクに取りては、マアセット夫人の學說に對して、算術的例證に依り是を説明し、決定及び強硬とを與ふる事が残されて居たのである。

彼は彼の讀者に信ぜん事を求めて言ふ、一國の勞働者を維持し且つ雇傭する實力は決つて位置の便益、土地の豊饒或は領域の廣サには定らず。疑もなく是等の事は、極めて重大なる事情である、且つ人々が富及び文化の過程に於て「向上する」程度を決定する上に偉大なる感化力を有す可きである。然し勞働者を維持し且つ雇傭する國の全く據る所は、是等の事情にはあらずして特定期間内に於ける一國の所有し、賃銀の支拂に用ひらるゝ過去の勞働に成る蓄積所産の實際量或は資本の實際量に定まるのである。豊饒なる土地は、急激に増加する資本の手段となる、然し單に是だけに止る。

此の土地が開拓さるゝ以前に、資本は土地に雇傭さるゝ勞働者の維持のために備へられねばならぬ。是は恰も、製造業或は産業の其他のものに備はるゝ勞働者の維持のために資本が備へられねばならぬと同様である。

是の原則の必然的結果として、一名の勞働者に來る可き生活料の分量或は賃銀の率は、全資本が全勞働者人口を支ふる割合に定まらねばならぬ……

此の原則を例證するために賃銀の支拂に用ひらる可き一國の資本が若し是が小麦

の標準に換へらるゝとせば、一〇〇〇〇〇〇〇クオターの大きとなると想像せよ。若し、其の國の勞働者の人數が二百萬人なるとせば賃銀を全部同一の共通標準に轉換せば、一人の賃銀は五クオターとなる。(1)

彼は、「勞働者階級の幸福と安慰とは、特に、彼等を養ひ且つ備ふ可き資本増加に人員増加が相對する關係に依る」との提言を例證し且つ是を維持せんと努め、是がために、英國及び愛耳蘭に於ける人口及び資本との増加と、此所に住む人々の状態とを比較した。愛耳蘭の人口は、英國の人口より速かに増加し且つ愛耳蘭の資本は、英國の資本より遅き増加を示して居たのである。愛耳蘭人は、缺乏に苦しみ且つ悲惨であつた。

而して此所に於て、人口が資本の増加に劣る速度に於て増加する場合、仕事を求むる者は更に少くなり、其の結果賃銀の率は比例的に高くなるであらうとは、明かなる且つ否認し得ざる推論である……愛耳蘭の人々が現在沈淪しつゝある低き且つ退化的状態は、各人が或る長い期間、其の人員を、彼等の安慰に且つ適當なる生活料に資す可き資力より尙速かに増加し續けたる事に歸す可き状態なるも亦明かである。又斯かる状態は、極めて確かに、凡て古く移住されたる國に見る事情である、此の國々に於ては増加

(1) Principles, 1st ed. 1825, pp. 327, 328; 2d ed. 1830, pp. 377, 378.

の原則が道徳的抑制に依り、或は結婚關係の成立上、用心及び先見とが適當の程度に働くに依り、強力に反抗を受くる事はないのである。(1)

是は、恰も、人口は資本より速かに増加するの傾向を有し、若し然らざれば、賃銀は昂騰す可しとなすジエムス・ミルの議論に對すると同様の反對説に遭ふのである。マツカルツクは、愛耳蘭の労働者の状態に、何等かの絶體的衰退、或は英國の労働者と比較して、果して何等かの衰退の存在したる説明を全く忘れて居た。

上層限界、此の限界以上に人口の何等減少も、或は資本の何等増加も賃銀を昂ぐるを得ざる事に就きては、マツカルツクは、ジエムス・ミルの如く、何事も謂はなかつた、然し彼は、下層限界、此の限界以下に賃銀が、賃銀の自然或は必須率の形に於て、下落するを得ぬ事に就きては、説明をした。此の限界は即ち「生産労働の費用」である、是は「市場に齎さる可き他の凡ての物品の生産費」の如く、「購買者に依り支拂はれねばならぬ」ものである。此の費用は最初、労働者及び「其の家族」を維持するに必要とする食物及び他の物品との分量であるが如く思

(1) Principles, p. 334.

る。

若し彼等が此の供給を受けずとせば、彼等は困窮に陥るであらう。而して悪疫と死亡とは人口を稀薄にするを繼續し、終には國民の資本が、彼等に生活料の資力を得せしむる割合にまで人員は減少するに至る。(1)

然し「道徳的抑制」が人口を抑御するに至るやも知れず又する事あり、其れ故に賃銀の自然或は必須率は、僅少の生活料を提供に要するものよりは騰ると謂ふ事は、直ちに證明さる。更に又マツカルツクは、道徳的抑制は資本増加に依りて起る賃銀増加に感化を受くる習慣上の變化に基きて増大する事ありと言ふは、マルサスの「經濟學」に従つたのである。

マツカルツクの賃銀基金説は、其の翌年、穀物の價格及び労働の賃銀の著者エドワード・ウエスト卿 (Sir Edward West) の反駁する所であつた。政府は労働需要を増加するを得ずと主張したる者の論争に答へて、彼は言ふ、

若し労働者の維持に要する資本が特定の高であり、且つ、其の高が其の年の間必然的に労働者人口の上に運用されたりとせば、資本の及ぼす労働の需要或は賃銀の高には

(1) Ill., p. 336.

何等の相違を來さぬ。例ひ是が政府に依り不生産的の者例へば兵隊或は海員に與へらるゝとも。或は個人に依り生産的労働者に與へらるゝとも。全人口は其の年の中に此の資本の全額を受くるであらう而して彼等は是以上得る事を得ぬのである。(1)

是が彼の信ぜる場合ではないのである。

彼は問ふ、過去卅五年間の窮乏の年間に於ける莫大の寄附金及び教會惠與金及び増加せる給與金の結果は如何。其の結果は貧民労働者の貨幣資力を増して居り、且つ穀物の價格を斯かる状態に非らざれば到達せざりし非常な高價に上騰せしめたるを承認せざるか。一國の金錢資力或は金錢資本のより多き或はより少なき高が労働者人口上に運用さる事は伴はざるか。(2)

彼は續いて言ふ、労働の需要は、全く、一國の富若しくは資本の増加の率に定ると。活潑なる商業状態は資本増加なくして賃銀を二倍する事もある。

資本及び労働の雇用者は、十名の人を備入れ、二ヶ月間其の労働を行使して其の所産を生産せしめ、彼は直ちに是を販賣し、而して斯く其の資本に利潤を附して取り戻すを得ると、吾々は言はん。此所で、是等十名の人々が其の仕事に對して同一賃銀を得て、一日二倍の仕事をなすと假定せよ。其所産は、一ヶ月にして生産さるゝであらう。即ち

(1) Price of Corn and Wages of Labour, p. 83.
(2) Ibid., p. 85.

時を半分にして、運用された資本に對して同一の利潤を齎す、即ち、二倍の利潤である。其の故は利潤とは、特定期間内に於ける資本に對する利益なるが故に、収益の急激増加は、生産の増加する率と同様の結果を招くに至る。(3)

ウエストは、賃銀基金説を承認するを拒みたる唯々一人の者ではなかつた。マウンテフォート・ロングフィールド(Mountfort Longfield)は、一八三四年に出版された彼の「ダブリン講演集」中に、賃銀は資本及び人口との割合に定るとなす學説を全く無視した。彼は言ふ、賃銀は、労働者の供給と是に對する需要との關係に依り、又、供給は、現存する労働者種族に成ると。然し是に對する需要は、其の國の資本の總額に定ると言ふ代り、是は「労働者が遂行能力を有する仕事の効用或は價値に決定さるゝ、……大多數労働者の賃銀は、彼等労働の所産、或は所産の價格より支拂はれねばならぬ」と、彼は言ふ。「資本を全く考慮の中より除き去り、彼は生産説を主張した。」

労働者の正味賃銀、即ち生活の必需品及び安慰とに對する彼の支配力は、全く利潤の率及び労働の賃銀の費消さる可き是等物品を生産する労働能率に依るであらう。(4)

(1) Ibid., pp. 86, 87.
(2) Lectures on Political Economy, p. 212.

彼は、固定資本を省略せる例證の強サを信じ、利潤に對し労働者の頭割り低減は利潤の率に依り表はさるゝと假定したのは大なる誤謬であつた、且つ彼は、労働者に依り成されぬ物品の生産上能率増加は、賃銀を増加せぬと説明するには殆んど努めなかつた、然し彼の學説はジエムス・ミル、リカード及びマツカルツクの説に對して大なる進歩を示して居る。

ロングフィールドの講演集の出版三年前に、シニアは生産説の建設に著手して居た。彼の「一八三〇年復活祭の學期中オックスフォード大學に於てなしたる賃銀率に關する講演集」中に、彼は言ふ、若し同數の人數になる各労働者の家族が、同一程度の勤勞を努むると假定せば、一年の間に一労働者家族の所得する商品の分量と實質とを定むる「近接原因」は、次の如く明かであると。

一年間に各労働者家族の所得する商品の分量と實質とは其の年間に、直接或は間接に労働者人口の使用に供さる可き商品の分量と實質とに定らねばならぬ。其の労働者人口は労働者家族の人員に相對す可く、其の期間中、生活料を得るに彼等自身の労働に據る總ての人々を含む。若しくは、更に簡單に言へば、是等商品の質量は維持さる可

き労働者の人員に相當する労働者の維持に要さるゝ基金の大サに定る。(1)

此の提言は、一見、賃銀は、労働者の人員及び賃銀の支拂に要さるゝ資本の高との割合に定ると言ふマツカルツクの提言と同一なるが如く見ゆる。然しマツカルツクに於ては、「要さるゝ」商品の分量は、全く過去の蓄積に依りて決定され、且つ勤勞の生産力に對しては何等の關係を有して居なかつた、是に對してシニアは、資本及び蓄積に就ては何等言ふ所なかつたのみならず、又「労働者の維持に要する基金を増加し得る主要手段は、労働の生産力を増す事に在る」と其の序文中に論述した。彼の著「經濟學」に於て、彼は尙正確に表はす、且つ、労働者家族の人員に相當する労働者人口の使用に供さる可き商品の分量と實質とは、「第一、労働者に使用さる可き商品の直接或は間接生産に於ける労働の生産力に定り、又第二、労働者家族の全人員に相當する労働者の使用に要する物の生産に、直接或は間接に雇傭さるゝ人の數に定る」となした。労働者の要する物を生産する人々の數及び労働者家族の人員との間に存する割合に關して彼は言ふ、

(1) Lectures on the Rate of Wages, p. 19.

然らざれば労働者の使用のための基金供給にのみ備はる可き労働が他に轉ぜしめらるゝ三つの目的がある。即ち、生産さるゝ物が第一に、自然代理物の所有主に依り用ひらる、第二は、政府に依り用ひらる、第三、資本家に依つて用ひらるゝのである。或は稍や正確性を缺くとも尙簡單に言へば労働は賃銀の生産に用ひらるゝ代り地代、租税或は利潤の生産に用ひらるゝ事があるの謂である。(1)

是等項目の中第一を取扱ふに於て、シニアは其の要點を考へたるが如く思はるゝ。彼は労働の大部分或は小部分が、賃銀の生産より地代の生産への轉換を決定する原因を説明す可きである。然るに斯くなさずして、彼は議論を引用して、『労働の維持に要する全基金は、一國に於ての大部分の労働者が、其の國の自然代理物の所有主の使用に要する商品を生産するに雇傭されたる結果必ずしも減少は來さぬ』と證明した。第二項目、租税を取扱ふに、彼は無必要且つ惡戯的經費のための租税は、全人々の收入中より控除され、且つ労働者は租税の分配に興味を有して居るとの叙述を初めた。此の後彼は、然らざれば労働者の使用のための基金供給にのみ備はる可き労働が轉ぜしめらるゝ最

(1) Political Economy, 8vo ed. p. 174.

初の二つの目的に對しては、兎角説明を終へたりと想像したるが如く思はるゝ、其の故は、彼は進めて言ふ、

されば地代は外部的の物として見做され、又租税は經費の一形式として見做さるゝせば賃銀より控除されたるものとして残るものは唯利潤のみである。而して労働の生産力は與へられて居る故に労働の維持に要する基金の大サは、資本家の使用に要する物の生産に雇はるゝ労働者の數が、労働者の使用に要する物の生産に雇はるゝ労働者の數と相對する割合に定るであらう。或は、尙一般的言ひ方をすれば、基金の大サは其の所産が資本家及び労働者間に分たるゝ割合に定る……

地代及び無必要且つ不平等に分配さるゝ租税のなき場合、生産さるゝ凡てのものが分たるゝは、是等二つの階級に對してのみである。今考ふ可き問題は、此の分前の割合を決定するは何ぞやである。(2)

彼は言ふ、是が解答は、「一は、其の國に於て、特定期間、資本の運用に對する利潤の一般率、又二は、各々特別の場合に於て、資本の運用と利潤の受納との間に經過する期間』とであると。彼が是等二つの要素の中第二として意味するものを想像するは至難な事である。一人の鐵道株主の資本運用と其の利潤受納

(1) Political Economy, 8vo ed. p. 190.

との間に如何に長き期間が経過するや。推量し得る範囲内に於ては、シニアは言はん、利潤は鐵道が完成さるゝや直ちに得らるゝと。其の株主は、例へば二ヶ年の期間中一〇〇磅を出資し且つ其の期間の終りに於て、鐵道の一〇五磅に相當する高を所有する。然し、シニアの方式中に、株主の其の後の配當金が何處に場所を見出す可きかは、不可能である。利潤の率に關しては、彼の言ふのは瞭解し易しとするも、同様不満足である。彼の學説は、人口増加を招かざる流動資本の増加は利潤の率を下落せしめ、且つ流動資本の増加を招かざる人口増加は利潤の率を上騰せしむると言ふ。『若し、孰れか増加し或は孰れか減少し、然し異りたる割合に現はるゝとせば、利潤は賃銀の供給に相對的變動あるに従つて上り或は下るであらう』是は、恰も、流動資本及び労働との關係に於けると同様の如く思はるゝ、然し、資本の増加が、『何等より多くの労働の増殖を要さざる形式に於て起るとせば』是は、利潤及び賃銀との率の増加に資する。

機械或は器具は、實際上單に労働の生産力を増加せしむる一手段に過ぎぬ。此の國

に於て道路、橋梁及び港灣の建設に費されたる幾千萬磅は、利潤率或は賃銀の高を減少せしむ可き何等の傾向を現はさなかつた。(1)

「道路、橋梁及び港灣」は、一般に公共財産である、又通行税取立の時代に於てすら、著しく多數の是等のものに對しても、何等の利潤は支拂はるゝ事はなかつた。「工場、鐵道及びドック」を是に代用せしむれば、シニアが、其の議論の要點を保留するには驚く可き無能力であつた事が、充分に明白となるであらう。ツット以前彼は、賃銀率を定むる二つの原因中第一即ち労働の生産力を皮相的に取扱つて居た、又彼は、幾何の労働が賃銀を生産する事より利潤を生産する事に轉換さるゝかを決定するもの、即ち「或る勤勞の生産力を削減する」と云ふ事を思惟す可き筈であつた。然るに是をなす代り、彼は唯固定資本の蓄積は利潤率も或は賃銀の高をも低減せしめずと陳述したるのみである。所産が、労働者及び資本家との間に分かたるゝ割合は、二つの要素即ち利潤率及び運用期間とに定ると彼は言ふ。而して彼は唯、一瞬間を以て與へられたる運用期間と見做しつゝあつたのである。斯かるが故に、労働者及び資本家との分前

(1) Political Economy, 8vo ed., p. 194.

の割合は、全く利潤率に依らねばならぬ。されば、問題に對しての貢獻として考らる可き勤勞の生産力増加は、利潤率及び人割り賃銀の絶體高とを共に上騰せしむると言ふ事が、果して言ひ得るや。

幾多の缺點あるにせよ、シニアの賃銀の學説は、一の暗示的のものであつた。又、是が他の思索家に依り考へられ且つ訂正されたる時は、何物か價值あるものとならんと豫期し得るものではあつた。然し、ジェ・エス・ミルは、是に對しては何等の注意も向けず、唯彼(シニア)の幼少時代の觀念を賛同したに過ぎなかつた。彼(ミル)は、賃銀は主として競争に定るとの提言を以て出發した、又、大膽にも巨大なる理論的破れ目を跳び越へて、其の提言より、『されば、賃銀は勞働の需要供給に定り、若しくは、屢々論述されたる如く、人口と資本との間の割合に定まる』との推論を進めた。然れども、彼は説明するに、人口とは單なる人口の謂ではなく、『勞働者階級人員のみ、若しくは、寧ろ雇傭により働く人々の數』の謂であると。又、資本とは、單なる資本の謂でなく、『唯流動資本のみ、又其の全部でもなく、勞働の直接購買に用ひらる可き部分で、』尙是に對して、『資本の一部を構

成する事なく、勞働の交換に支拂はるゝ總ての基金即ち、兵隊、家庭使用人及びの凡ての非生産的勞働者の賃銀の如き基金が加へられねばならぬ。』

不幸にも、一國の賃銀基金と呼べる可きものゝ總額を、一の通俗の言葉にて言ひ表はす方法がない。而も、生産勞働の賃銀は、其の基金の殆んど全部を形造るが故に、比較的小さく又重要ならざる部分が見逃され、且つ賃銀が、人口及び資本とに定まると言ふのは常である。此の言ひ方を用ゆるのは至便であらう、然し是は粗略にして、全眞理の文學的敘述ではないと考ふる事を忘れてはならぬ。(1)

されば、賃銀は人口と資本との割合に定まるとの敘述に依り、賃銀は雇傭により働く人々の數と、勞働の直接購買に用ひらるゝ部分の資本の高に、勞働の交換に支拂はるゝ他の基金を加へたるものとの間に存する割合に定まると吾々は瞭解せんとするのである。

或る者にとつては、是は、單に、算術的自明の理と變る所なきが如く見ゆる。此の人々は、惟ふに、資本の一部を形造る事なくして、勞働の交換に支拂はるゝ基金は、唯、特定の期間内勞働の交換に支拂はるゝ、金高を意味し得るのみであ

(1) Principles, Bk. II. ch. xi § I, 1st ed. vol. I. p. 401; People's ed. p. 207.

るとなす。例へば、兵隊の労働との交換上支拂はるゝ基金は、「一年」に幾千萬磅の數でなくてはならぬ、唯、幾千萬磅の數ではないのである。同じ類推論を「労働の直接購買に用ひらるゝ資本の高」の解釋に適用して、此の章句は「特定期間内に労働の直接購買に用ひらるゝ資本の高」を意味すると、彼等は推理する。斯くの如く彼等は、全提言をして、或る與へられたる期間、例へば一週間内の、人割り賃銀は、雇傭により働く人々の數と、其の期間内労働の購買に用ひらるゝ資本の高に加へたる他の基金との割合に定まるとの叙述と同等視するに至つた。斯く瞭解すれば、其の提言は確しかに算術的自明の理である、是は、唯、除數と被除數とが決定するものは其の平均なる可しとの叙述に等しくなるに因る。

然し、ジエ・エス・ミルの意味したる事及び眞に述べたる事は全く是には非ず。是が彼の意味したるものに非ずとは、直ちに其の學說に對して「外見上矛盾する或る事實あり」と言ふ彼が主張に依り、示されて居る。事實が一の算術的自明の理に矛盾して表はるゝのは、極めて異種のものでなくてはならぬ。第一

は「賃銀は商業の順調なる時は高い」との事である。此の事實は、賃銀が雇傭により働く人の數と、特定期間に、労働の購買に用ひらるゝ資本に加へたる他の基金の高との間に存する割合に定まると言ふ叙述に對して、外見上矛盾を來さざるは全く明白である。若し賃銀が、商業の順調なる時に高しとせば、因て算術的方法に依り、商業の順調なる時は、大なる基金の高が、特定の期間中に雇傭により働く人の數に相當する労働の購買に用ひらる可き筈であるとの結論より逃るゝ事は出來ぬ。商業順調にして、九〇磅の代りに頭割り賃銀一〇〇磅なる時、雇傭に依り働く人の數に相當するものに支拂はるゝ賃銀高は、明かに尙大なるものである。其の提言に對して「外見上矛盾する第二の事實は、正確には一の事實ではない、然し、是は「高き價格は、高き賃銀を生むとの普通概念」である。されば又、何等外見上の矛盾はないのである。其の概念の眞理或は虚偽も何等其の提言に影響を來さぬ。第三の事實は、賃銀——「意義は勿論貨幣賃銀」——は食物の價格と共に變動するとの「見解」である。是に對してミルは惟ふに、唯部分的に眞理なりと。然し部分的或は全部眞理なるや否や

は、決つして人割り賃銀が、特定の期間に於て賃銀として支拂はる可き全高と、賃銀労働者の人数との間の割合に定まるとの事實に對し、外見上の矛盾はないのである。

斯くて、ジェ・エ・ス・ミルは、特定期間に於て、人割り賃銀とは其の期間中賃銀として用ひられ、賃銀受納者の人数に因つて分かたると、高に定まるとの、算術的自明の理を明言せざりしは明かである。再び彼の言辭に徴すれば、彼は「特定期間内に費さるゝ高に就ては何事をも言はなかつた事、及び彼は、労働の直接購買に用ひらるゝ資本の「高」に就ては語らざりしが、労働の直接購買に用ひらるゝ部分の資本に就て語りしを、吾々は發見する。其處で、若し一國の全資本が「年割り」或る高或は一年幾千萬磅とせば、労働の購買に用ひらるゝ部分の資本は又「年割り」高になるであらう。然し、全資本は「年割り」高に非ずして、純正單純の高にして、即ち一年に幾千萬磅に非ずして、唯幾千萬磅である。而して、労働の購買に用ひらるゝ部分の資本も亦、ミルの想像に於ては、純正單純の高である。其れは、X千萬磅にして、年割りX千萬磅に非ず。

勿論、労働の直接購買に用ひらるゝ部分の資本は「斯く解釋されたる場合、一の賃銀基金」即ち労働の購買に用ひらるゝ部分の資本と、資本の一部分を形造る事なく、労働の購買に用ひらるゝ總ての基金即ち兵隊、家庭使用人及び他の總ての非生産的労働者に與ふる賃銀の如き」とを、共に加へたるものなる事は不可能である。此の二つの物は、一の總計を形造るの能力はない。「生産労働者」の年賃銀は、非生産労働者の年賃銀に加へられて、一の總計を形造る事は出來る。然し、非生産労働者の年賃銀或は週賃銀は、其の國の資本の一部分と一の總計を形造る事は出來ぬ。五〇〇〇〇〇〇〇磅に對し、二〇〇〇〇〇〇〇〇〇磅は加へらるゝかも知れぬ。然し、五〇〇〇〇〇〇〇〇〇磅の資本高に對し、一年二〇〇〇〇〇〇〇〇磅を加ふる事は出來ぬ。一時間内に、リオンを越へて流るゝ水の量と、特定の瞬間内に、ジェ・ネバ湖の有する水の量とを加へて、ロンの水の總計を得るとの概念に就きて考ふれば、是は明白となる。

ミルが、資本の一部分と其の國の收入の一部分とを加へて一の基金となすを得ると考へたる誤謬に陥りたる事も、彼が非資本基金を「見逃す事は常で」あ

ると言ひしを知る時に、更に名望を失すると思はるゝであらう。彼が常に指導を受けたりと信ずる彼の父及びリカードとは、資本より前拂されざる賃銀に對しては、何等理論を立てたる事なく、又前拂されざる賃銀は絶對になさかの如く論述して居たのである。ジェ・エス・ミルは、斯かる賃銀は存在すると記憶し、且つ賃銀は資本と人口とに定まるとの理論の下に齎さんとするに眞の努力をなす代り寧ろ形式的努力をなしたのである。彼は、非生産労働に費さるゝ「基金」の高を影響する原因の發見に就きては、何等見る可き努力をなさず、且つ労働の購買に費さるゝ部分の資本を影響する原因に向つて其の注意力を傾けて居たのである。

されば、ミルの賃銀の理論を考察するに當り、唯一の落入り易き事は、「非生産労働の賃銀を加へんとする彼が企を無視し、而も、彼自身實際になしたる非生産労働と其の賃銀とを見逃す事」の舊き習慣をば、採用せんとする事である。

其處で、労働の賃銀が、雇傭により働く人数と、労働の直接購買に用ひらるゝ部分の資本との間に存する割合に定まると、吾々は提出して來た、又労働の直

接購買に用ひらるゝ部分の資本は、特定期間内、斯くの如く用ひらるゝ資本の高に非ず資本の特種部分を意味すると、吾々は結んで來た。されば自然に現る可き問題は、「其の部分とは何ぞや」である。

是は、習慣的或は一般的或は規則として賃銀の支拂に備へられたりと考へらるゝ部分の資本と思はる、或は、他様に是を定義すれば、是は、器具或は機械に非ざる部分の資本である。是は常に、總て賃銀の支拂に用ひらるゝには非ず其の故は、其の幾分は其の所有者の掌中に無爲に保たるゝやも知れぬ。又是は、「賃銀は商業の順調なる時は高い」と言ふ事實の説明である。其の故は、商業の衰微の時は、此の部分の資本の量は其の所有者の掌中に無爲に留るに因る。其所で、是が如何なる形式に於て存在するやは、餘り明かでない。斯かる部分の資本は在りと承認して——甚だ寛大なる假定なれど——吾々は此所で此の部分の資本と賃銀受領者の人員との間に存する割合に影響する原因に關して、何事か教へらる可きを豫期せねばならぬ。吾々は、賃銀受領者を増加し、又減少する原因に關しては何事かを聞く。彼等は高い賃銀に依り増加し、又

低い賃銀に依り減少する、又安慰の標準の高昇に伴ひて減少し、且つ、安慰の標準の低下に伴ひて増加する。されば、若し安慰の標準が全く外部の原因に定まるとせば、賃銀は畢竟全く是等外部の原因により決定さるゝに至る。其の故は、例ひ如何なる資本の高が賃銀の支拂に用ひらるゝために備へらるゝとしても、賃銀受領者の人員は、時の進展につれ、自らを是に適應せしむるに至るであらう。其れ故に、安慰の標準を保つに必要とする賃銀は過剰なり或は不足なりと謂はるゝ事はない。安慰の標準は、其れ自體屢々受くる賃銀の高と共に變動すると認めらるゝ。随つて賃銀に要さるゝ部分の資本の大サに影響する原因は、賃銀を決定する上に極めて重要なものである。若し此の部分の資本が増加せば、賃銀は昂騰するに至り、又是が安慰の標準を高昇せしむるに至る。されば、賃銀受領者の人員は是に比例して増加せざる可く、而して賃銀の昂騰は永久的であらう。若し此の部分の資本が減少せば、賃銀は下落するに至る。又是が安慰の標準を抑壓するに至る。因つて、賃銀受領者の人員は是に比例して減少せざる可く、而して賃銀の下落は永久的であらう。の

みならず、労働の購買に用ひらるゝ部分の資本増加の影響が永久的なるか或は然らざるかに就きては、増加の原因を辿る必要があるのである。然し、ミルは、此の資本の特種部分を増加し、減少せしむる原因に就きては、何等謂ふ所はなかつた。初めの章に於て彼は、一般に、資本増加に關する一理論を立て、居た、或は是を以て充分なりと彼は考へたのである。然し彼は、労働の上に用ひらるゝ部分の資本が、全體の中に於て常に同一割合なりとは謂はず、又彼が、是が其の謂なりと吾々に推察せしむるには何等の理由をも與へぬ。是は、彼が「資本」と謂ひしは資本以外の何ものかを意味したる事を、全く忘却し盡したる事に歸す可きである。彼が「賃銀は、人口と資本とに定まる」との叙述を用ひたるは、「是は粗略にして、全眞理の文學的叙述ではないと考ふるを記憶する」を忘れたのである。

第三節 仙割り利潤の變動

アダム・スミスは、章「資本の利潤」の初めに於て、利潤の上騰と下落とを、社會の

富の増加或は減少する状態に歸した。

資本の利潤の上騰と下落とは勞働賃銀の昂騰と下落との同一原因に定まる。社會の富の増加或は減少する状態即是である。然し是等の原因は、其の一方或は他方を影響するの状态には甚だ差異あり。資本増加は、賃銀を昂け、利潤を低くする傾あり。

多くの富有なる商人の資本が、同一商業に向けられたる時は、彼等相互の競争は、自然的に、其の利潤を低くするに至る。又同一社會に於て、異りたる商業中に、資本の同一増加のありたる時は、同一競争が、其の總てのもの、中に同一の結果を生まねばならぬ。(1)

此の理論に關する事實を擧ぐるに、彼は、英國に於て、利潤の率は國が富有になるに従ひて低落し來り、又富有の國たる英國及び和蘭とに於ては、尙貧乏の國たる佛國及び蘇格蘭とに於けるよりも、利潤は低いと述べた。若し富の増加が賃銀を引き上げ、利潤を引き下げ、富の減少が利潤を引き上げ、賃銀を引き下げるとせば、北亞米利加に於て、賃銀と利潤とは共に高き筈なりとは、寧ろ驚く可き事なりと何人か反駁する場合あるに對し、彼は、精細に新殖民地の狀態を説明した。彼は言ふ、高き利潤と高き賃銀とは恐らく「新殖民地の特種事情

(1) Wealth of Nations, Bk. I. ch. ix, p. 40a.

を除きては、兩立する事は殆んど稀れ』である。殖民人は、多量の土地を有し而して資本は甚だ少ない。彼等は、

彼等が耕作の資本を有するより、多くの土地を所有する。其れ故に、彼等が所有する資本は、唯最も肥沃且つ最も好都合の位置にあるもの、耕作にのみ運用さるゝ、即ち海岸に近く、又運輸し得る河川の堤に沿ふ土地の如きは是である。斯かる土地も亦其の自然的所産の價値をすら充さざる價格に於て、賣却さるゝ事屢々である。斯かる土地の購買及び改善とに運用さるゝ資本は、非常に大なる利潤を生む筈である。(1)

高き利潤は急激の蓄積に對する原因となり、蓄積の急激なるは高き賃銀の原因となる。然し「最も肥沃且つ最上の位置にある土地が、總て享有され盡したる時、少なき利潤が土壤及び位置共に劣りたる土地の耕作より生れ來る。』其れ故に、殖民地が殖ゆるに従ひて、利潤は下る。賃銀は、利潤に沿ふては下らず。其の故は、蓄積の急激なる事は、少なき利潤を伴ふと謂ふも、「大資本」は一般に、大なる利潤を伴ふ小資本より尙速く増加するに依り、停滯する事はない。

さればアダム・スミスは、其の章の初め現れたる提言の矛盾或は制限として

(1) Ibid., p. 42a.

利潤を上ぐるに、社會の富の減退以外今一つの原因の存するを認めて進む。

新領土の獲得、或は商業の新しき部門の獲得は時々資本の利潤を上騰せしむる事あり、又是と共に富の獲得上急速に進歩しつゝある國に於てすら貨幣の利潤は上騰する事あり。斯かる獲得が異りたる人に提供し又其の間に分與する商業の全増加に對して不充分的の資本は、唯利潤を生む可き、是等特種部門に運用さるゝ。他の商業に以前運用されたる部分の資本は、必然的に、其れより取り去られ新しき尙利益多き商業の或るものに向けらるゝ。それ故に、是等總ての舊き商業に於て競争は、以前より少くなる。市場に於ては是より供給さるゝ多くの異りたる種類の商品は、減少するに至る。彼等の價格は、必然的に、多少の騰貴を示す、而して此の商品の取扱に従ふ者に對して、より大なる利益を齎す。(1)

富の衰退、或は更に特別に言ふ「社會の主要資本の減少、或は勤勞の維持に用ひらるゝ基金の減少」は、利潤を上騰せしむる、其の故は、是が賃銀を下落せしめ又價格を騰貴せしむ。其の結果、「社會に残る資本の所有者は、彼等の商品を以前より安き費用に於て市場に持ち出すを得る、又、市場に供給する上に、以前より少なき資本を運用するが故に、彼等は商品を尙高く販賣する事を得。」

(1) Bk. I, ch. ix, p. 42b.

高き賃銀及び高き利潤とは殆んど兩立する事なしと言ふ彼の提言に對して、寧ろ驚く可き對稱たる如く、アダム・スミスは、一國が靜止的となる時、「勞働の賃銀と資本の利潤とは、恐らく、極めて低落するに至る」と述ぶる。「仕事に對する競争は、必然的に、勞働者の人員を僅かに維持するに足る程度まで勞働の賃銀を下落せしむるが如く大なるものである」他方、賣買の「凡ての特種部門に運用さる可き資本の量は、其の商業の特性と大サとが許容し得可き程度に偉大なるものである、」其れ故に、競争は「何處にも偉大なるものたる可く且つ、其の結果、普通利潤は、低落の限度まで低くなる。」

利潤率を定むる原因に對する此の説明は、總體上何等か非常に大なる尊敬に價すると伴はるは、怠慢であらう。新殖民地に於て安價に肥沃なる土地の耕作に用ひらるゝ資本は、何故に、非常に大なる利潤を生まねばならざるか。若し、總ての生産者が「市場に比較的安く持ち出す」とせば、何故に彼等の各々は彼等の種々の所産の交換上、相互に、より多く與へ得るや。「低落の限度まで低き利潤率とは、何にを意味するや。然し、主要の實際問題は、一國が富有となる

につれ、利潤の下落を來す原因は何ぞやである。又、アダム・スミスは、彼が「富の増加」と答へたる時は、力強い根據を有して居た。第二篇の「利子を附して貸與さるゝ資本に就て」の章に於て、彼は次の言葉を以て、此の點に關して彼の學說を反復した。是に依り、彼が第一篇に於て與へたるよりは幾何か明瞭になした。

孰れの國に於ても、資本の増加に従ひ、是を運用して得らるゝ利潤は、必然的に減少する。其の國に於ては、如何にして新しき資本を運用して有利なる手段を見出すかは、徐々に更に尙困難となる。其の結果異りたる資本の間に競争起り、一の資本の所有者は、他の者に依り享有さるゝ仕事を所有せんと努む。然し多くの場合に於て、彼が、此の仕事より他の者を驅逐せんと欲するには、尙相當の條件に依るの外はない。彼は、其の幾何か安く得るものを販賣せねばならぬのみならず、又是を賣らしめんには、時々、是をより高くも亦買はねばならぬ。生産労働に對する需要は、是を維持するに用ひらる可き基本の増加に依り、日々益々増加する。労働者は、容易に仕事を見出す、然し資本の所有者は、労働者を雇備するには、困難を感じる。彼等の競争は、労働の賃銀を昂け而して資本の利潤を下ぐる。(1)

是には、多くの眞理を含む。人々は、新しき資本を投資するに當り、是が其の

(1) Bk. II, ch. iv. p. 157a.

經費に比例する最大の定期的収益を齎す方法を見出さんと努む。何人も、彼が他の一つの方法に依り、二十日の直接労働を費して、自ら、年割り二日の労働を節約するを得る場合、一の特別の方法に於て此の後、年割り一日の労働を節約せんために、二十日の直接労働を消費する者はない。何人も一年五磅を得んと直ちに一〇〇磅を費す者はない、他の方法に於て是を投資せば、一年一〇磅を得るを知るに因る。随つて其の機會及び智力の及ぶ範圍内に於て社會は、初め最も有利な投資をなし、而して、若し智識が決つて向上せぬとせば、其の國內に於て、何等かの新しき資本を運用する有利の方法を見出す事は、徐々に、益々困難と成るは常である。其所で、競争が起り、是が總ての資本の上に利潤の率を決定する、年々節約さるゝ労働の割合、或は、新しき資本に依り年々獲得さるゝ収入の割合を定むる原因となる。大なる貯蓄量を運用する新しき有利な手段の發見は、利潤の低下を止め、且つ、勿論極めて敏速に不斷の上騰の原因となる事あり。

然し、リカード學派は利潤を見做して、賃銀を支拂ひたる後雇主に殘る單な

る剩餘なりとする彼等の習慣に依り誤導され、アダム・スミスのなしたる利潤の歴史的な下落に對する説明を全く無視し、且つ、是をば何等存在せざる原因即ち農業的勤勞の生産力上の假想的低減に歸すると主張するを好んだ。ウエストは、例ひ彼が「リカード學派の名付けの父又第一人者には非ずと雖も、利潤の一般的下落が凡ての商業に用ひらるゝ資本増加によつて起るは、恰も一の特種商業に於ける下落が、其の商業に用ひらるゝ資本増加に依つて起る事と、同様なりと見做したるアダム・スミスの見解は、極めて些細な考察も、其の誤謬を指摘し得るとなした。ウエストは論議する、競争増加は其の所産に與へらるゝ價格を低落せしむるに依り、一の特種商業上にて受くる利潤を低下せしむ、然し凡ての商業上の競争増加は、一切の價格を下落せしむる事を得ず、是は、價格とは物品交換上の比率に過ぎずして一切の物品は、相互の比例上下落するを得ぬに依る。競争増加は、賃銀を昂騰せしむるに因り、利潤を下落せしめずと、彼は言ふ。是は、賃銀が資本の「増加比率の大サ」に依りて決定され、且つ此の比率は、若し其の國が平等に吝嗇なりとせば「利潤の率に依り定めらる。因

つて、利潤率の下落は、賃銀の上の一の障礙としての役を演ぜず。「資本の利潤とは」彼は言ふ「資本の正味増殖である、是が低減する可きは唯二途あり、即ち、生産實力の減退に依るか、或は、是等實力の維持費の増加に依るか、或は是を要言すれば、勞働の正味賃銀増加に依る。」利潤の下落は、是等原因の第二に歸せられざるを信じ、彼は、其の下落を第一の原因のみに歸して居る。

十一年後、彼の小著「穀物の價格及び勞働の賃銀」の序文に於て、彼は不平を述べて言ふ、リカードは、余の著「資本の運用上の論文」に對し「富と改善との進捗中に起ると見做さるゝ資本の正味増殖或は利潤の減少は、必然的に、農業に於ける、勞働の生産實力の減退に基いて起る」との發見に名譽を與へて呉れなかつたと。其の不平は全く無根の事である。リカードは、既に同一學說を其の著「輸入制限の不得策を示し、穀物低價が資本利潤に及ぼす影響に關する論文」中に立て、居た。此の著は、彼が、ウエストの「資本の運用」の小著を讀む以前に公開されて居たのである。リカードは、輸入制限の不得策を示さんと提議し、穀物低價は高き利潤を意味し、是に因り、恰も彼が、財産家になりたる如く、自ら利

益を受けたる者なりと假想して證明をなしたのである。明かに、アダム・スミスの新殖民地に於ける利潤の高き事に就ての註解を彼の心の中に或る記憶を以て、彼が其の出發點として、『肥沃の土地に富む國に最初の移住に於て、又土地を持たんとする者は何人も得られ得る』五〇パーセントの假想的利潤を認めた。引例として、一個人が、斯かる土地を、半分固定資本、半分は流動資本たる、麥二〇〇クオターの價值を有する資本を以て耕作するとし、されば彼の固定、流動資本を置き換へて後、正味収益一〇〇クオターを得ると、想像した。彼は言ふ、同様に肥沃且つ同様に好位置にある土地が潤澤に存在しつゞくる間、利潤は唯變動を來す。利潤は、若し賃銀が下落すれば上騰するに至り、是は同一所産を得るには、より、少なき流動資本を要するに基く。或は、若し與へられたる費用を以て所産増加が得らるゝが如き改善が農業に行はれたとせば、利潤は上る。然し、彼は讀者に乞ふ、『農業に何等改善が行はれず、且つ資本と人口とが、同一比例に増加し、其の結果、勞働の正味賃銀は、同一に無變化に續くると想像せよ』と。其處で、商業及び農業とに於て利潤は變動せねばならぬ、然らざ

れば、資本は其の二つの中最も有利の方に注がるゝに因ると前提して、彼は利潤率の一般道程を辿り初めた。

最初の移住者の近接場所に於ける凡ての肥沃なる土地が、斯く耕作され盡したる後、資本と人口とが増加すれば、より、多くの食物が要求さるゝ事となり、而して是は、斯く有利の位置に在らざる土地よりのみ得らるゝのである。されば、土地は同様に肥沃なりとし、其の所産を、是が成長する所より、是が消費さる所へ運搬さるゝに、尙多くの勞働者馬匹其の他を雇入るゝ必要あるは、同一所産を得るには、より、多くの資本を永久的に運用せねばならぬと言ふ事が、必然的に起り來る。此の増加が、麥一〇クオターの價值ありと考へよ、新しき土地に要さるゝ全資本は、古き土地に於けると同一収益を得んがために、二一〇となるであらう。而して、其の結果、資本の利潤は、五〇パーセントより四三パーセントに下落し、或は二一〇對九〇となるであらう。

最初耕作されたる土地に於て収益は、以前と同様であらう。即ち五〇パーセント或は麥一〇〇クオターである。然し、一般的資本の利潤は、農業上資本の最低利益に對する運用に生まるゝ利潤に依つて定めらるゝ故に、一〇〇クオターの分割が行はれ、四三パーセント或は八六クオターが資本の利潤を形造り、七パーセント或は一四クオターは地代を形造る事となる。

而して斯かる分割が行はるゝとの事は、吾々が麥二〇〇クオターの價值に相當する資本の所有者は、彼が遠隔の地を開拓しても、或は最初の移住者に、地代として一四クオターを支拂ひたりとしても、全く同一の利潤を得るであらうと考へる時に明白となるのである。

此の階梯に於ては商業に運用さるゝ斯かる總ての資本に對する利潤は、四三パーセント迄に下落するに至る。(1)

斯く、彼が考へたる如く、例ひ穀物の貨幣價格と労働の賃銀とは、極めて些細の程度に於ても、價格上の變動を來さずとするも、利潤は、富と人口との増加と共に下落するであらうと、説明したるリカードは、更に議論を進めて言ふ、ましてや利潤は、富と人口との實際増加に於て下落するであらう、是は、『穀物及び其の他凡ての原所産の價格とは、一國民が富有となり、且つ其の食物の一部の生産のために、不良の土地に據るを強ひらるゝに従ひ、一樣に騰貴する事が觀察さるゝに因る。』更に説明するに原所産の此の價格騰貴は、『凡ての商品の交換的價值が、其の生産上の困難の増すに従ひ騰貴するに基きて現る、而して穀物生産の困難は何等の改善のなしとせば、富の増加と共に増加する、』と。

(1) Works, p. 373.

されば、富の増加が價格に及ぼす唯一の影響は、農業或は製造業の孰れかに於ての一切の改善を離れて、原所産と労働の價格とを騰貴せしむるが如く見へ、他の凡ての商品は、其のものとの價格に留め、且つ賃銀の一般的昂騰の結果一般利潤を下落せしむるが如く見ゆる。(1)

利潤下落の眞の唯一原因は、斯くの如く解釋されたるに依り、彼の爲すために残る凡ての事は、利潤が商業の擴張及び吾々の商品を高く賣るを得、且つ、外國の商品を安く買ひ得る新市場の發見に依り、影響さるゝとの通俗理論を打破して、該問題を疑惑から引き離す事にあつた。

彼は言ふ、農業上の利潤が商業の利潤を支配するには、恰も(同様)商業の利潤が農業上の利潤を支配するが如しと主張するを聞く程、通俗的のものはない。是、彼等は交互に先導となるとの謂である。而して、若し商業の利潤が上騰せば、其の利潤は、新市場の發見されたる時に上ると謂はるゝも、農業の利潤も亦上るであらう。其の故は、若し利潤が上らざれば、資本は土地より除去されて、尙有利の商賣に運用さるゝであらうと、承認さるゝからである。然し、若し地代の増加に關する原則が正しければ、同一人口と資本とを以ては、農業資本の孰れも土地の開拓より除かれぬと共に、農業利潤は上るを得ず、

(1) Ibid., p. 377.

又、地代も下落するを得ざるは明かである。されば商業資本の利潤は農業資本の利潤が何等相違を来さざる場合著しく上るであらうと言ふ事か、或は斯かる事情の下に商業上の利潤は上らぬであらうと言ふ事かの孰れか、経済學の一切の原則と相抵觸するのである。(1)

リカードは「其の後の見解」が「眞のもの」と考へた。新市場に於て得らるゝ高き利潤は、彼惟ふに、極めて部分的、一時的の出来事にして、彼等は直ちに「以前の水準に沈む。」

其の結果は、母國に於て最新の機械の使用より來る結果と全く同一である。

其の機械の使用が、一人或は極めて少數の製造業者に占有さるゝ間、彼等は異常の利潤を獲得するに至る其の故は、彼等が、其の商品を遙かに生産費以上の價格に於て販賣し得るからである。——然し、其の機械が、全商賣一般に用ひらるゝや直ちに、其の商品の價格は實際上の生産費にまで下り、唯、通常一般の利潤を生むに止るであらう。

資本が、一の雇用より他の雇用に轉ずる期間中、資本の移動して止る雇用に對する利潤は、比較的高く、然し是が繼續するに、唯其の必要とする資本が獲得さるゝ迄である。(2)

新なる且つ尙有利なる市場の發見は、利潤を上騰せしめずとなす彼の學說

(1) Works, pp. 379, 380.

(2) Ibid., p. 380.

に對しても、利潤は尙有利なる機械の使用に依つては上騰せずとの彼が假定を見れば、左程驚くに堪へぬ。資本を有利に運用する新しき方法の紹介は資本に對する利潤の率を上ぐるに資するであらうとは、確かに何人も想像し得る所である。然し、リカードは説明する、機械の發見と商業の擴張とは、恰も製造業に於ける勞働の分業の如く、

商品の高を増大し、且つ、人類の安逸と幸福とに資する事大である、然し彼等は、利潤の率に對しては何等の影響を及さぬ。其の故は、彼等は土地の上の生産費と比較して所産を増大せしめず、而して土地の利潤が靜止的なるか、或は退歩的なる場合、他の凡ての利潤が上騰す可しとなすは不可能である。(1)

全議論は二つの提言の眞理に基く、其の第一は、農業利潤は、農業資本の或るものが、土地の耕作より除かるゝに非らざれば上るを得ぬと言ふ事は、其の本文中に言ひ表はされて居る。而して今一つは、農業資本の孰れも、資本と人口と同一に留まる場合は、除かれぬであらうといふ事は、註釋の中に見らるゝ。第一の提言に就きては、リカードは、富と人口との増加が農業利潤に及ぼす影

(1) Works, p. 381.

響に關する彼自身の解釋に基礎を置いて居る。其れ故に、通俗的理論に對抗する彼の議論は、彼自身の學說の正確を假定して出發し、且つ、斯くて、彼の立場に對しては何等新しき勢力を加へぬ。第二の提言に對しては、如何なる農業資本も食物の生産を減少する事なくして除くは困難であり、且つ食物は、人口に對し、必須なりとの理由の下に擁護するのである。然し、其の提言の一つ或は二つも、非道理なるは極めて明白である。リカードが、土地に對する利潤が靜止的なるか、或は減退的なるかの孰れかなる場合、他の凡ての利潤が上騰す可しとするは不可能な事である」と議論したる時は、他の利潤が上りつゝある場合、農業利潤が、靜止的或は衰退的たらねばならぬは不可能なりと言ふ事の全く同様に議論さるとは、彼の氣付く所でなかつたと思はるゝ。如何なる商賣に於ても利潤を引き上げるが如き資本運用の新手段の發見は、農業を含む他の總ての商賣に於て、利潤を引き上げる傾きがなくてはならぬ。或る資本は例ひ、食物が人口に對して、必須なりとも、農業より除かれねばならぬか、或は例ひ、是等利潤は資本が除かれねば上騰するを得ずとなす、リカードの學說あり

と雖も、農業が得る利潤の上騰に依り、資本全體は農業に保れねばならぬ。例ひ、食物が、人口に對して、如何に必須なりとするも、若し他の所で更に大なる利潤を造るを得ば、何人も、農業に投資する者はないであらう。

其の著、原論「利潤に就て」の章の中に、リカードが建設せんと企てたる主要提言は、「總ての國々に於て、凡ての時を通じ、利潤は、地代を生まざる土地に備はるゝ労働者、或は其の資本を以て、備はるゝ労働者の必要品を提供するに要する労働の分量に定まる」と言ふのである、而して、此の提言の系論は、偶然に叙述されたりとして次の如く現はるゝ。

利潤の自然的傾向は、下落する事である。其の故は、社會と富との進捗に於て要さるゝ食物分量の増加は、益々多くの労働の犠牲に依り所得せらる。此の利潤の傾向或は例へば、此の重力は幸にも、必要品の生産と關聯する機械の改善並に農業科學に於ての發見に依り、幾度も阻止されて居る。是が吾々をして以前要した一部の労働を撤回させ、且つ労働者にとり第一の必要品の價格を下落せしむ。(1)

其の章は最も難解と思はるゝ、是は、著者が好んで、特別の場合を想像に因る

(1) 1st ed. p.133; 2d ed in Works, p.66.

算術的引例に依り、一般的提言を證明せんと企てたる結果である。然し其の議論は、實際に於ては極めて單純なものである。

其の「論文」の第一理論、即ち「例ひ穀物の貨幣價格と労働の賃銀とは、最小程度に於ても、價格の變動は來さぬとは雖も、國富と人口との増加する間、利潤は下落するに至ると言ふ事は、再び現れない。此處で、リカードは全く「論文」の第二或はましてやの議論に據る事を好んだ。即ち其の議論とは、穀物の生産上困難の増加は、賃銀を上げ、利潤を引き下ぐる、賃銀とは、勿論正味賃銀、即ち労働者に依り享有さるゝ必要品と便宜との量には非ず、貨幣賃銀を意味する。彼は其の初めの章に於て、「穀物價格は、地代を支拂はざる部分の資本を以て、是を生産するに要する労働の分量に依つて支配さるゝ」と言ふ事、及び「一切の製造商品は、其の生産に要する労働の多寡に比例して、價格は上下する」との事とは、既に彼が證明せりと考へた。随つて彼は論ずる、

穀物及び製造品が常に同一價格にて賣らるゝと假定せば、利潤は賃銀の高低に比例して高く或は低くなるであらう。然し穀物は、是を生産するに尙多くの労働を必要と

するに依り、價格が上騰すると假定す。其の原因は、生産に何等労働の追加量を要さざる製造品の價格を上騰せしめぬであらう。されば、若し賃銀に變化なしとせば、利潤に變化はないであらう。然し絶對的に確かなるは、若し賃銀が穀物の騰貴と共に昂騰す可しとせば、そこで、利潤は必然的に下落するであらう。

若し製造業者が、常に、彼の品物を同一貨幣例へば、一〇〇〇磅に販賣するとせば、彼の利潤は其の品物を製造に要する労働の價格に定るであらう。彼の利潤は、彼が唯六〇〇磅を支拂ふ時よりも、賃銀が八〇〇磅に上る時により、少くなる。(1)

リカード惟ふに、農夫の場合、彼が其の所産に對して價格増加を受くるが故に、相違するであらうと想像する者もあるやも量れずとなす。例ひ「農夫が賃銀に對し、追加價格を支拂はねばならぬに至るとも、價格増加は、彼をして、利潤の同一率」を得さしむるには非らざるか。リカードは答ふ、價格増加は地代或は賃銀増加の孰れかに依り、丁度埋め合はさるゝに至ると。彼は、算術的引例の助けを借り、此の正しきを示さんと努めた。一農夫が、各々六クオター或は二五磅の賃銀に於て十名の人を、備ひ、四磅に對し、麥一八〇クオターを收穫する場合を出發として、若し富と人口とが増加して穀物の價格が騰り、而して

(1) 1st ed. pp. 117, 118; 3d ed. in Works, p. 60.

十人より成る尙多くの團體を備ひ入れ、第一の追加團體は唯一七〇クオターを生産し、第二は一六〇、第三は一五〇、第四は一四〇を生産するとせば、何事が起るであらうかを彼は探究した。穀物の価格は、彼言ふ「是を、より粗悪の土地に作る困難の増加するに比例して」正確に騰貴するであらう。是に依り彼の意味する所は、価格は用ひられた最後の土地に、一つの與へられたる量を作るに要したる人々の數、或は運用された最後の資本に比例して正確に變動するであらう。若し備はれたる最後の十人が、一八〇クオターを作り、且つ其の価格を四磅とし、尙耕作を擴張して、最後に備れたる十人が唯一七〇を作るとせば、価格は四磅の18/17或は四磅四志八片まで上るであらう。最後の十人が唯一五〇クオターを生産する時、価格は四磅一六志まで上るであらう。又、最後の十人が唯一四〇クオターを生産する時、価格は五磅二志一〇片まで上るであらう。此の明白なる算術的結果は、最後の十人の全所産が、例ひ是が幾何なりとせよ、常に、同一量の貨幣に賣らるゝであらう——此の場合に於ては、七二〇磅——而も、尙若し労働者が、此の量より多く所得するとせば、農夫はより

少く所得するであらう。貨幣賃銀が、唯半分の速度としても、穀物の価格と共に益々騰貴すると假定して、穀物の価格が、四磅より四磅四志八片、四磅一〇志、四磅一六志及び五磅二志一〇片まで騰るにつれ、十人の賃銀は二四〇磅より二四七磅、二五五磅、二六四磅、及び二七四磅五志にまで昂るであらう、又其れ故に、最後の十人の全所産が、常に、七二〇磅の價值あるに依り、彼等の雇主に残さるゝ利潤の高は、四八〇磅より四七三磅、四六五磅、四五六磅及び四四五磅一五片迄下るであらうと、リカードは立論した。されば吾々は、最後の十人の雇主が、賃銀昂騰の結果、利潤の絶體高を、より少く受くると知る、然し、未だ彼の利潤率或は歩合に就きては知る所はない、是は、資本の高が叙べられざるに由る。されば、リカードは此の問題を取扱ふ事を企てた。

彼は言ふ、農夫のものと資本を三〇〇〇磅と假定せば、彼の資本利潤は、第一の場合に四八〇磅なるが故に、一六バアセントの率となるであらう。彼の利潤が、四七三磅に低落する時、利潤は一五・七バアセントの率となるであらう。

四六五磅 一五・五バアセント

四五六磅 一五・二パーセント
四四五磅 一四・八パーセント

然し利潤の率は、尙多く下落するであらう、其の故は、農夫の資本は多量の原産に成ると云ふ事を想起せねばならぬ、即ち、彼の秣及び穀物、禾堆彼の打穀されざる麥及び燕麥、彼の馬及び牛、是等は、所産の騰貴の結果、價格が凡て騰貴するであらう。彼の絶對的利潤は、四八〇磅より、四四五磅五志にまで低落する。然し若し、余の今敘述したる原因に由り、彼の資本が三・〇〇〇磅より三・二〇〇磅にまで上る可しとせば、利潤率は穀物が五磅二志一〇片なる時、一四パーセント以下となる。(1)

農夫のもとの資本に對する「ある可し」となす率をば、農夫が實際上好んで用ゆる資本に對して生まる可き利潤率を意味せる利潤の特記「率」より斯く區別して、リカードの解説する所は、最初の十人を備ひ入れ、且つ穀物の價格の騰貴したる時、地代を支拂ひ初むる農夫は、餘り多くを得、而して、最後の十人を備ひ入れ地代を支拂はざる農夫は、餘り少なく得ると見做した。是は、彼が本文に對する註解中に示す表に於て、證明して居るのである。随つて、其の計畫に依り、利潤の標準を立てたのである。利潤の絶體高——四七三磅、四六五磅、四五

(1) 1st ed. pp. 127, 128; 3d ed. in Works, p. 64.

六磅及び四四五磅一五志——是は、相繼いで備れたる最後の十人が、穀物の價格の騰るに従ひ其の雇主に齎すものにして、「農夫」のもとの資本に對しての所得に非ず、新なる農夫の資本に對して、或は、もとの農夫の資本への追加に對しての所得である。もとの資本は、もとの十人と共に、續いて運用さるゝ。新なる十人の團體と共に用ひらるゝ新しき資本は、單に異りたる資本のみに非ず、又同一額たる可き必要もない。然しリカードの立場を表はすに、資本は同一額、或は増加すると假定するは必要である。彼が、一般に、其の計算中になすが如く、其の額は同一なりと假定し、且つ彼が他の材料をも是認して麥一クオターに付き四磅一六志なる時、吾々は、次の表に現はるゝ結果を得る。

人	所	産地	地代	賃	銀	利	潤	資	本	利	率
最後の十人	一五〇量 ^{クオ} 七二〇磅	……	四八磅	二六四磅	四五六磅	三〇〇〇磅	一五・二				
第三の十人	一六〇量 ^{クオ} 七六八磅	……	九六磅	二六四磅	四五六磅	三〇〇〇磅	一五・二				
第二の十人	一七〇量 ^{クオ} 八一六磅	……	一四四磅	二六四磅	四五六磅	三〇〇〇磅	一五・二				
もとの十人	一八〇量 ^{クオ} 八六四磅	……	一四四磅	二六四磅	四五六磅	三〇〇〇磅	一五・二				
合計四十人	六六〇量 ^{クオ} 三二六八磅	……	二八八磅	一〇五六磅	一八二四磅	一二・〇〇〇磅	一五・二				

然し、此の問題に就き、他に何等か確かなる教示がなければ、第二の十人を備ふは、最初の十人を備ふより、少なき資本を以て足り、第三は第二を備ふより少なき資本を以てする、又次も同じと假定するは、全く理由のある事である。此の事實に基き、同一農夫により、同一の土地に全四十人が備はるゝと假定すれば、彼が其の二倍の人のために、資本を二倍するを要するとは全く考へられぬ、其の故は、彼の固定資本の大部分は、恰も同一比例に於て増加するの要はないと言ふ事に由る。一度是が有り得可きなりと認むれば、リカードの精練の學說も、意義を失ふ。彼が資本の絶體的減少、四八〇磅、四七三磅、四六五磅及び四五六磅は、必然的に、利潤率の下落を意味するとは謂へ、彼の凡ての假定を承認すれば、其の率は上騰と符合するものである。

一八〇クオターを生産する第一の十人を備ひ入るゝために、リカードの言ふに従つて、三〇〇〇磅の資本を必要とする、而して利潤は、四八〇磅或は一六バアセントある。されば、一七〇クオターを生産する第二の十人を備ひ入るゝに、次の三〇〇〇磅の資本に非ず、二七八二磅を要すると想像せよ。麥の價

格が四磅四志八片まで上り、而して是等十人が備はるゝ時、リカードに隨へば、彼等の賃銀は二四七磅であり、且つ其れ故に、彼等の雇主の利潤は四七三磅となる。此の四七三磅は、二七八二磅に對して一七バアセントとなる故に、利潤の率は下落する代り、上騰して居るのである。若し第三の十人を備ふに、二六九五磅の資本を要し、且つ彼等の雇主の利潤は、リカードが示す高、四六五磅なりとせば、利潤の率は更に上騰して一七¹/₄バアセントとなるであらう。又、第四の十人を備ふに、二五三三磅の資本を要し、且つ彼等の雇主の利潤は、リカードが示す如く、四一六磅なりとせば、更に利潤の率は上騰し一八バアセントとなる。以前の表に示されたる状態の代り、麥一クオターに付き四磅なる時、吾々は次の如く表はさねばならぬ。

人	所	産地	代賃	根利	利潤	資	本利	利率
最後の十人		一五〇 ^{クオター} 量 七二〇磅	……	二六四磅	四五六磅	二五三三磅	一八	
第三の十人		一六〇 ^{クオター} 量 七六八磅	一九磅	二六四磅	四八五磅	二六九五磅	一八	
第二の十人		一七〇 ^{クオター} 量 八一六磅	五一磅	二六四磅	五〇一磅	二七八二磅	一八	